

東北地方太平洋沖地震を教訓とした  
地震・津波対策に関する専門調査会  
第5回会合

今回の津波における  
高地移転等を行った地域の状況

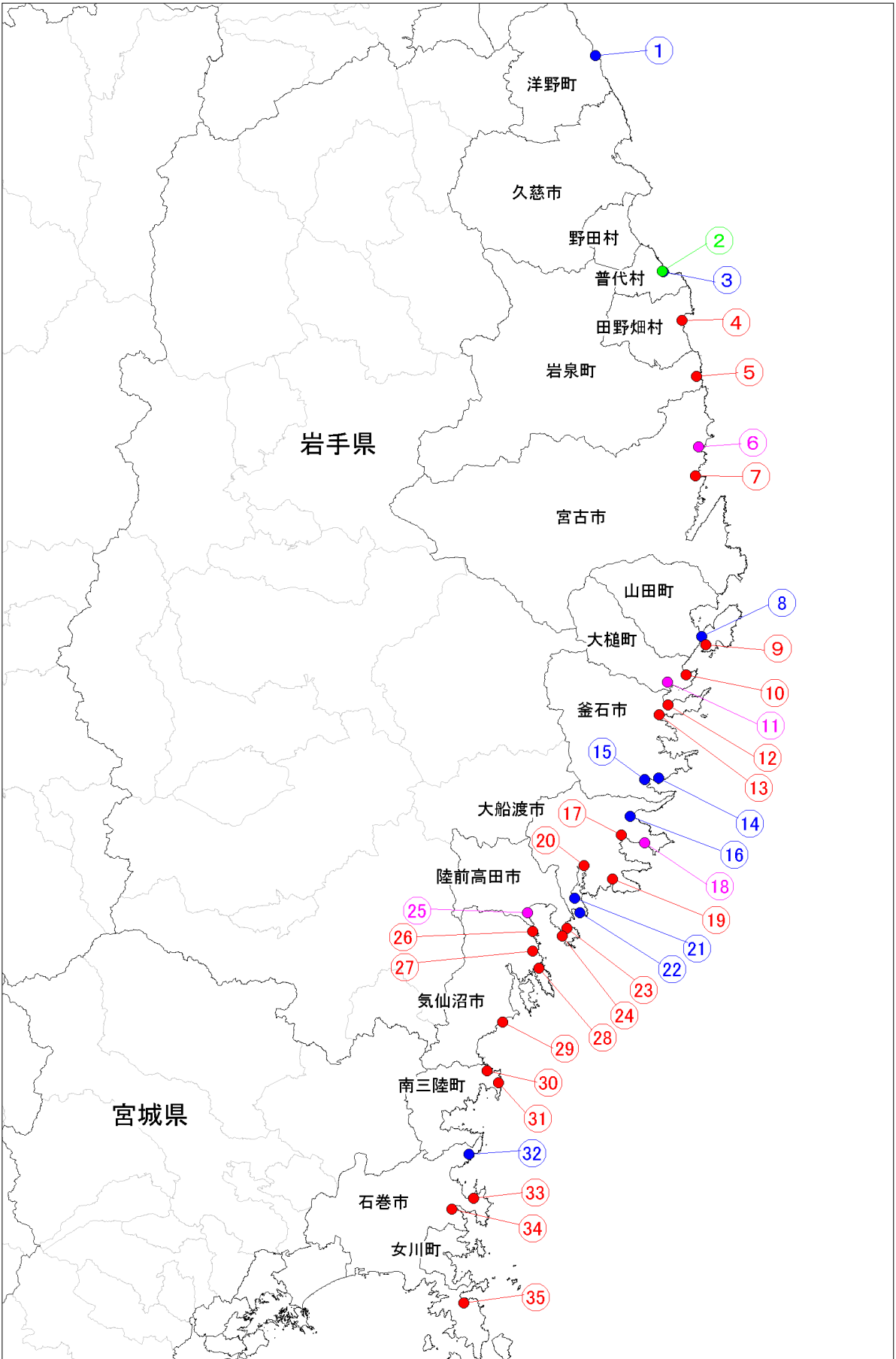
過去に高地移転等の措置が取られた地域における今回の被災状況(※)

		今回の津波被害の状況		過去の津波時の対応					
被害		旧地域名(現在の市町村名)		明治三陸地震津波		昭和三陸地震津波		チリ地震津波	備考
過去に移転を行った地域	なし	①種市村八木(洋野町) ③船越村船越(山田町) ⑤唐丹村小白浜(釜石市) ⑦末崎村細浦(大船渡市) ⑨十三浜村相川(石巻市)	③普代村太田名部(普代村:注) ⑤唐丹村本郷(釜石市) ⑦吉浜村本郷(大船渡市) ⑨末崎村泊里(大船渡市)	① ③ ⑧ ⑭ ⑮	① ③ ⑧ ⑭ ⑮	① ③ ⑧ ⑭ ⑮	なし	一度移転した地域数 4 二度移転した地域数 5 <small>注:普代村は、水門・防潮堤が有効に機能した結果としての無被害を含む。</small>	
	あり	④田野畑村平井賀(田野畑村) ⑥崎山村女遊戸(宮古市) ⑧大槌町吉里吉里(大槌町) ⑩鶺住居村両石(釜石市) ⑫綾里村湊(大船渡市) ⑭広田村六ヶ浦(陸前高田市) ⑯唐桑村大沢(気仙沼市) ⑰唐桑村宿(気仙沼市) ⑱歌津村田ノ浦(南三陸町) ⑲十五浜村船越(石巻市) ⑳大原村谷川(石巻市)	⑤小本村小本(岩泉町) ⑦船越村田ノ浜(山田町) ⑩鶺住居村箱崎(釜石市) ⑫越喜来村浦浜(大船渡市) ⑭赤崎村宿(大船渡市) ⑯広田村泊(陸前高田市) ⑰唐桑村只越(気仙沼市) ⑱大谷村大谷(気仙沼市) ⑲歌津村石浜(南三陸町) ⑳十五浜村雄勝(石巻市)	⑦ ⑨ ⑩ ⑫ ⑲ ⑳ ㉑	④ ⑤ ⑦ ⑨ ⑩ ⑫ ⑬ ⑰ ⑱ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝	④ ⑤ ⑦ ⑨ ⑩ ⑫ ⑬ ⑰ ⑱ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝	④ ⑤ ⑦ ⑨ ⑩ ⑫ ⑬ ⑰ ⑱ ⑳ ㉑ ㉒ ㉓ ㉔ ㉕ ㉖ ㉗ ㉘ ㉙ ㉚ ㉛ ㉜ ㉝	③④ ③④ ③④	一度移転した地域数 15 二度移転した地域数 6
行過去に移動していない地域	なし	②普代村普代(普代村)					② (水門建設)	高さ15.5mの普代水門により、浸水被害なし	
	あり	⑥田老村田老(宮古市) ⑧越喜来村崎浜(大船渡市)	⑩大槌町大槌(大槌町) ⑫気仙町長部(陸前高田市)	⑥ ⑪ (現地復興) (防潮堤) ⑬ ⑰ (区画整理) (現地復興)	⑥ ⑪ (区画整理、防潮堤建設) (防潮堤) ⑬ ⑰ (不明) (防浪堤)	⑥ ⑪ (区画整理、防潮堤建設) (防潮堤) ⑬ ⑰ (不明) (防浪堤)		高地移転が難しかった地域において、海岸堤防を津波が乗り越え被災した。	

出典

- ・東北地方太平洋沖地震の浸水範囲: 国土地理院浸水範囲概況図
- ・1960年チリ地震津波の浸水範囲: 岩手県津波防災マップ, チリ地震津波災害復興誌(岩手県), The Chilean Tsunami of May 24, 1960, チリ津波合同調査班, 地震研究所, 1961.12
- ・1933昭和三陸津波の浸水範囲: 岩手県津波防災マップ, 『地震研究所彙報』別冊第1号、地震研究所、1934
- ・1896明治三陸津波の浸水範囲: 岩手県津波防災マップ
- ・東北地方太平洋沖地震家屋流出区域: 日本地理学会, 津波被災マップ(家屋の多くが流される被害を受けた範囲 ※概ね8割以上の家屋が流出している範囲)
- ・過去の復興計画地域(1896明治三陸津波、1933昭和三陸津波): 内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』, 建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』, 山口弥一郎選集第六巻『日本の固有生活を求めて』, 山口弥一郎『津波常習地三陸海岸地域の集落移動』, 山口弥一郎『津波と村』, (参考) 明治大学 建築史・建築論研究室『三陸海岸の集落 災害と再生: 1896, 1933, 1960』
- ・背景地図: 国土地理院 数値地図25000
- ・背景写真: 国土地理院空中写真(被災地周辺の正射画像データ(オルソ画像))
- ・明治三陸地震、昭和三陸地震の遡上高: 部落近傍付近における浸水位の最高平均を取り平均最大満潮位から測定した値(内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』(1934))
- ・チリ地震津波: 現地調査等によるチリ津波のTP上の高さ(東京大学出版会『日本被害津波総覧【第2版】』(1998))
- ・東北地方太平洋沖地震の遡上高: 移転地域近傍の最高遡上高(東北地方太平洋沖地震津波合同調査グループによる速報値(2011年6月21日参照), 注: 使用データは信頼度Aを使用))

(※)一覧表に記載の地域は、現時点で把握できた範囲であり、網羅できていない可能性がある。  
また、現時点の調査、過去の記録から把握できた浸水範囲、復興計画地域等を地図に表示してあるが、過去の資料が不明瞭であることなど、必ずしも位置が正確でないものも含まれる。



①<sup>たねいち</sup>種市村<sup>やぎ</sup>八木（岩手県九戸郡洋野町）

**【明治三陸地震：遡上高 11.64m】**

1896 年高地に分散移動したが、一部はその後原地に復帰した。

（山口弥一郎「津波常習地三陸海岸地域の集落移動」（「亜細亜大学教養部紀要」第 1 号, 1966/p157））

**【昭和三陸地震：遡上高 6.81m】**

移轉戸数 20 戸、造成敷地は之を二ヶ所に分ち各々 10 戸を收容す、その合計面積 1174 坪、計畫高は何れも明治 29 年波高 11.64m 以上とす。

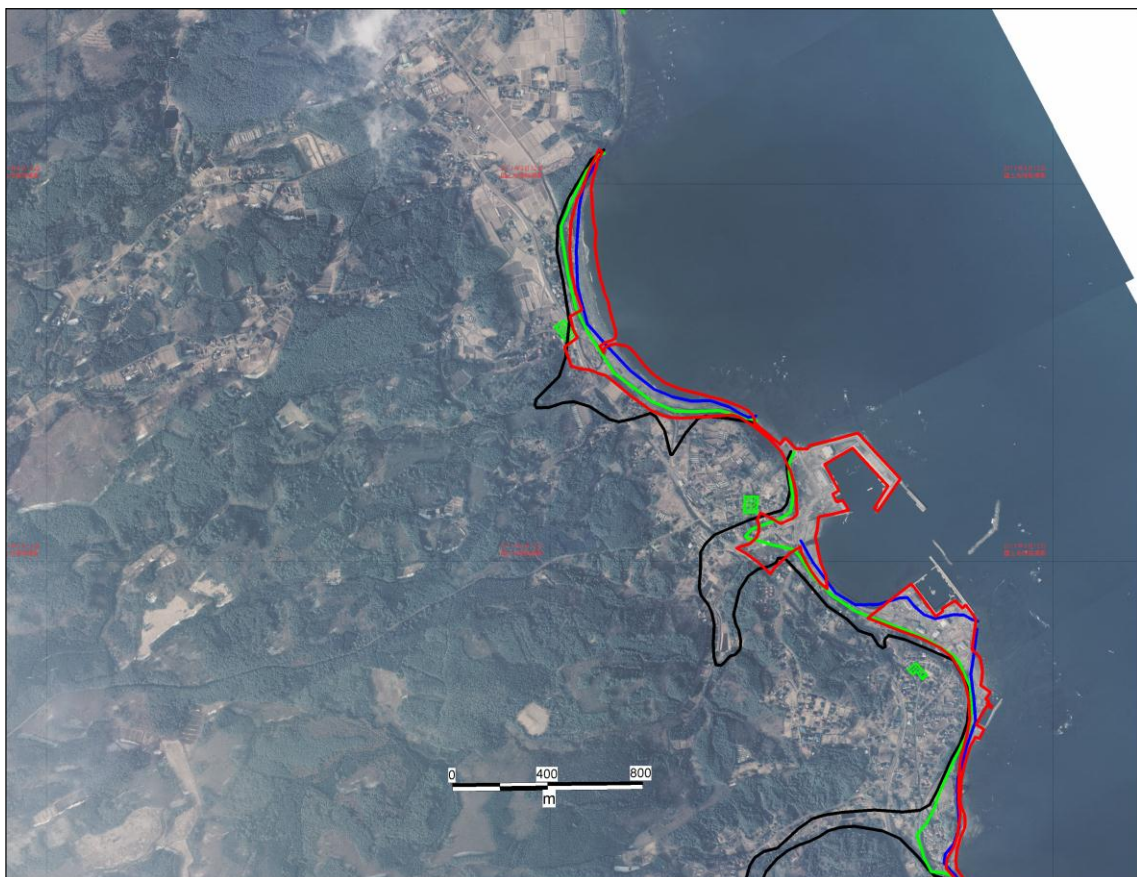
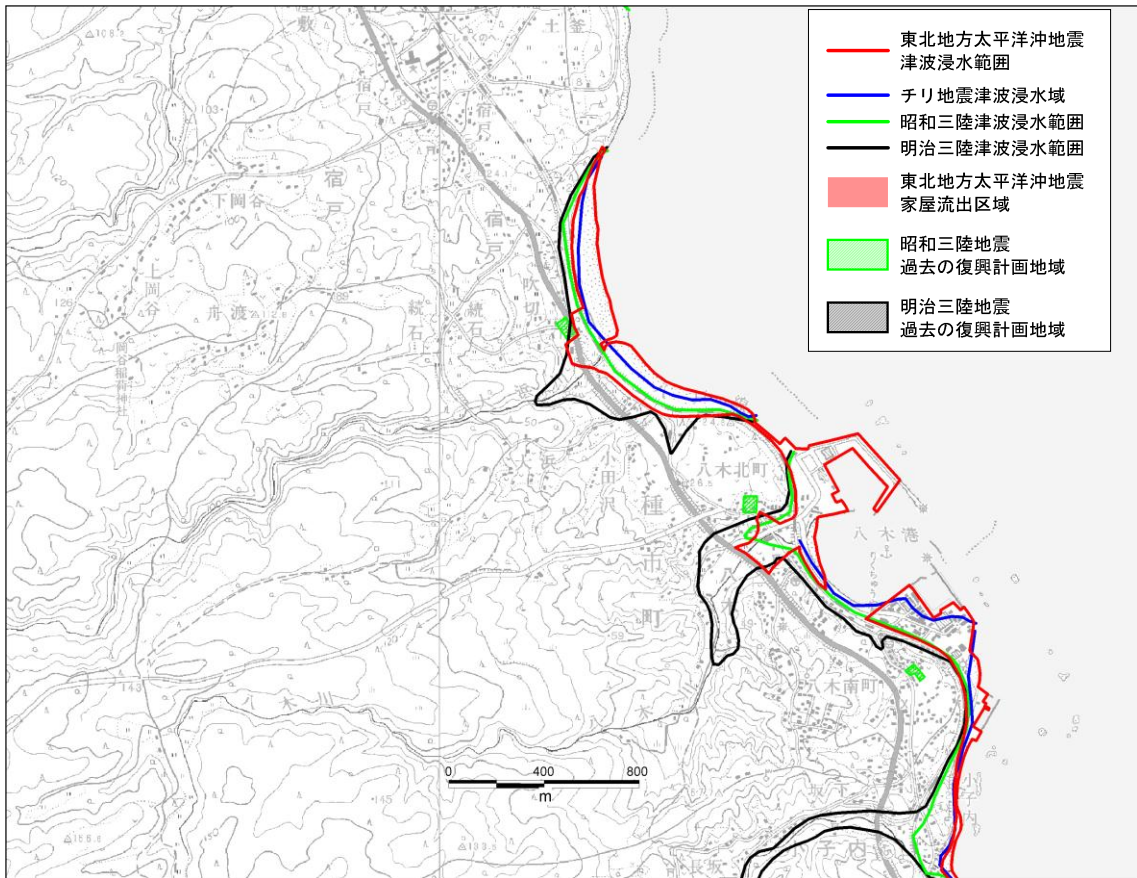
種市村八木では、高地に移動してから、浜辺の原位置に納屋を建てて、家族の一部が仮住まいしているのがあった。これはやがて原地復帰のきっかけになるものと考えられる。

（山口弥一郎「津波常習地三陸海岸地域の集落移動」（「亜細亜大学教養部」第 1 号, 1966）/p. 160）

**【東北地方太平洋沖地震：遡上高 9.5m】**

港湾施設は甚大な被害を受けたが、集落は防潮堤によって守られた。

①種市村八木（岩手県九戸郡洋野町）



## ②普代村普代（岩手県下閉伊郡普代村）

### 【明治三陸地震：遡上高 18.12m】

1000 人以上の死者や行方不明者

### 【昭和三陸地震：遡上高 13.0m】

（記録なし）

### 【チリ地震津波：遡上高 2.6m】

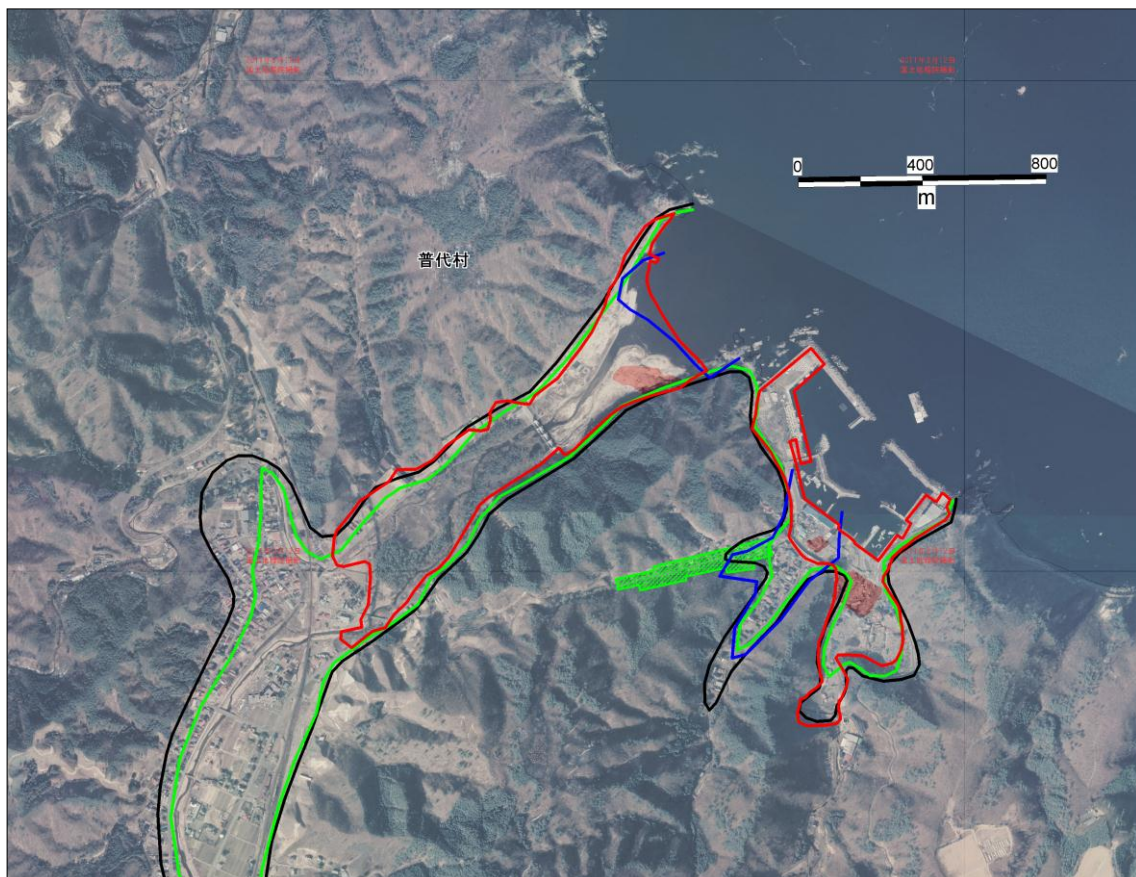
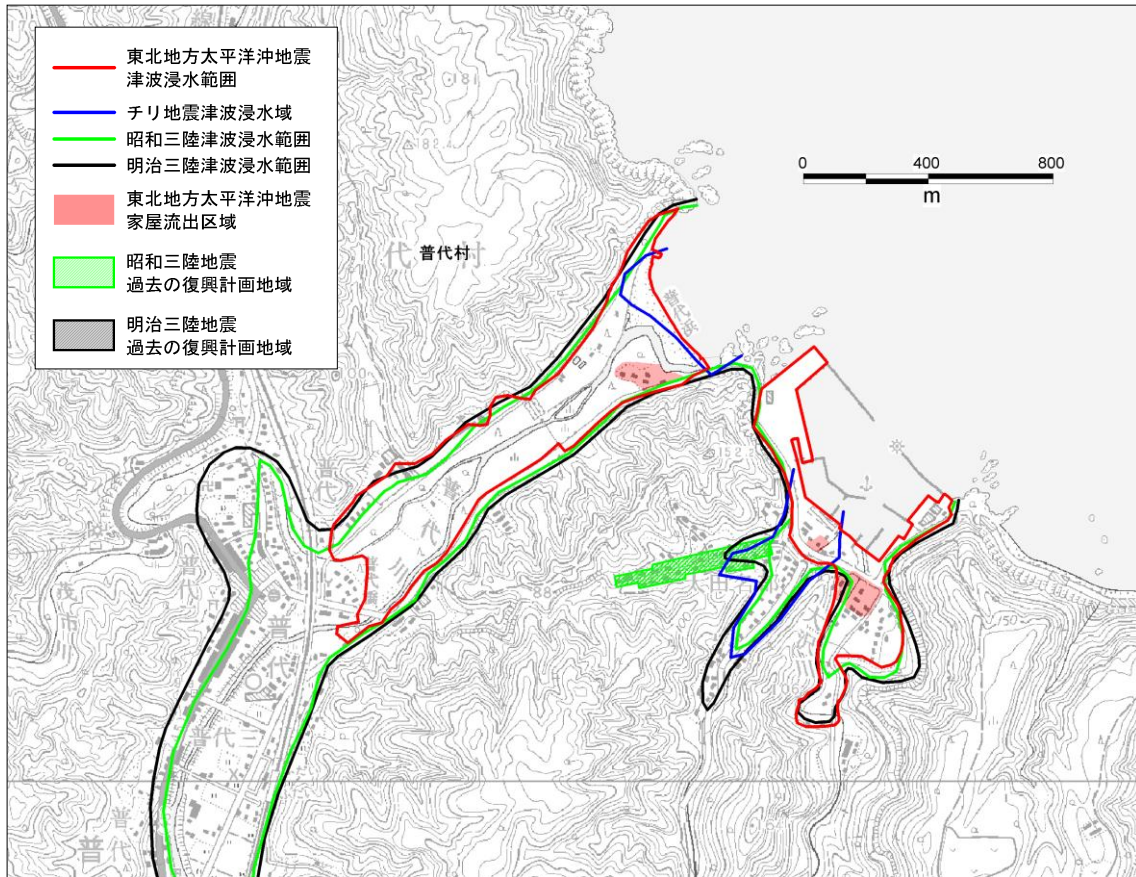
普代川の河口から、高さ 15.5m、長さは約 200m の普代水門を約 300m 上流に建設。

### 【東北地方太平洋沖地震：遡上高 24.2m】

津波は到達時に水門を越えたものの、住宅などに浸水の被害はなかった。

※住宅への浸水被害はなかったものの、水門や防潮堤の下流側で水産加工場が全壊するなど、漁業施設に大きな被害あり。

② 普代村普代（岩手県下閉伊郡普代村）



おおたなべ  
③普代村太田名部（岩手県下閉伊郡普代村）

**【明治三陸地震：遡上高 18.12m】**

1896 年高地に分散移動したが、一部はその後原地に復帰した。  
(山口弥一郎「津波常習地三陸海岸地域の集落移動」(「亜細亜大学教養部」第 1 号, 1966)/p. 157)

**【昭和三陸地震：遡上高 13.0m】**

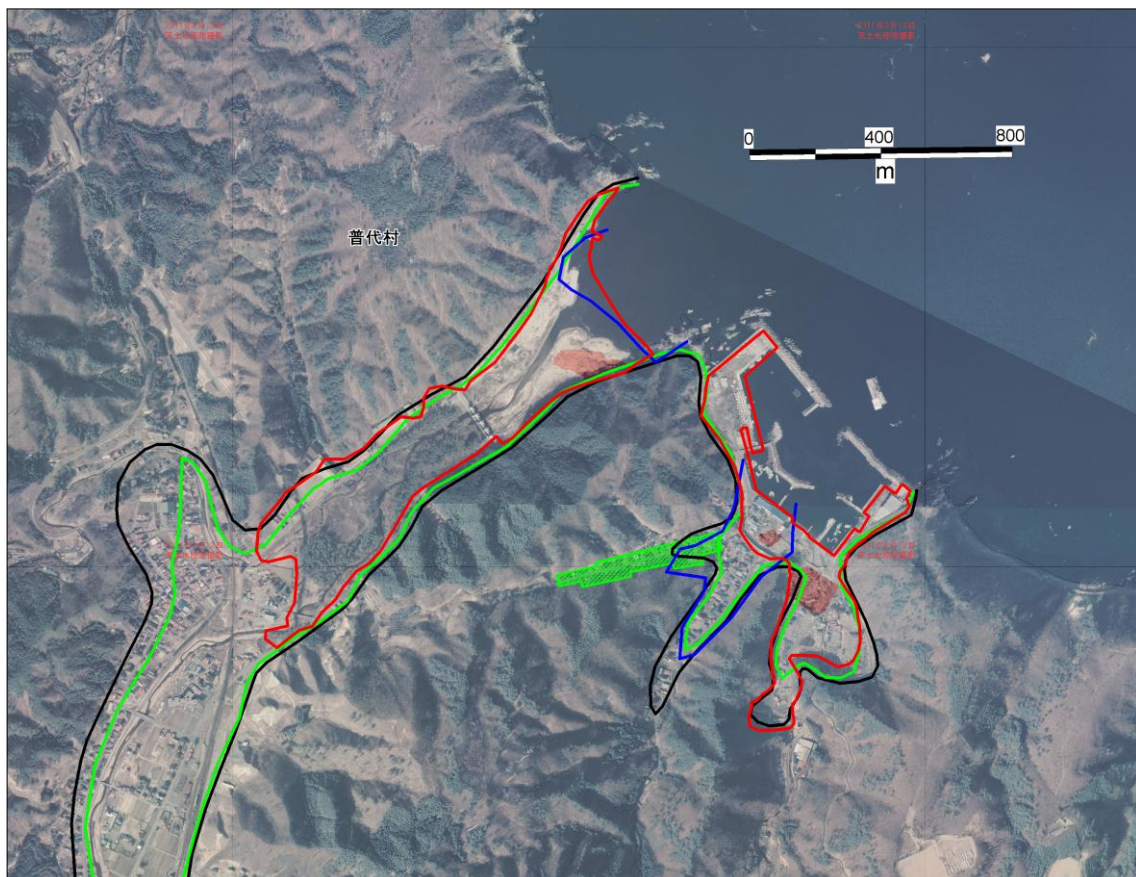
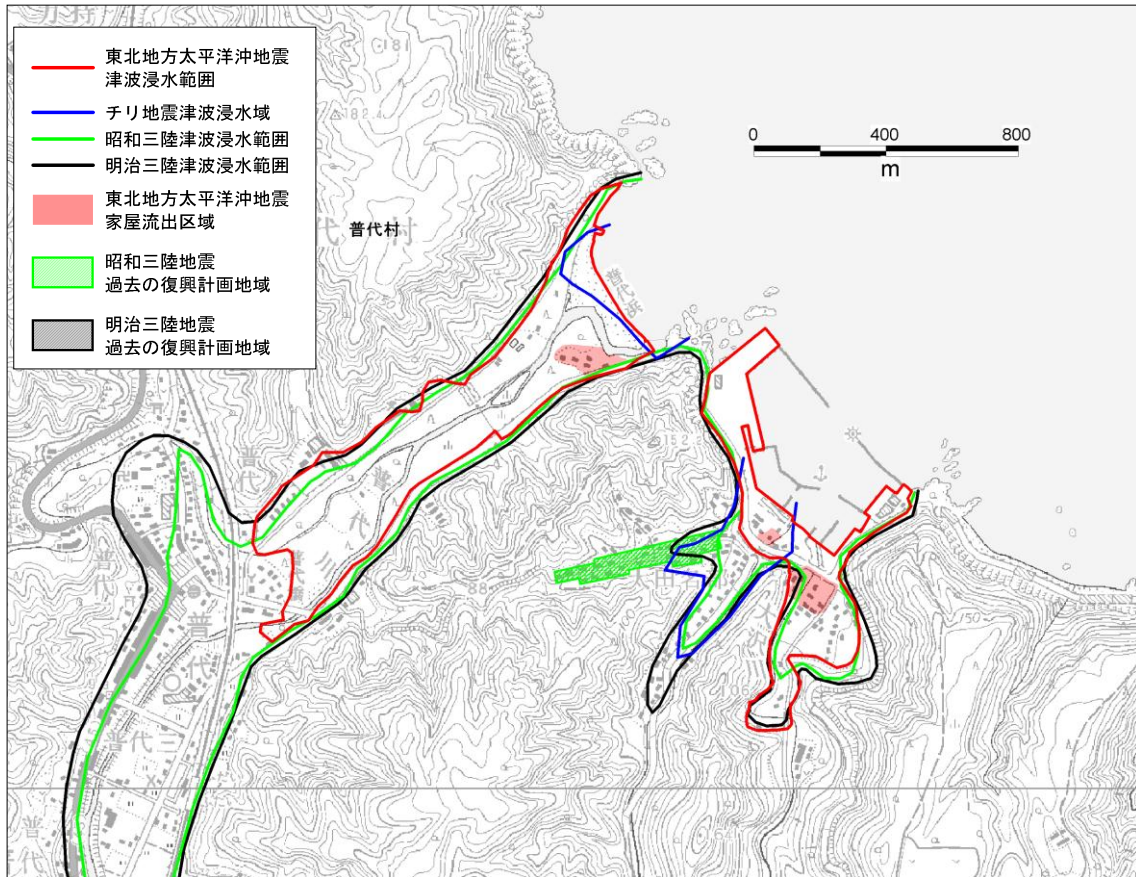
津浪浸水高明治 29 年 18.12m、昭和 8 年 13m、造成敷地高 11m 以上にして、一部浸水位下に在るもその前面に防浪堤の計画あり。造成敷地は相當の勾配を有する細長き谷地に之を選定し、その面積 3559 坪、中央に幅員 5.5m の縦貫道路を設く。収容戸數 54 戸。  
(内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』(1934))

**【東北地方太平洋沖地震：遡上高 9.2m】**

高さが 15.5m、長さ約 130m の太田名部防潮堤が効果を發揮。津波は防潮堤の高さ約 14m の位置で止まり、背後の集落に被害はなかった。  
※住宅への浸水被害はなかったものの、水門や防潮堤の下流側で水産加工場が全壊するなど、漁業施設に大きな被害あり。



③ 普代村太田名部（岩手県下閉伊郡普代村）



④ <sup>ひらいが</sup> 田野畑村平井賀（岩手県下閉伊郡田野畑村）

【明治三陸地震：遡上高 15.8m】

（記録なし）

【昭和三陸地震：遡上高 10.0m】

住宅適地は之を二ヶ所に分ち、一は舊部落地北方斜面を切り均して 17 戸を收容し、他は舊部落より西北方約 350m を隔てたる山間の平地部〔部落共有地〕を選定し、30 戸を移轉せしむ。

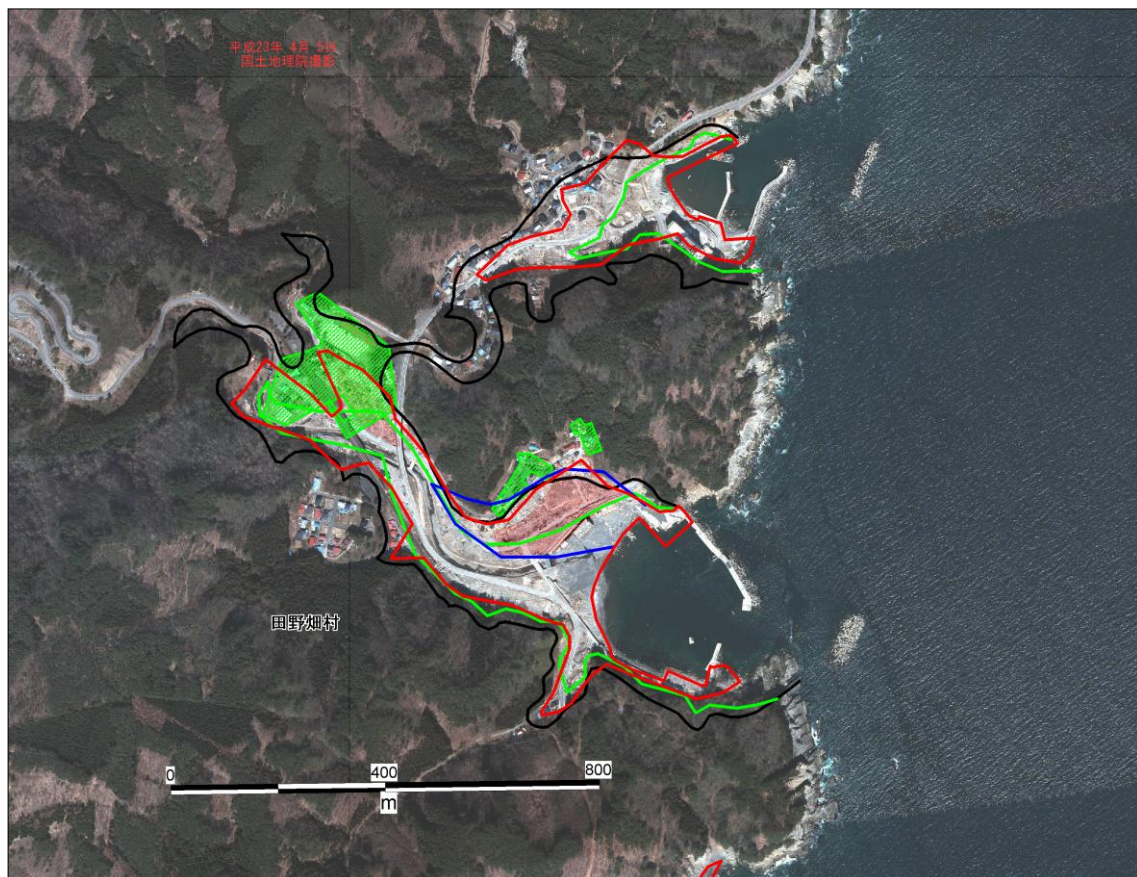
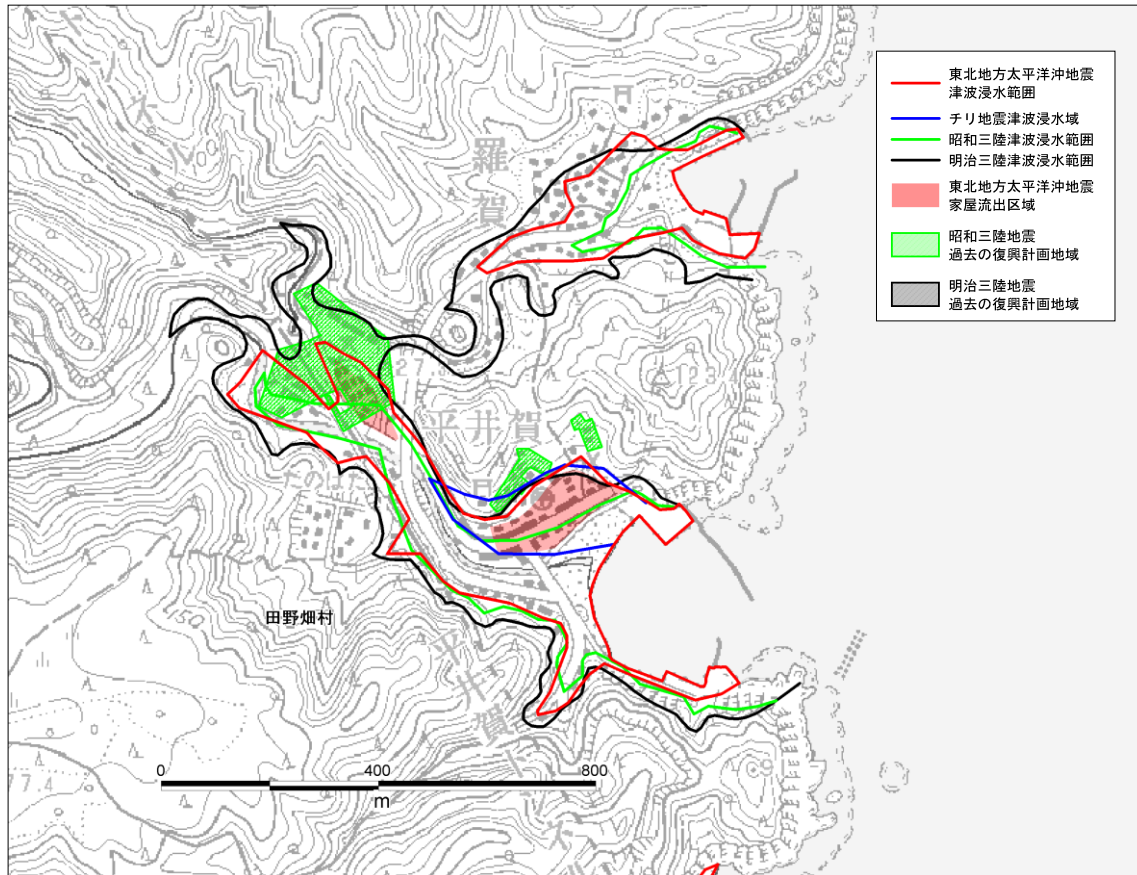
（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 17.5m】

移転先も浸水、家屋流出。

山際の数戸、山間平地部の最も海から離れたところは数戸家が残っている。

④ 田野畑村平井賀（岩手県下閉伊郡田野畑村）



⑤小本村<sup>おもと</sup>小本（岩手県下閉伊郡岩泉町）

【明治三陸地震：遡上高 11.6m】

（記録なし）

【昭和三陸地震：遡上高 8.6m】

部落東南方縣道沿の平地を計畫高 13m 以上に盛土し、3314 坪の敷地を造成し、71 戸を收容す。

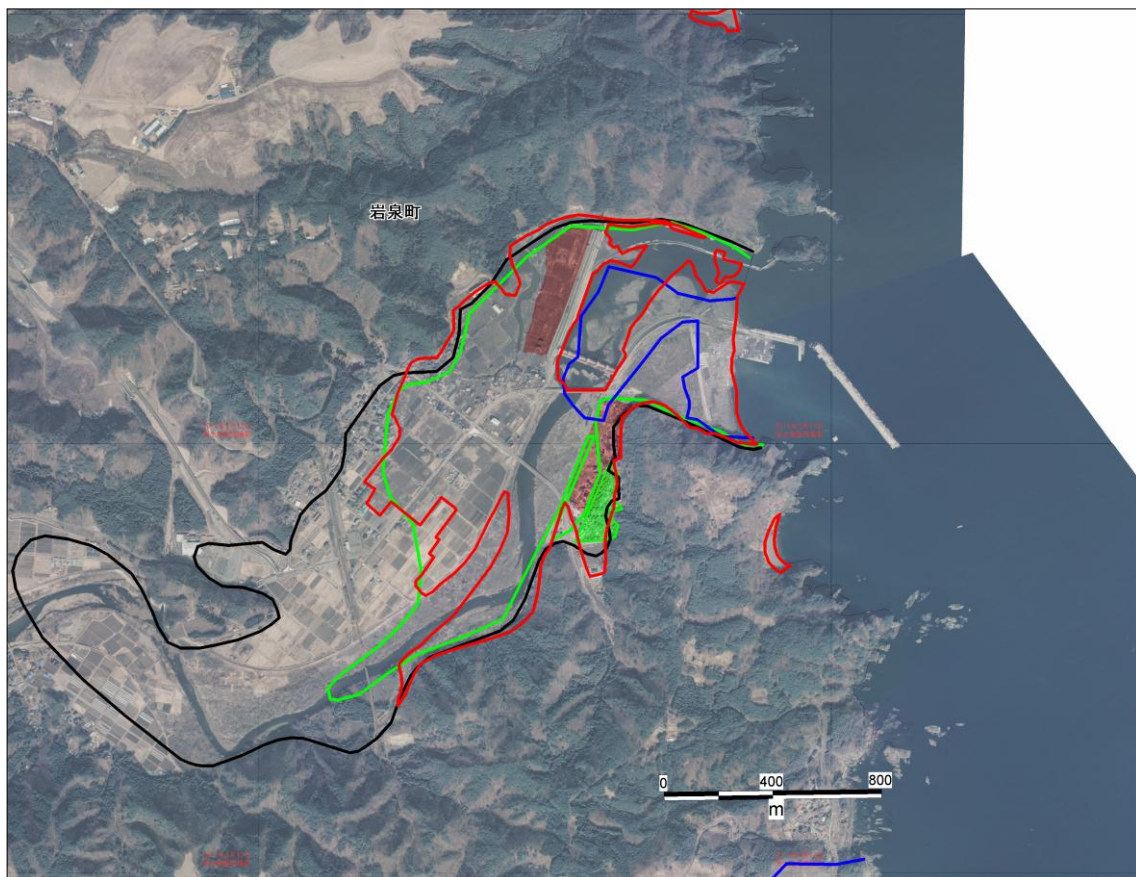
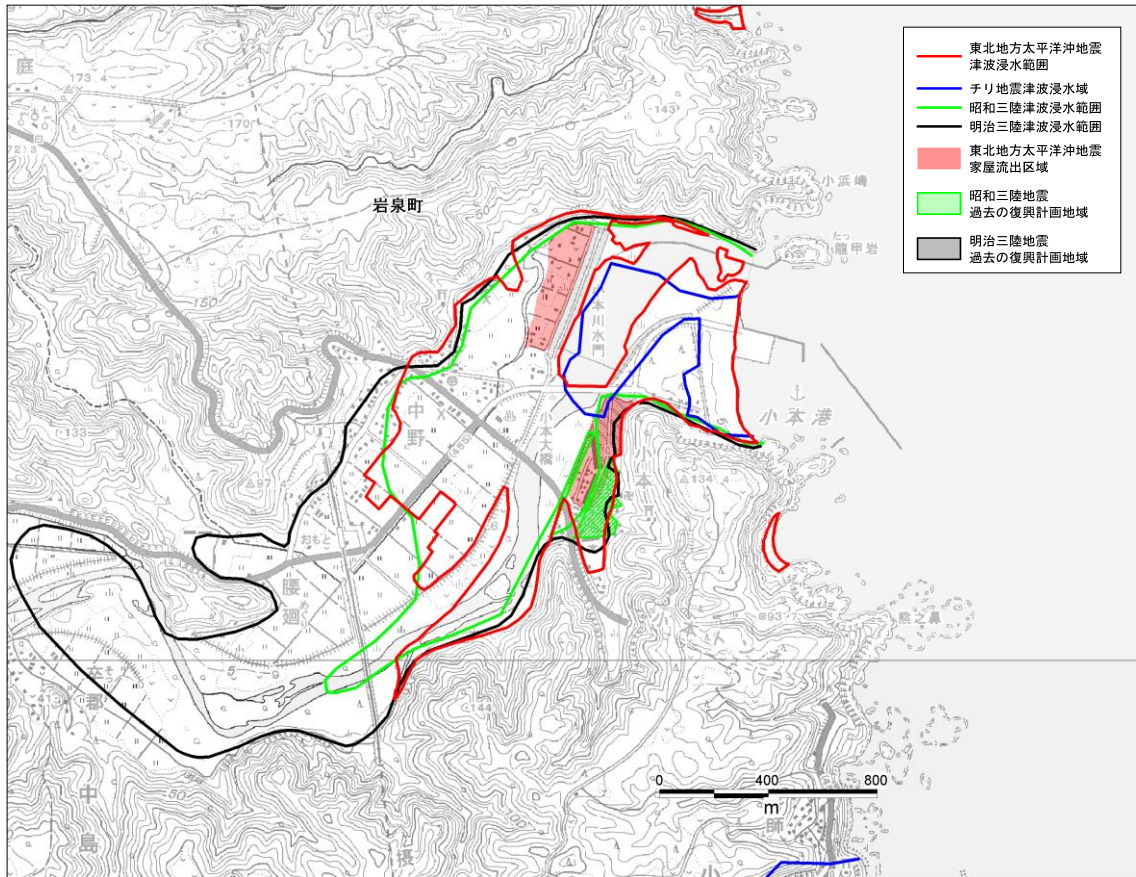
（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

【東北地方太平洋沖地震： 遡上高 13.9m】

移転先においても、ほぼ全地域が浸水。

流失の被害も一部あり。

⑤小本村小本（岩手県下閉伊郡岩泉町）



## ⑥田老村田老（岩手県宮古市）

### 【明治三陸地震：遡上高 13.64m】

義損金を基金として 2m の盛土により宅地造成の計画をたてたが、意見の不一致と資金難のため、道路沿いに約 50cm 盛土することに終わって原地復興の型となった。

（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961）/p. 75）

### 【昭和三陸地震：遡上高 7.6m】

高地移転の意見もあつたが、500 戸を収容する適地がないので、原地の区画整理（耕地整理）により宅地を造成し、防浪堤によって囲む計画を実施した。

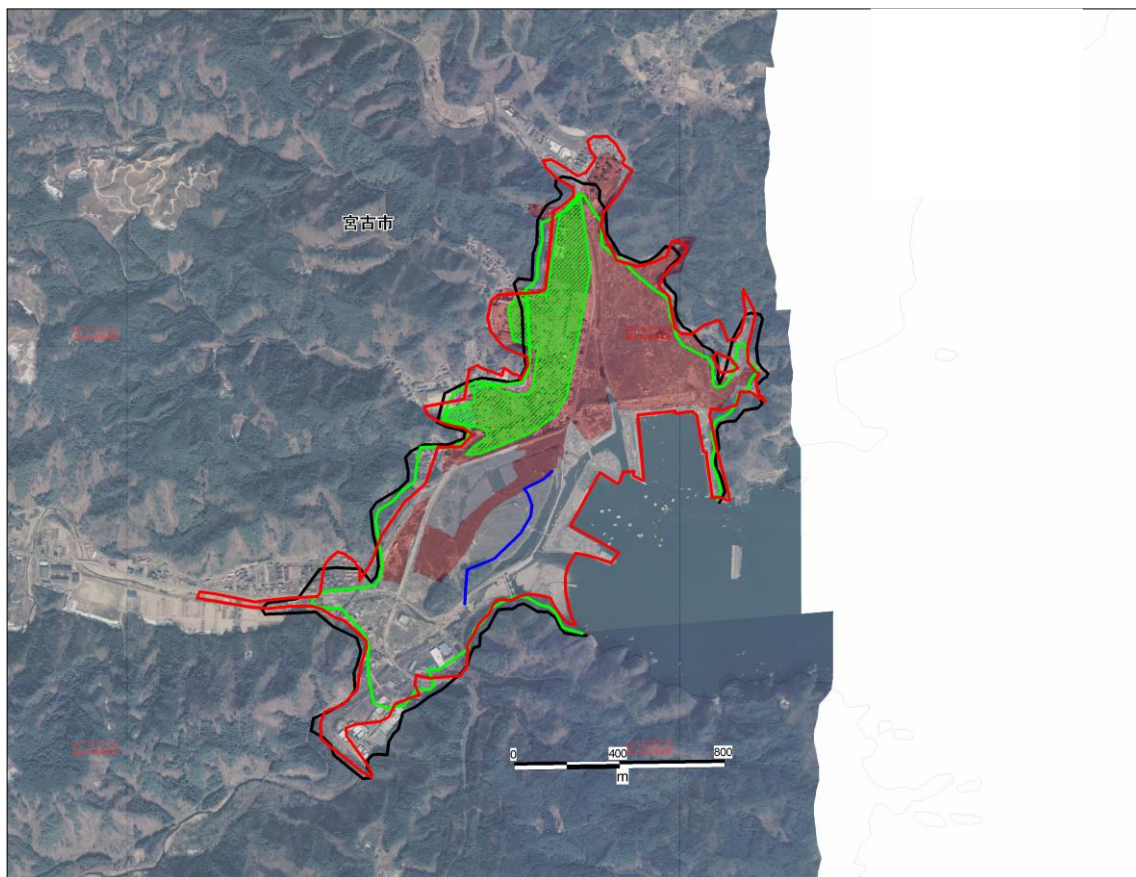
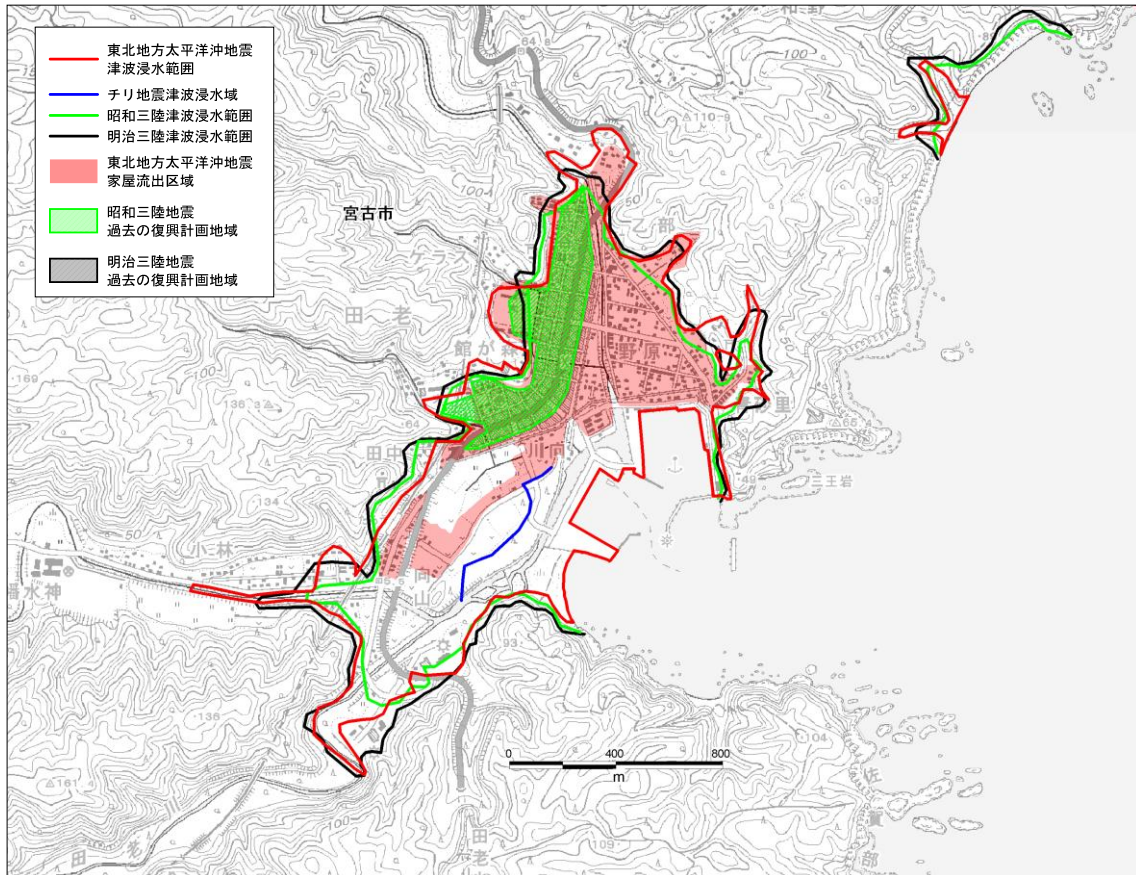
防浪堤は 900m まで完成して戦時中に中止されたが昭和 33 年、延長 1,350m、上幅 3m、根幅最大 25m、高さ 7m、海面上 10.65m の大防浪堤を完成した。

（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961）/p. 75）

### 【東北地方太平洋沖地震：遡上高 14.6m】

すべての地区が浸水。流失も多数。

⑥田老村田老（岩手県宮古市）



⑦ <sup>さきやま</sup> <sup>おなっぺ</sup> 崎山村女遊戸（岩手県宮古市）

【明治三陸地震：遡上高 一】

約 1000m 後方の緩傾斜地をなせる澤に移り、此處に復興せり。之も他のものと同じく自力移轉にして組織的復興計畫に非ざりし爲め各戸點在せり。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

【昭和三陸地震：遡上高 一】

戸數 23 戸の内僅かに 1 戸のみ些少の侵水を被りたるのみにて、人口 184 人中 1 名の死傷者をも出さず。

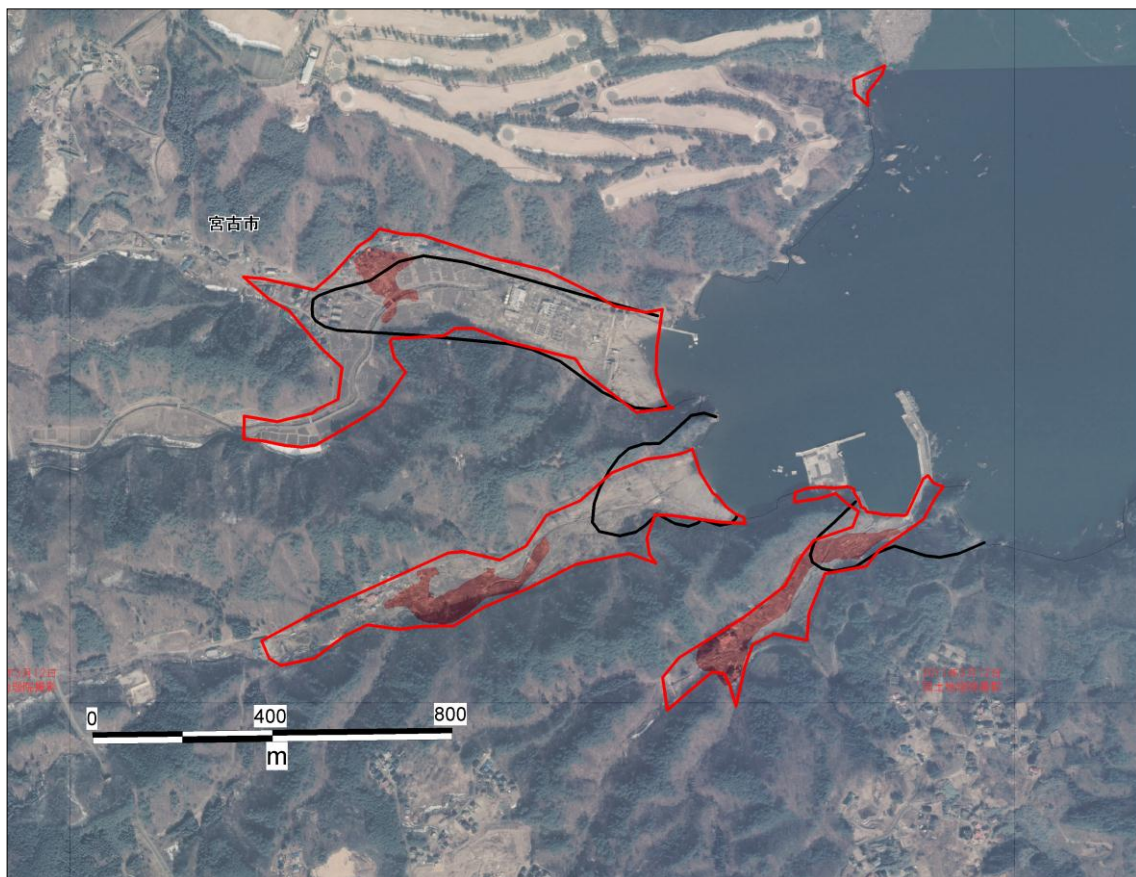
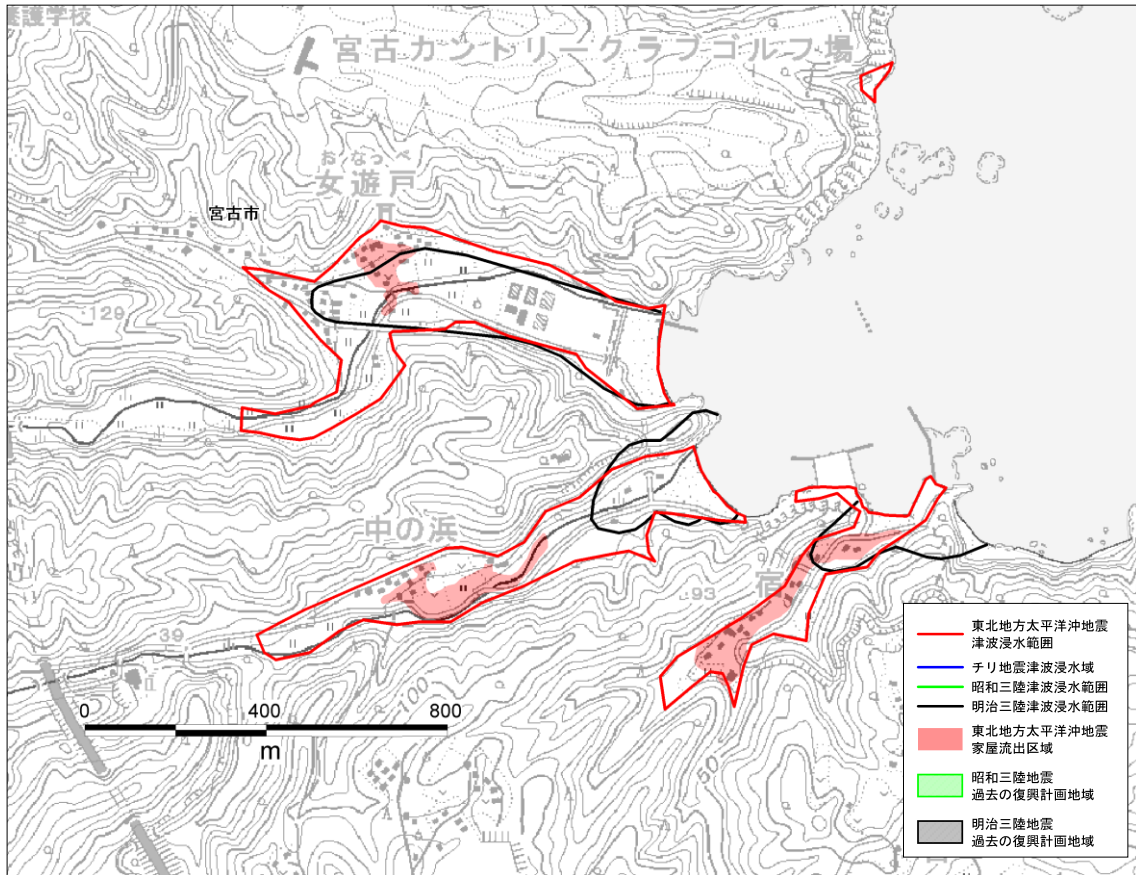
（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 18.2m】

移轉先の沢でも海から最も距離のある場所は浸水も免れているが、集落の 6 割以上の地域で浸水、流出家屋も 3 割ほどみられる。



⑦ 崎山村女遊戸（岩手県宮古市）



⑧ ふなこし ふなこし船越村船越（岩手県下閉伊郡山田町）

**【明治三陸地震：遡上高 6.58m】**

船越〔山田町〕では古くから低地居住の非を教えられた伝説が残っていた。

明治 29 年には波高 6.6m の津波で砂堆上の部落はほとんど壊滅した。その部落では自主的に高地移動の計画をたて、段丘上に敷地造成をして集団移動を実施した。

（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961）/p. 68）

**【昭和三陸地震：遡上高 3.55m】**

昭和 8 年の津波は 3.5m であつたが、高地移動村落は被害をまぬがれた。しかし、低地の新しい居住者は流失倒壊 24 戸、死者 2 人の被害を受けた。

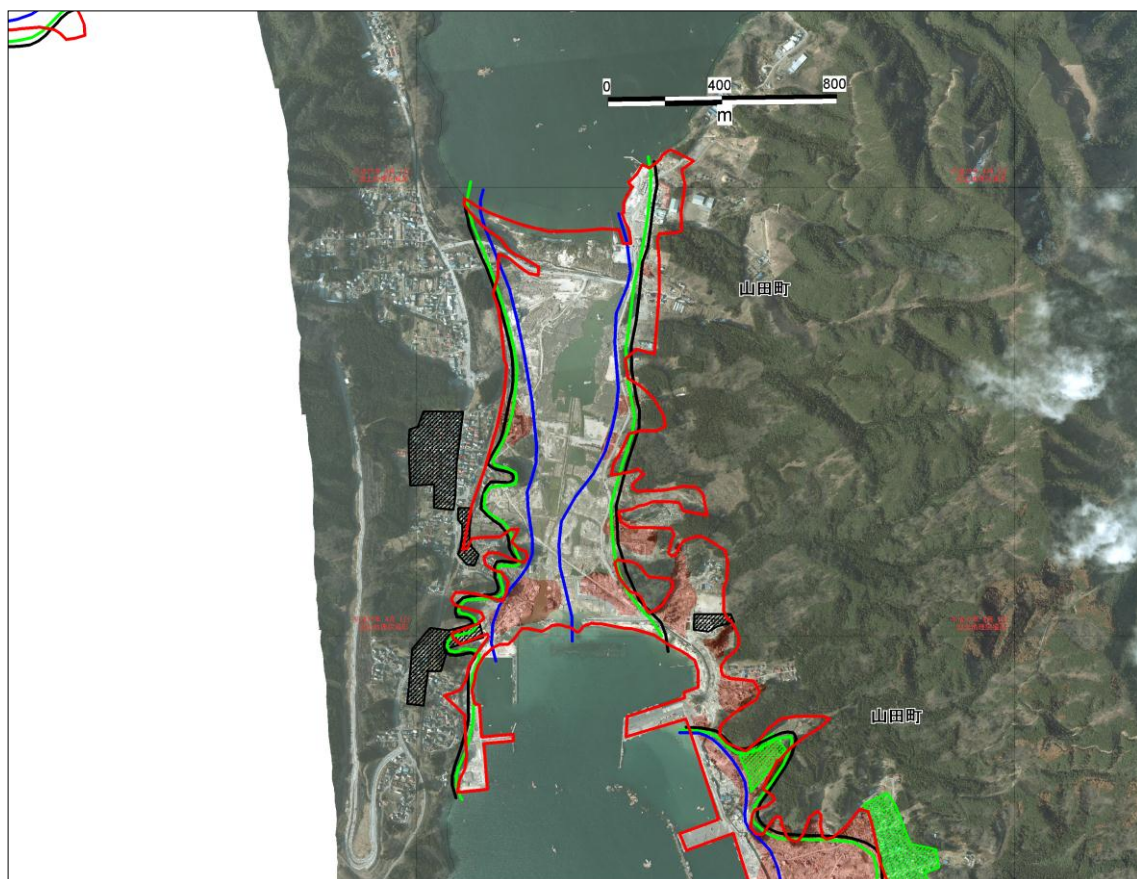
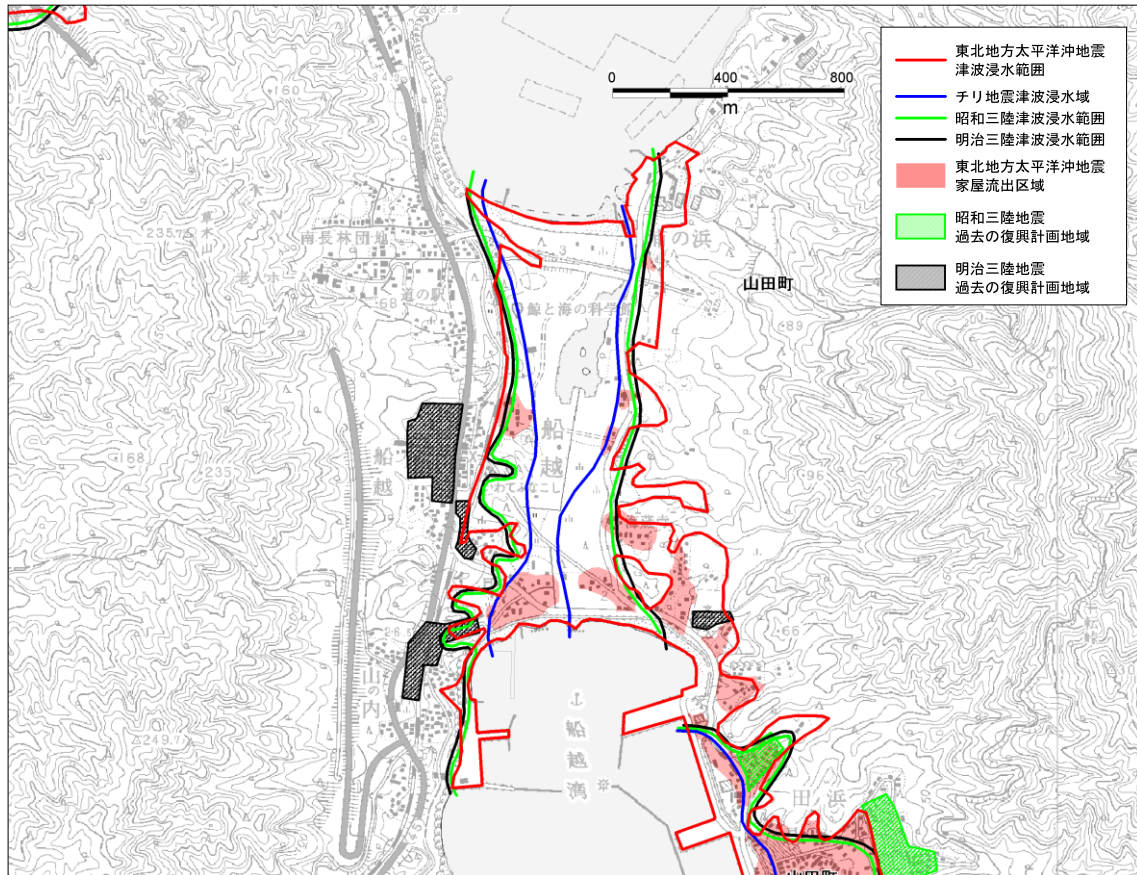
（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961）/p. 68）

**【東北地方太平洋沖地震：遡上高 15.9m】**

段丘上の集団移転地区は浸水を免れる。

低地にあった住宅はほぼすべて浸水・流失している。

⑧船越村船越（岩手県下閉伊郡山田町）



⑨<sup>ふなこし</sup>船越村田ノ浜（岩手県下閉伊郡山田町）

**【明治三陸地震：遡上高 9.11m】**

田ノ浜〔山田町〕は明治 29 年、9.11m の波高の津波に襲われ、部落は全滅に近い被害を受けたので、船越と合併して高地移転を計画したが、意見の統一を欠いたため、田ノ浜は独自に 800 円を支出して背面の傾斜地に敷地造成を行ったが、時間が経過するにたがって防災意識が低下し、元屋敷に復興するものが多くなり、原地再建に終わった。（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961）/p. 68）

**【昭和三陸地震：遡上高 6.08m】**

低地の再建部落は 256 戸のうち 185 戸流失倒壊し、死者 2 人。

（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961 年）/p. 68）

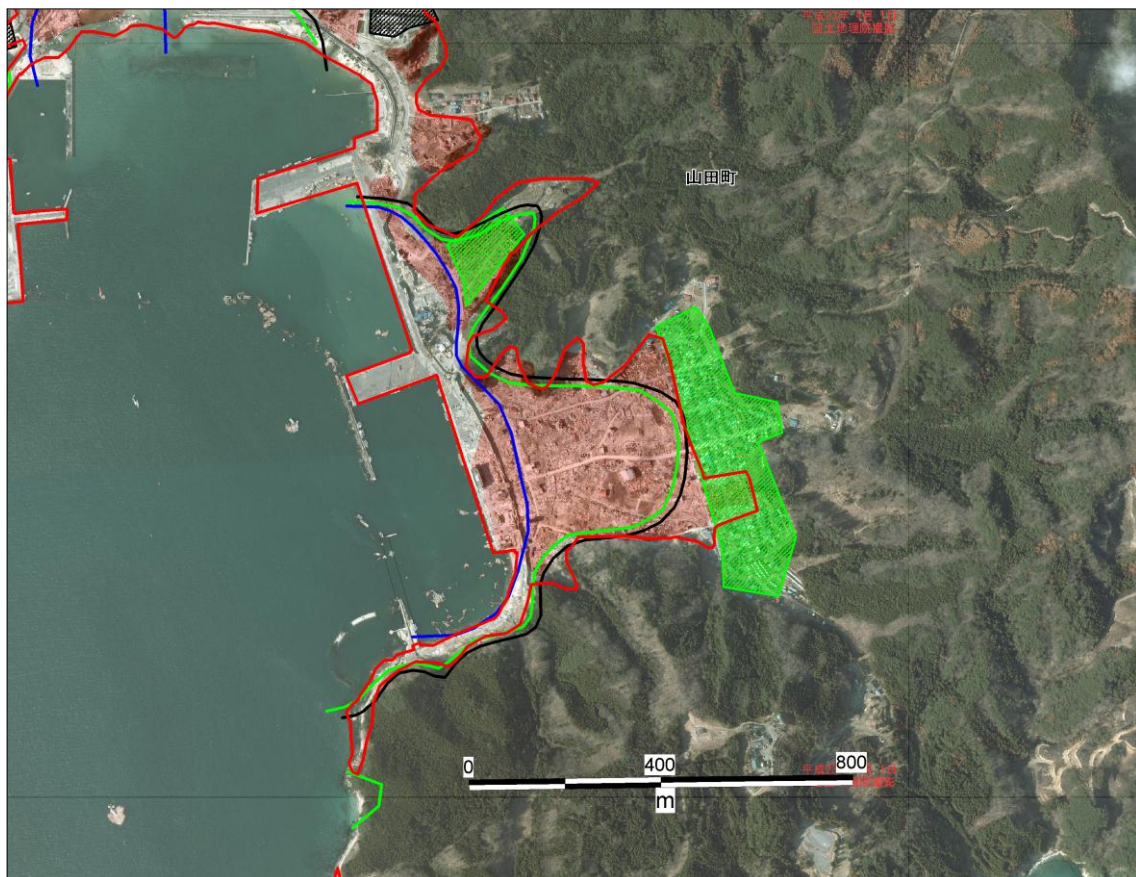
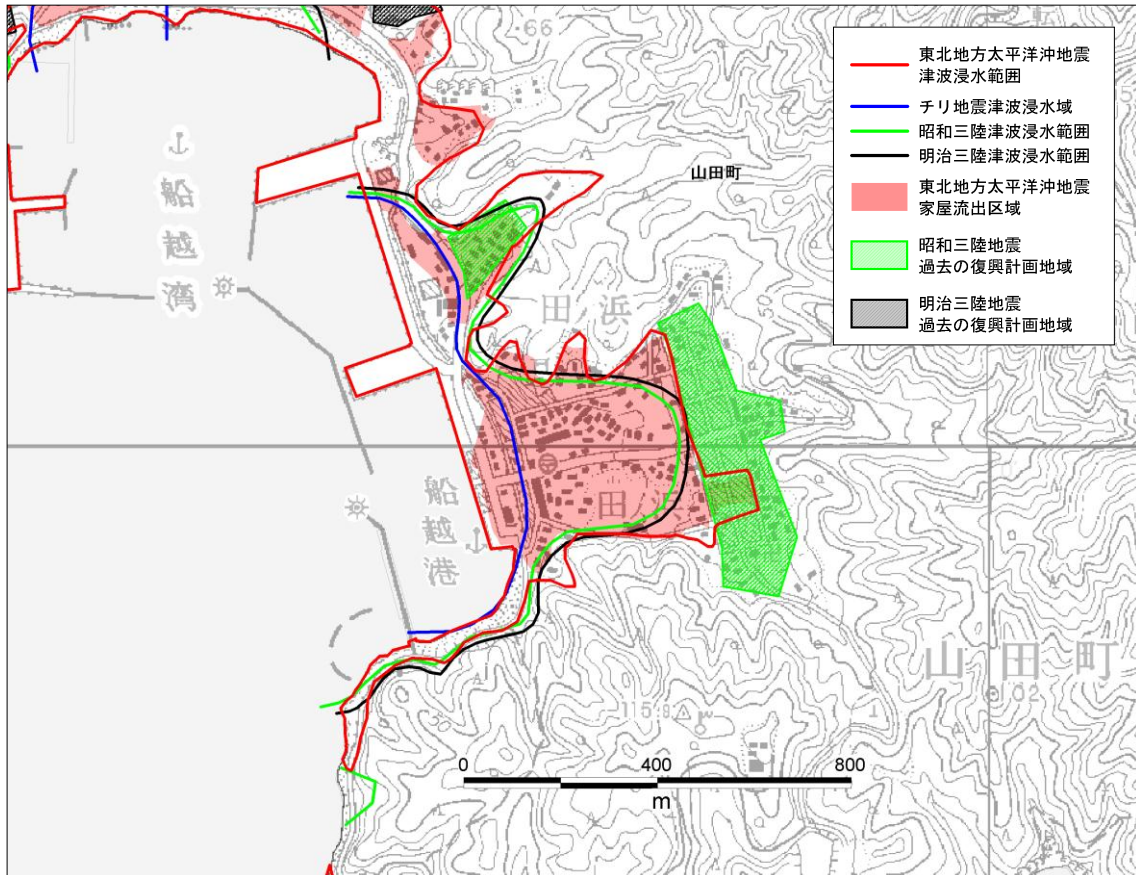
全部集落高地移動を決定した。約 300m 背面の斜面に地盤高 14.7m 以上の高さを保ち、12,197 坪の宅地を造成し、被害戸数 196 戸に対して 240 戸収容可能にした。整然として方形の区画をとり、理想的高地住宅を建設した。

（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961 年）/p. 75）

**【東北地方太平洋沖地震：遡上高 14.8m】**

移転先一部で浸水・流失被害が見られる。

⑨船越村田ノ浜（岩手県下閉伊郡山田町）



## ⑩大槌町<sup>きりきり</sup>吉里吉里（岩手県上閉伊郡大槌町）

### 【明治三陸地震：遡上高 8.5m】

當時の戸数は160戸以上にも達していたらしいが、内100戸以上流失の大被害があり、西北部山麓の道路沿ひに約50戸は夫々移動を完了した。

（山口弥一郎『津波と村』（恒春閣書房, 1943）/p. 94）

昭和8年までには吉里吉里でも10戸程は漸次戻っていた。

（山口弥一郎『津波と村』（恒春閣書房, 1943）/p. 95）

### 【昭和三陸地震：遡上高 4.2m】

部落後方地盤高11.8m以上の緩斜面に、4932坪の敷地を造成し、100戸が移動した。

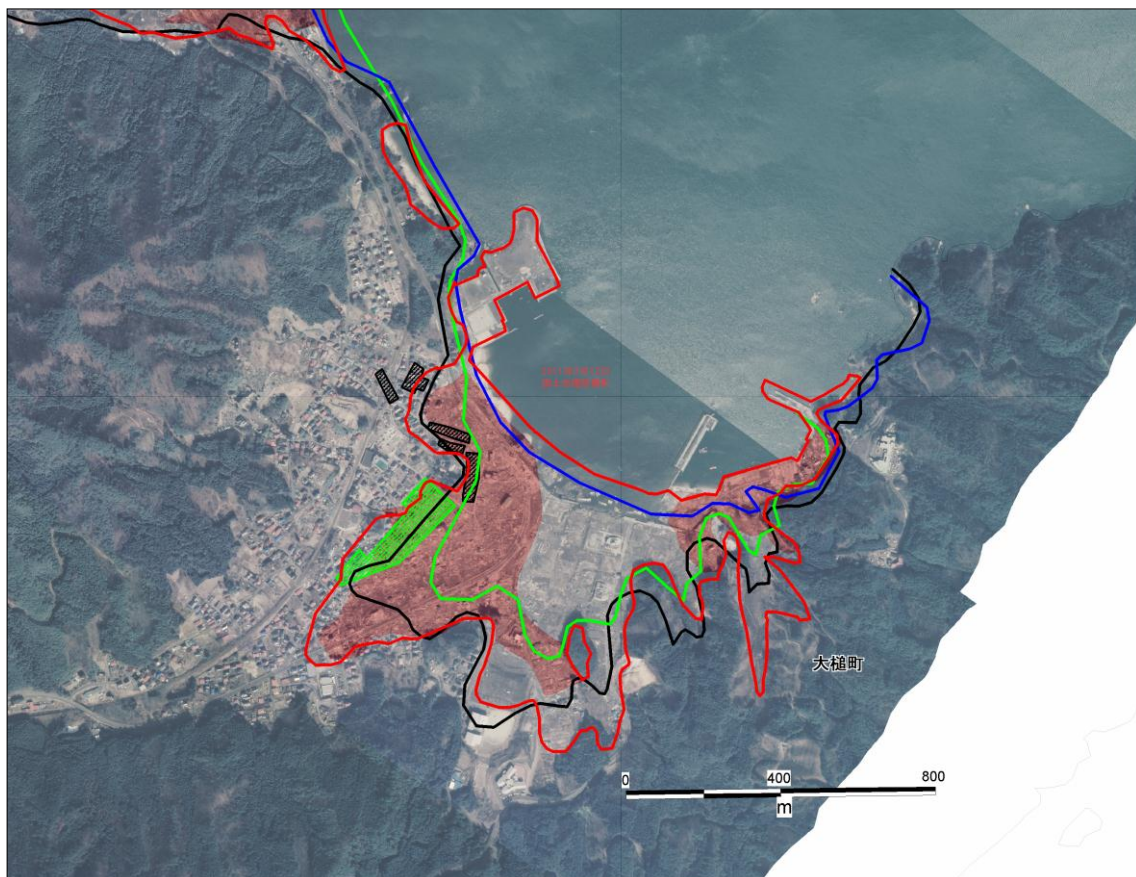
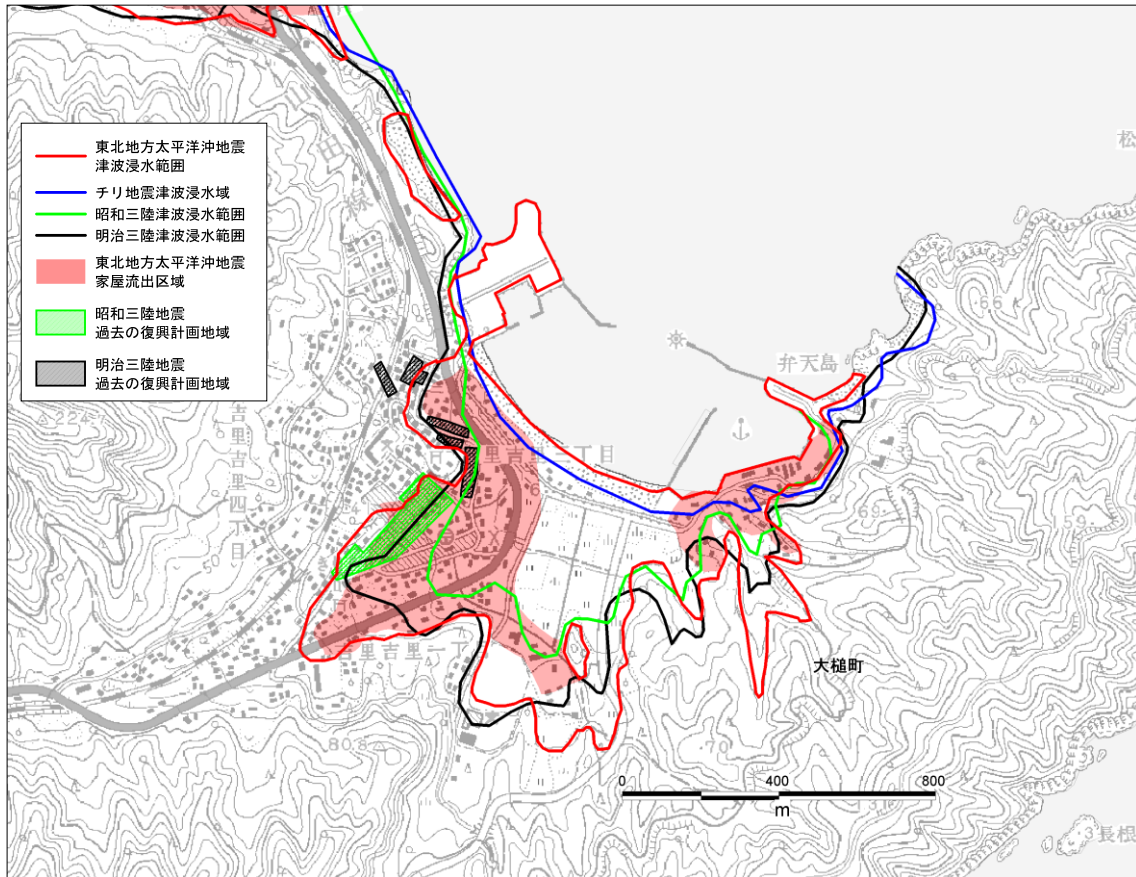
敷地は住宅適地造成事業に依り造成し、之に半壊以上の被害住宅100戸を移轉せしめ、建築に要する資金は産業組合に於て借入れ、建築用材の購入、設計、建設に至る迄購買組合の事業として經營し、一齊に建築を完成せしめ、之を居住者に年賦掛込の方法に依り賣却す。津浪に依り床上浸水程度の被害を受けたる住家は之が移轉實費を供給し急速に移轉せしめ、殘餘の住宅をも漸次高地に移轉せしめ、全部落の移轉を圖る。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

### 【東北地方太平洋沖地震：遡上高 18.6m】

整備した地区の南西側半分の地域の浸水・家屋流出が多い。

⑩大槌町吉里吉里（岩手県上閉伊郡大槌町）



## ⑪大槌町大槌（岩手県上閉伊郡大槌町）

### 【明治三陸地震：遡上高 3.8m】

分散移動を実施。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

### 【昭和三陸地震：遡上高 2.3m】

本地方に於ける一の経済中樞をなせる本市街地は現地復興の外なく、幸に津浪の勢力土木工作物に依りて防ぎ得る程度のものなるを以て、充分の豫防法を講ずれば、被害を極度に減少し得べし。即ち大槌川右岸を整理し之より小槌川左岸に至る防浪堤を設くるを得ば、本市街地を挟む兩河川は緩衝地帯となりて、津浪の災害を軽減するを得可し。

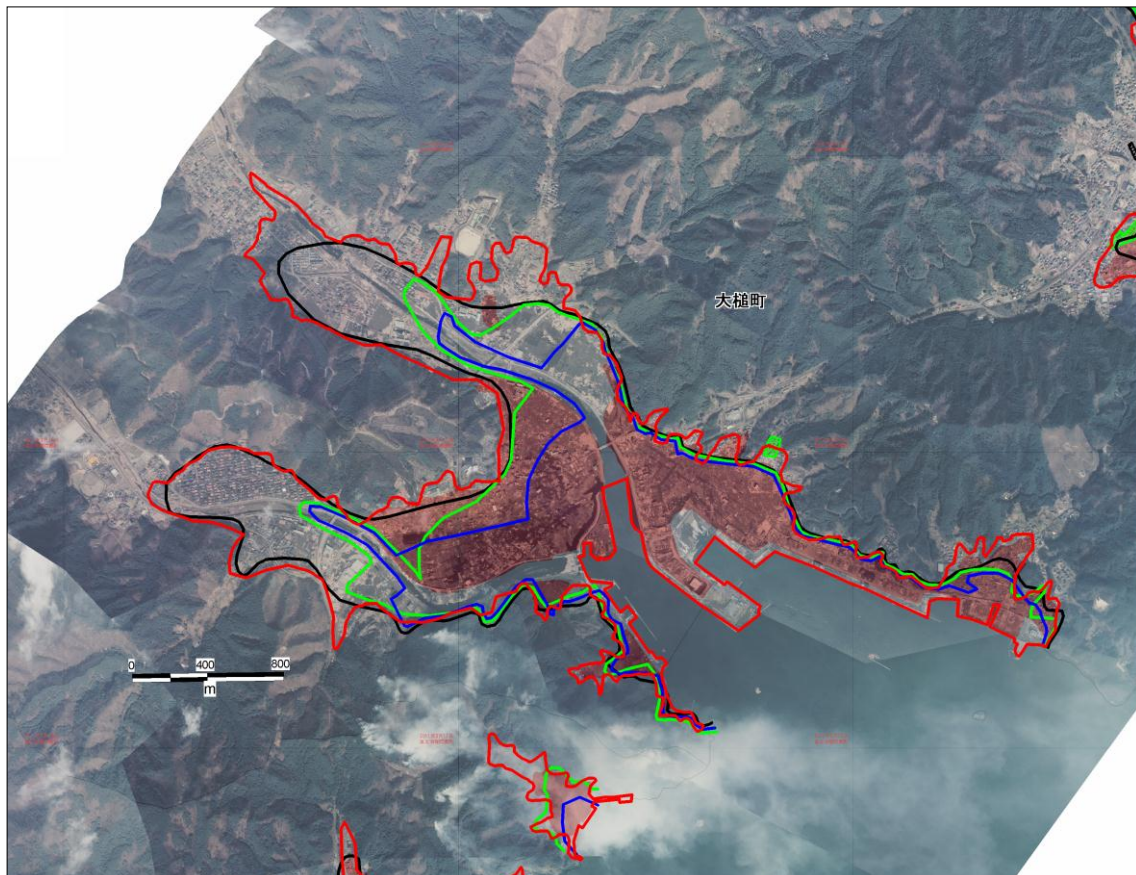
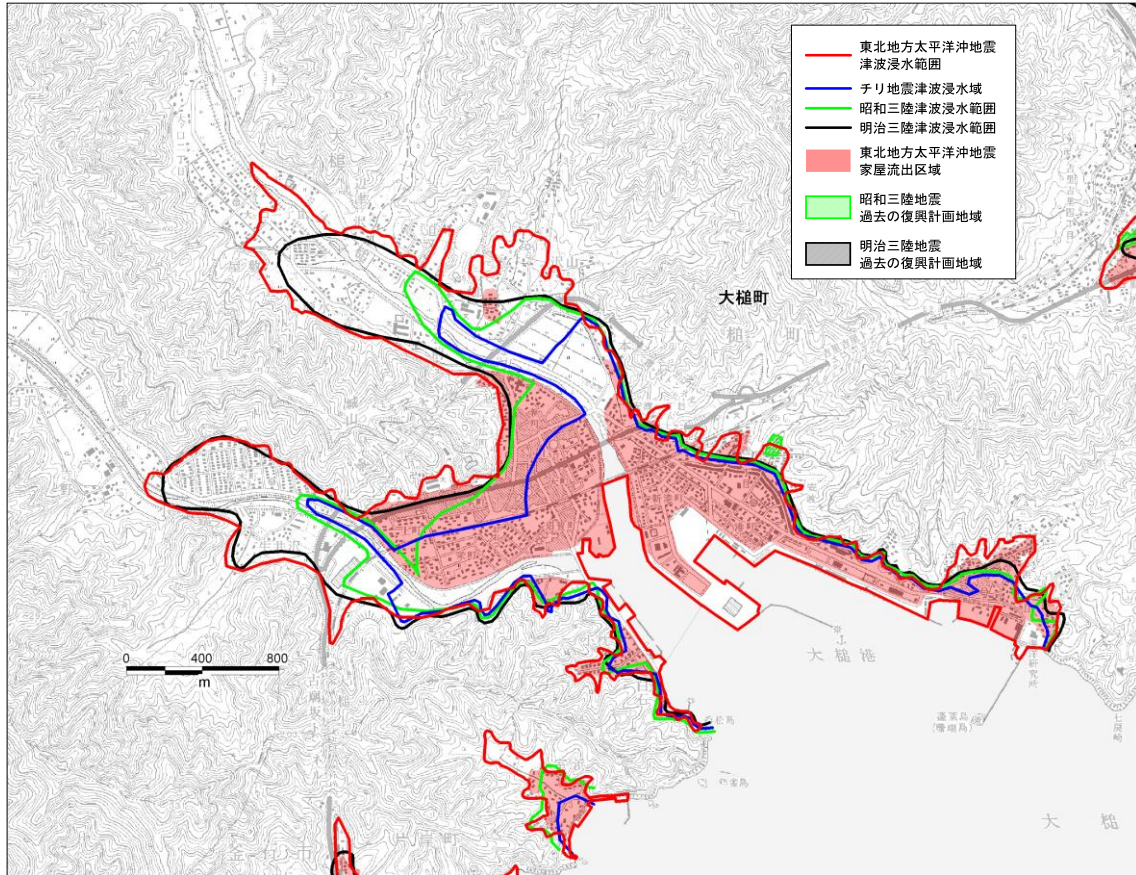
（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

### 【東北地方太平洋沖地震：遡上高 7.7m】

臨海部がほぼ壊滅的被害を受けている。河川遡上による浸水も見られる。



⑪大槌町大槌（岩手県上閉伊郡大槌町）



⑫ <sup>うのすまい</sup> 鶺住居村 <sup>はこざき</sup> 箱崎 (岩手県釜石市)

**【明治三陸地震：遡上高 8.5m】**

当時の部落の大部分を壊滅せしめられた。之等の被害家屋の内その大部分は自發的各個に後方高地に移轉したる。

(内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』(1934))

**【昭和三陸地震：遡上高 4.4m】**

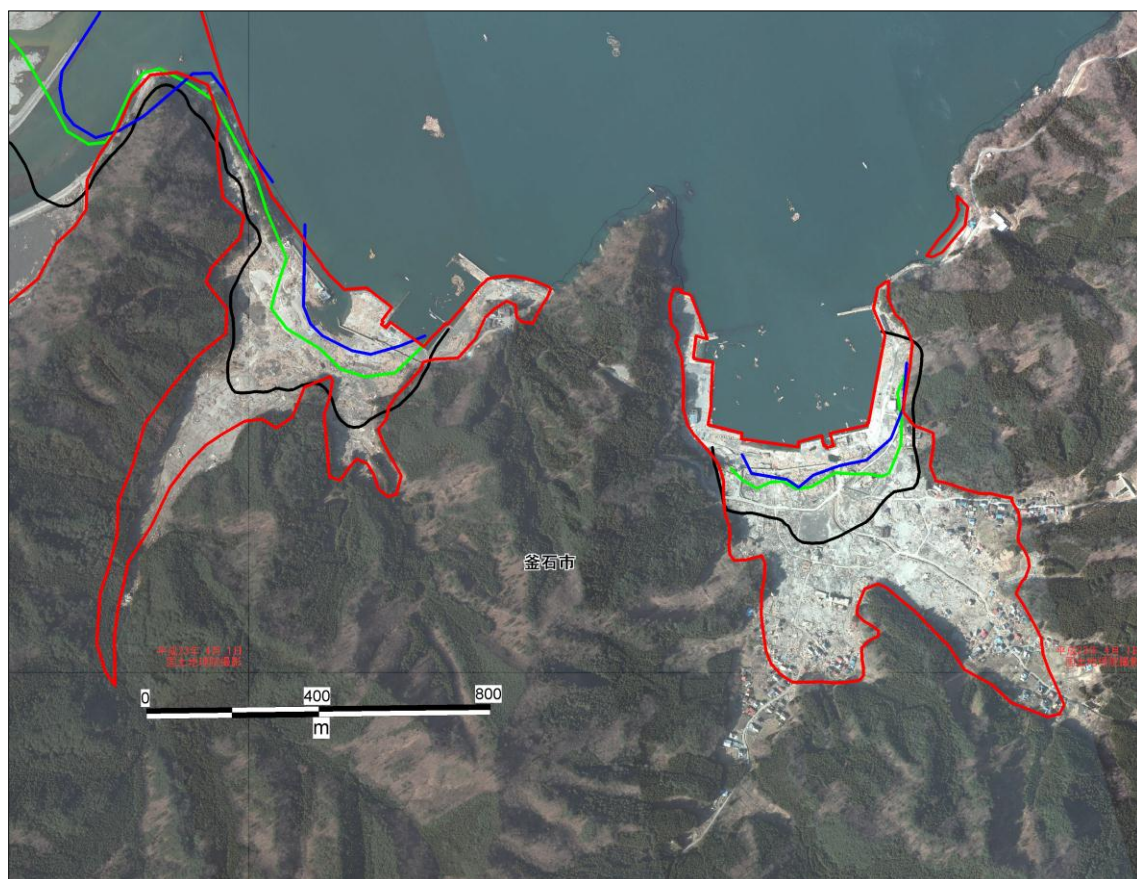
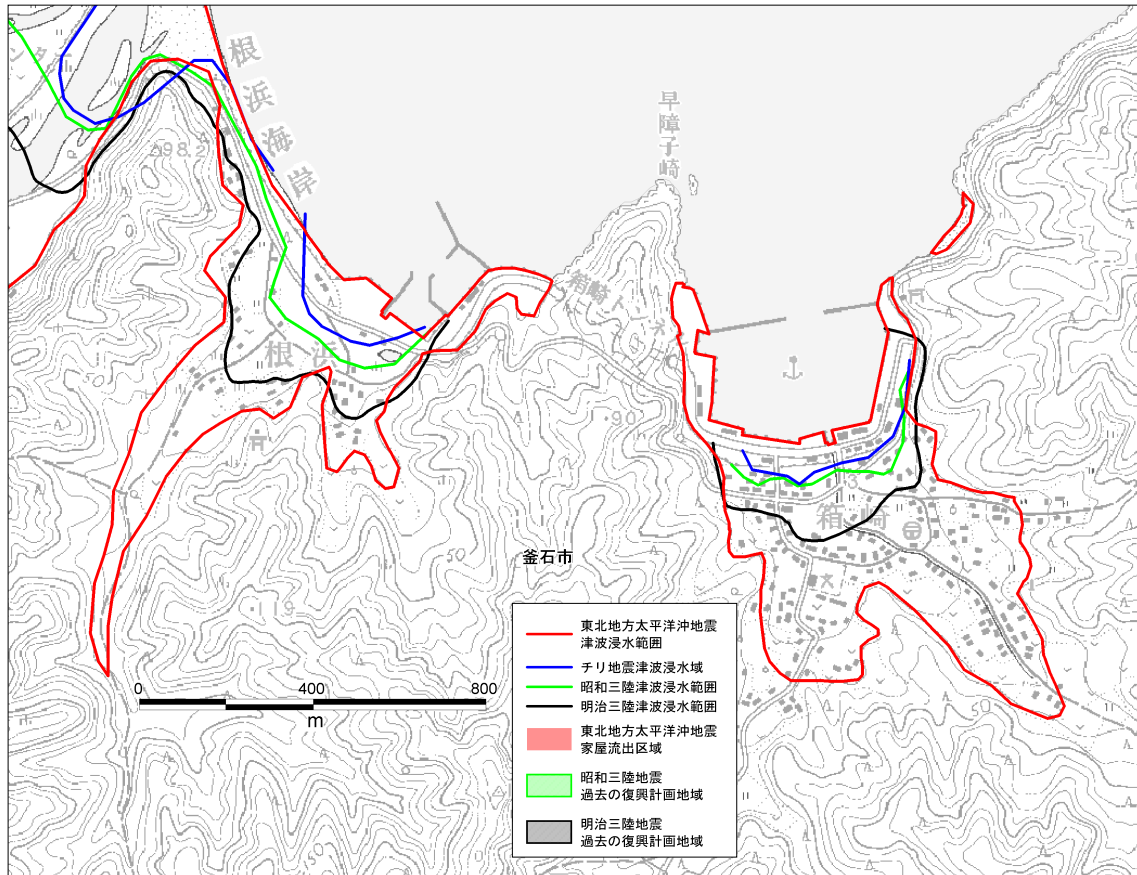
之は危険區域に復興せるものみに止り、高地移轉が充分の効果を發揮せるを知り得る。

(内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』(1934))

**【東北地方太平洋沖地震：遡上高 17.2m】**

集落のある地域はほぼ全域で浸水。海よりもっとも離れた地域のみ浸水を免れている。

⑫ 鶴住居村箱崎 (岩手県釜石市)



⑬<sup>うのすまい</sup> 鶴住居村<sup>りょういし</sup> 両石 (岩手県釜石市)

【明治三陸地震：遡上高 6.7m】

高地に移らうと言ひ出した人もなく、當局の方でも特に移動に就いて注意もされなかったと言ふ。實は移動すべき適地もない程の谷底の灣頭に占拠した準漁村であったので、當局の補助金並びに義損金の一部を當ててバラックを建て、それが漸次木屋に改造されていって、何時か原位置に、略略災害以前の様な形の聚落が再興。

(山口弥一郎『津波と村』(恒春閣書房, 1943)/p. 62)

【昭和三陸地震：遡上高 5.5m】

府縣道の左右山間高地を選定し、明治 29 年波高 6.70m 以上の高さに敷地造成。

(内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』(1934))

鶴住居村両石は 1 号地に 11 戸、2 号地 35 戸、3 号地 23 戸、4 号地 24 戸というように、4 カ所に分けて集団移動。

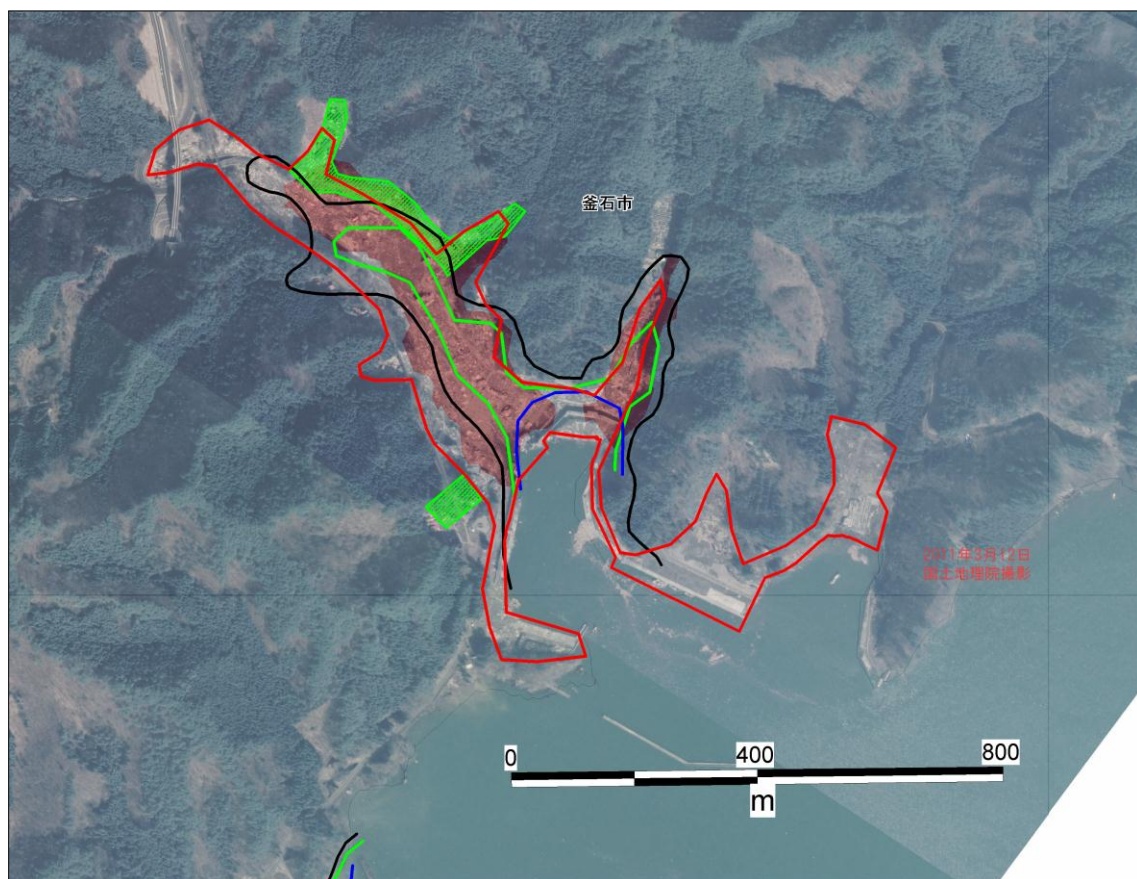
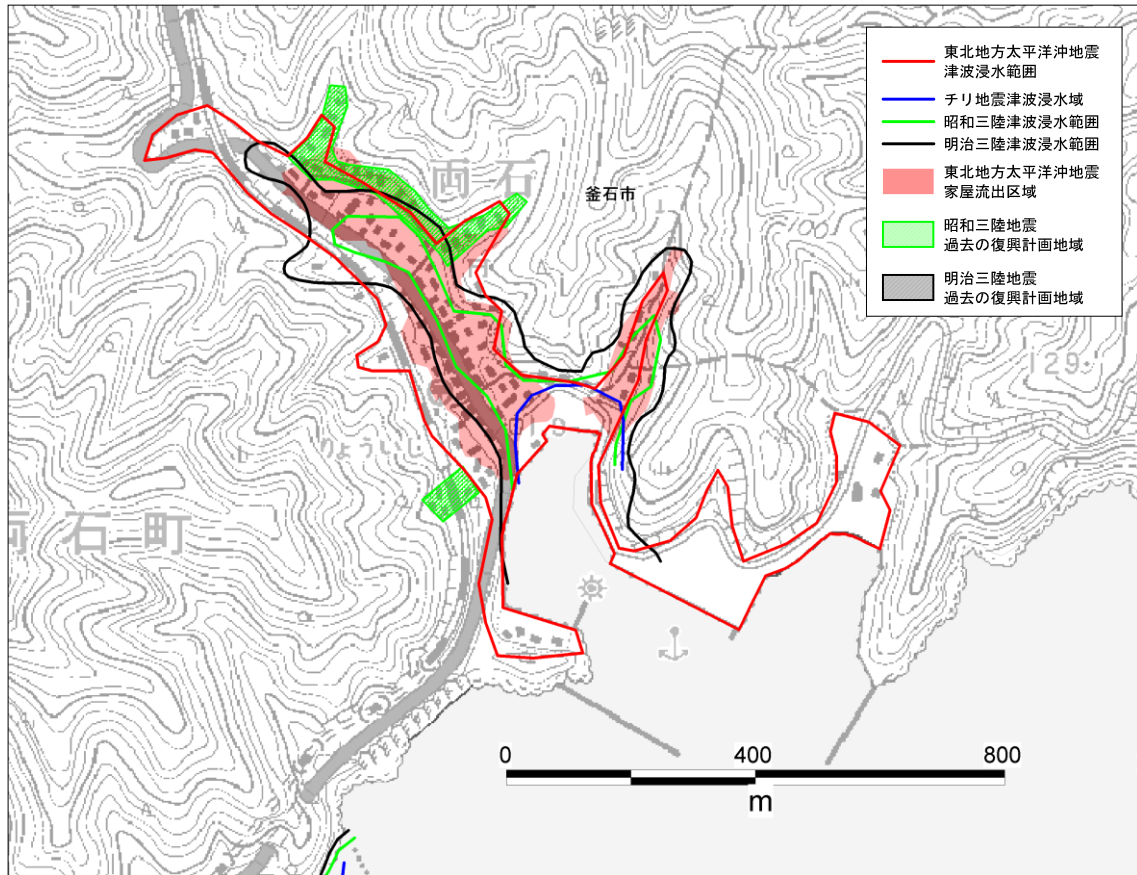
(山口弥一郎「津波常習地三陸海岸地域の集落移動」(亜細亜大学「諸学紀要」大 11 号, 1964)/p. 72)

地盤高 7m 以上の谷壁を切り崩し、1~4 号地までの宅地を開き、簡易水道を設けて模範的高地集落を建設した。その後も人口の増加に伴って高地住宅を開いたが、住民は、漁港との距離、宅地造成の費用、約 30 年に 1 回の津波、地震による予知等の条件を考え再び谷底の危険地区に一部復帰者、分家、他村からの移住者などが住家を再建した。(建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』(1961)/p. 74-75)

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 10.4m】

移転先においても一部で浸水・流失被害が見られる。

⑬ 鵜住居村両石（岩手県釜石市）



⑭<sup>とうに</sup>唐丹村本郷（岩手県釜石市）

【明治三陸地震：遡上高 14.5m】

山沢鶴松が海岸より 600m 隔てた山腹斜面の自分の所有地に移り部落全部の移動再興をすすめたが、これに従ったものは数戸に過ぎず、これも時日の経過と、浜を離れては漁港に遠く、漁獲物の運搬、夜中の入港、漁獲物処理に、女の家族が手助けに出るのに不便で、かつ墓地は旧位置の原屋敷に近く造り、これを移動集落より離して放棄しておくことが忍び難いと、古老は原屋敷、墓地などに愛着が強く、大漁がつづいた際、遂次原位置に戻り、最後には指導者の山沢も原位置復帰の余儀なきに至って、1933 年再度全滅の災害にあった。

（山口弥一郎「津波常習地三陸海岸地域の集落移動」（亜細亜大学「諸学紀要」大 11 号, 1964）/p. 68）

【昭和三陸地震：遡上高 9.3m】

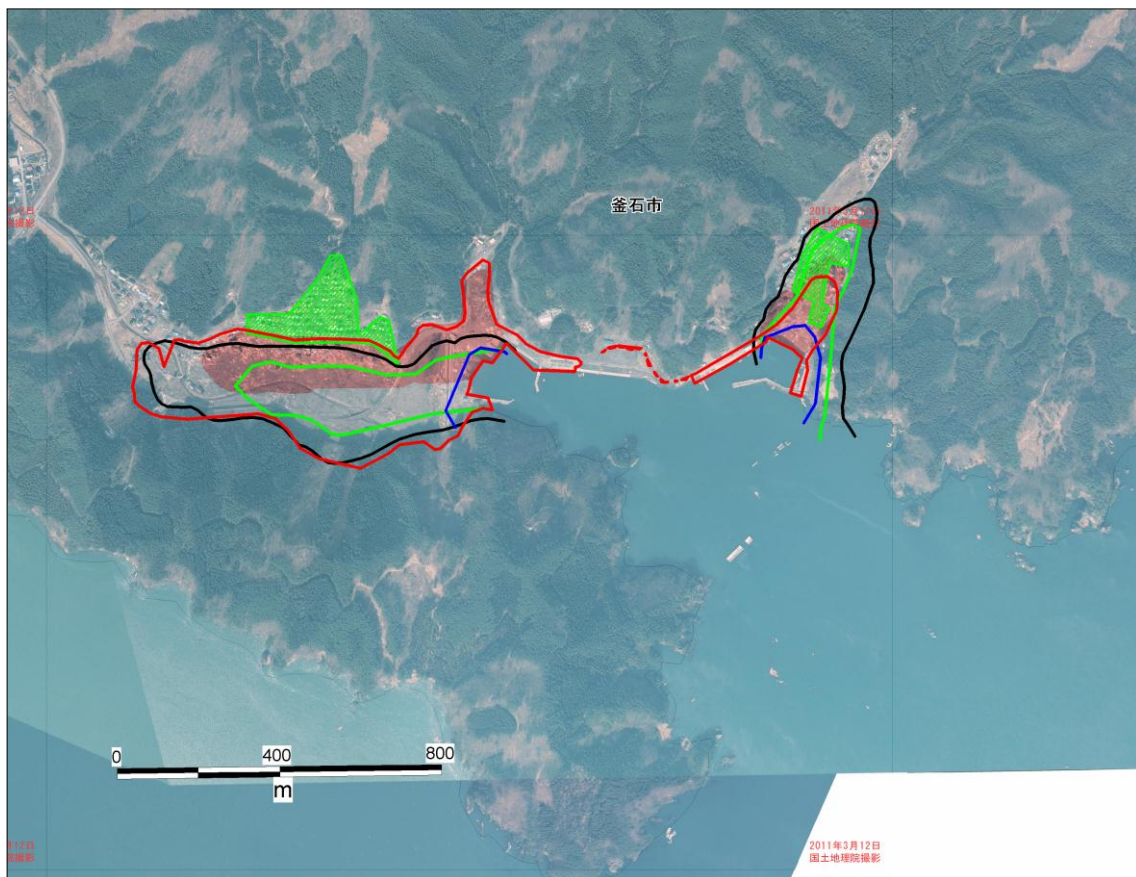
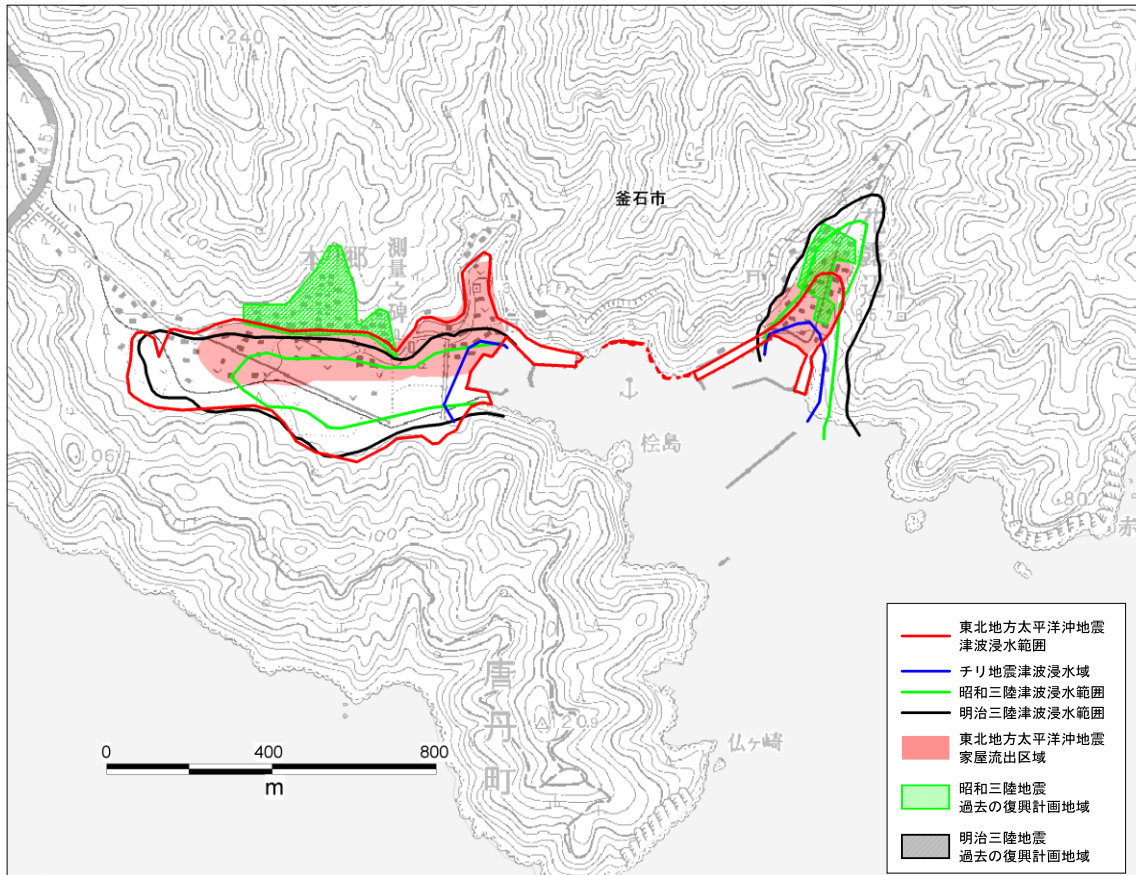
海岸より 600m 離し、南面する山腹を階段状に切崩して、全戸収容の屋敷地をつくり 1935 年最初に著者が訪ねた時は、既に 85 戸が密居集団移動していた。しかしその後も調査に訪ねているが、大戦前後の移入増加も加えて、なお 9 戸が移動前の集落位置で生活している。

（山口弥一郎「津波常習地三陸海岸地域の集落移動」（亜細亜大学「諸学紀要」第 11 号, 1964）/p. 69）

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 13.4m】

移転した地区は浸水・流失を免れている。

⑭唐丹村本郷（岩手県釜石市）



⑮唐丹村<sup>こじらはま</sup>小白浜（岩手県釜石市）

**【明治三陸地震：遡上高 14.6m】**

唐丹小白浜は明治 29 年波高 14.60m で、流失倒壊 50 戸を越え、約 120 人の死者を出す大被害を受けた。そこで、部落では 200m 背後の山麓に義損金を利用して宅地造成を行い移動したが、海岸への道路も不完全であり、漁業者は逐次元屋敷に復帰してきた。また、大正 12 年 9 月 1 日の山火事のため、高地住宅は灰燼に帰したため、高地住宅の大半は危険な低地に復帰した。

（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961）/p. 68）

**【昭和三陸地震：遡上高 9.6m】**

13m 以上の高さに付替新設さる可き縣道に沿ひ、面積 4168 坪の敷地を造成し、85 戸を收容す。海岸に接する舊部落地は之を共同作業場とし、新舊の住宅地は之を圍る高地に配置さるる事となる。

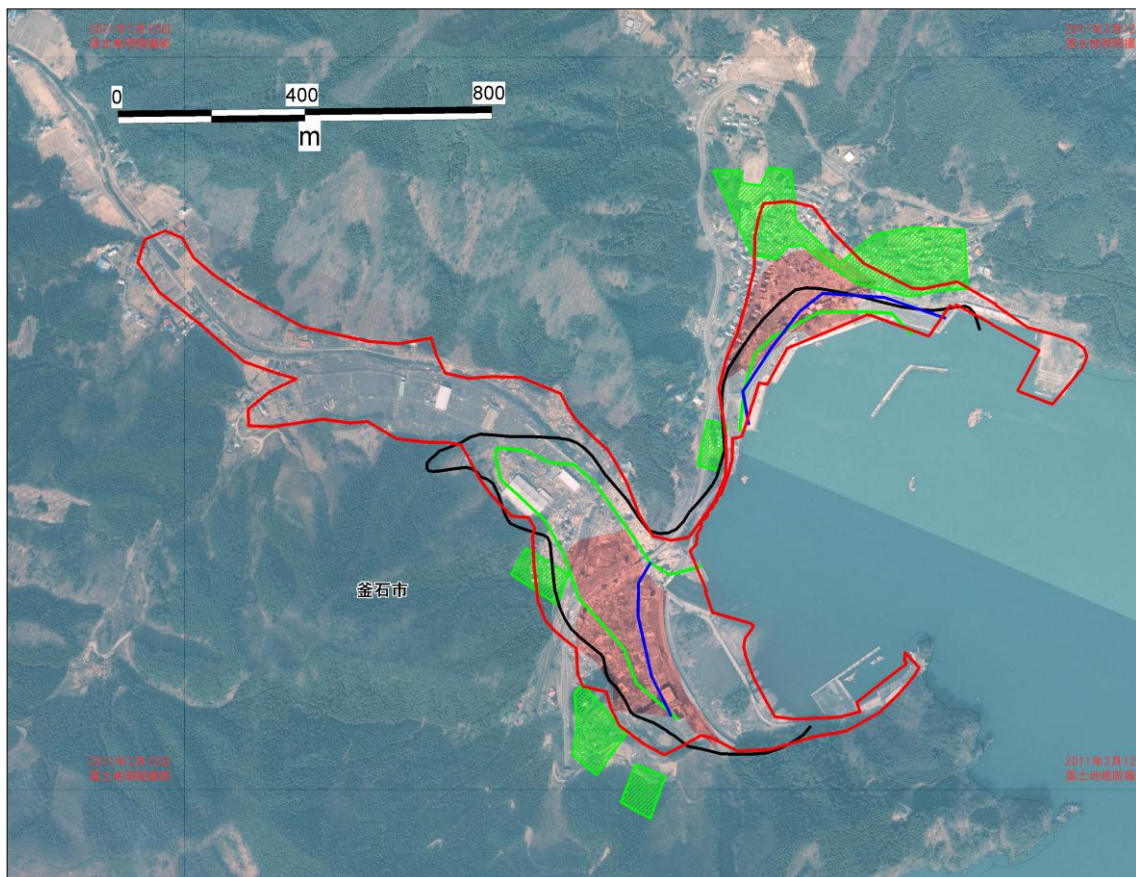
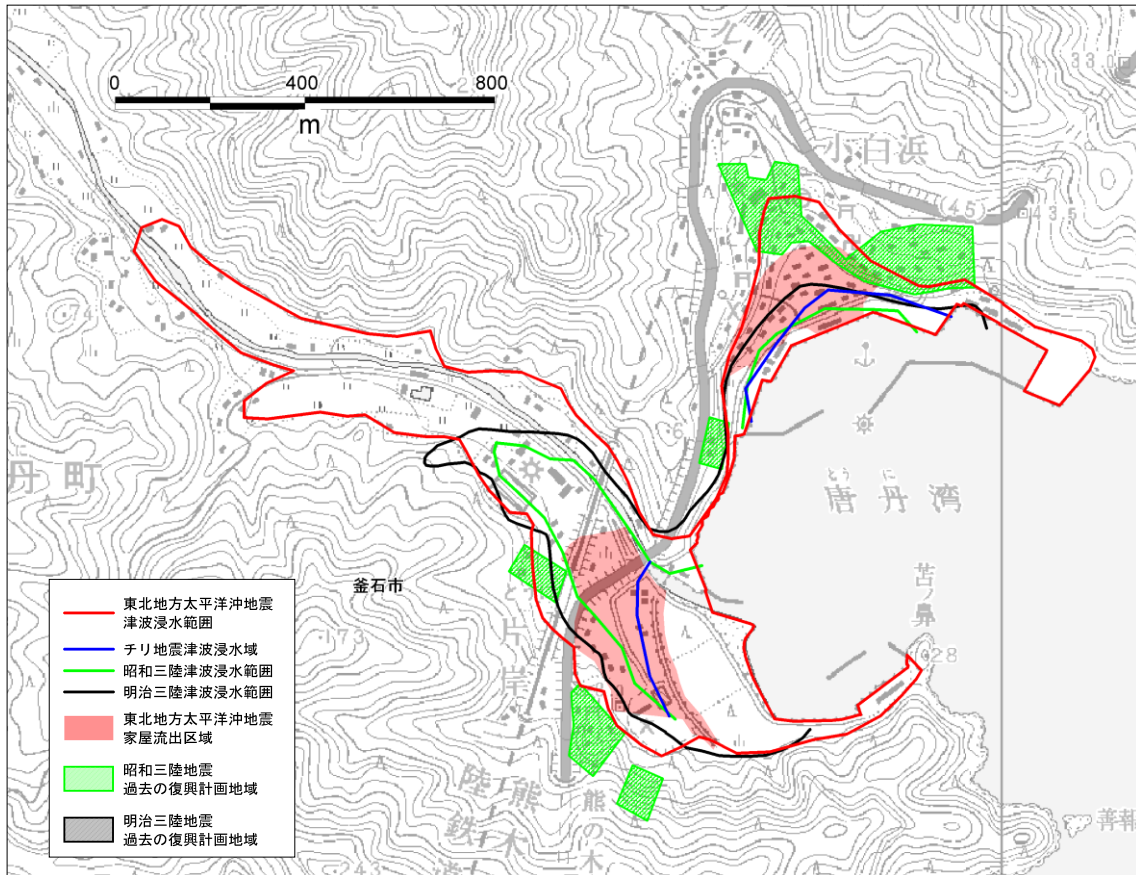
（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

**【東北地方太平洋沖地震：遡上高 18.8m】**

移転した地区は浸水・流出がほぼ免れる。低地部は浸水・流出も見られる。



⑮唐丹村小白浜（岩手県釜石市）



⑩吉浜村<sup>ほんごう</sup>本郷（岩手県大船渡市）

**【明治三陸地震：遡上高 26.13m】**

海岸に延長 523m、高さ 8.2m の防潮堤を構築した。その構造は前面法を扣 45cm の割石をもって法三分に積立て、裏法 2 割として土羽打芝張を施し、天場幅 3.6m、裏堤脚に接し、幅 10m の防潮林を植えた。

（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961）/p67-68）

**【昭和三陸地震：遡上高 14.3m】**

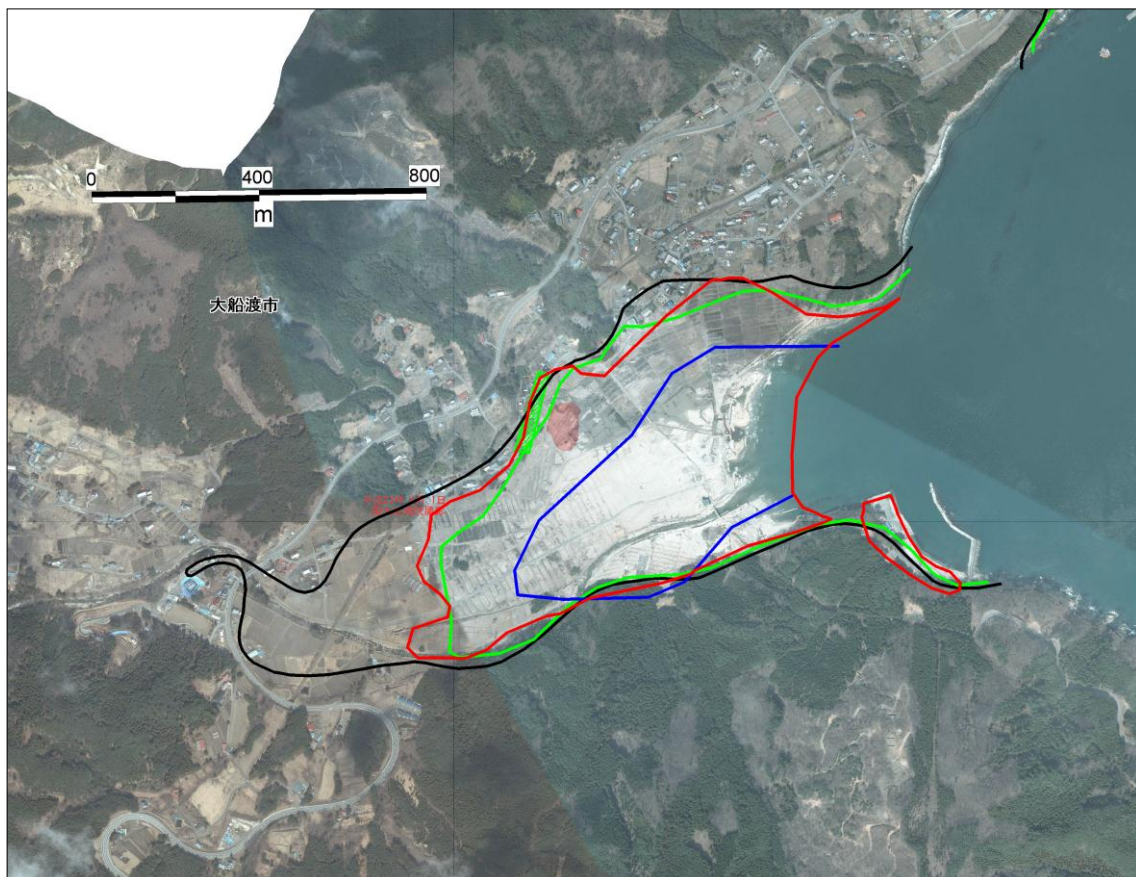
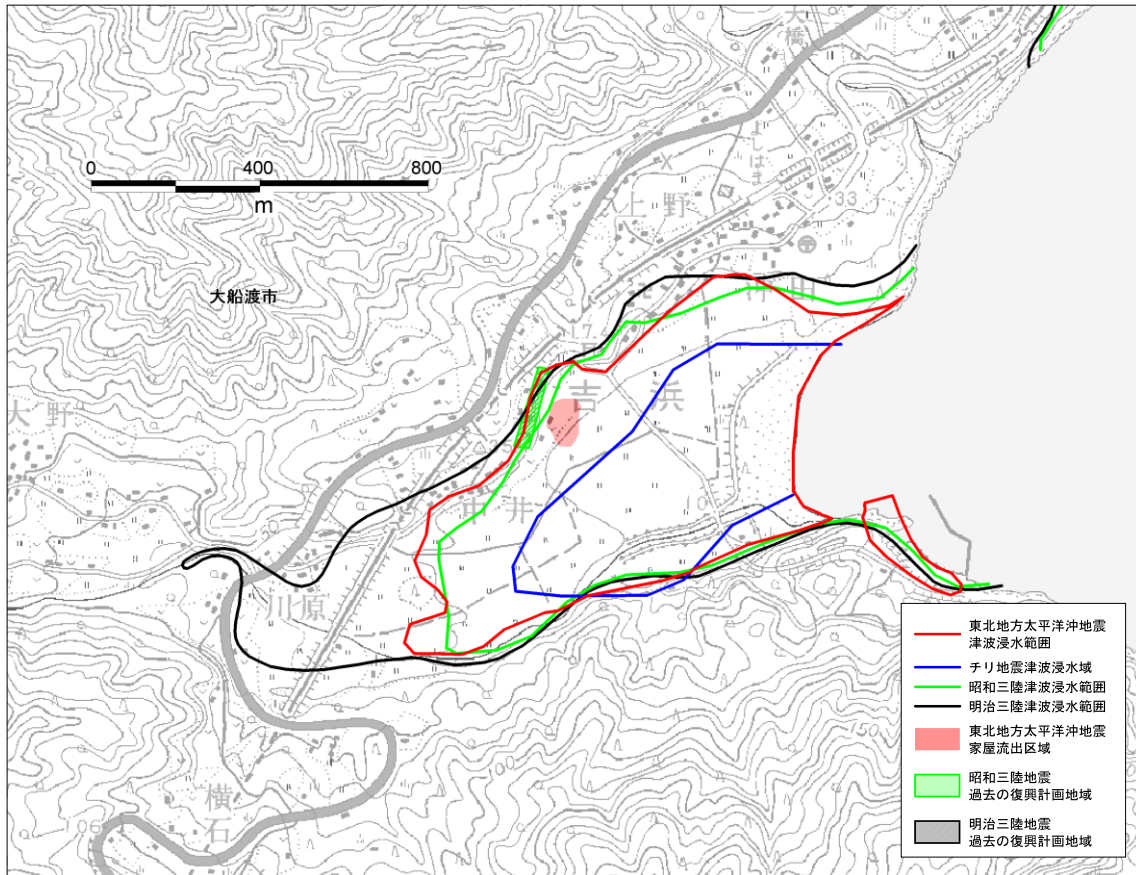
各々自力で高地に移動したものは被害をまぬかれた。

（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961）/p. 67-68）

**【東北地方太平洋沖地震：遡上高 16.6m】**

移転した地区に浸水はなし。低地はほぼ浸水・流失している。

⑩吉浜村本郷（岩手県大船渡市）



⑰<sup>おきらい</sup>越喜来村浦浜（岩手県大船渡市）

【明治三陸地震：遡上高 9.28m】

灣の東北隅にある杉ノ下の一画では全村殆んど移轉しなかったのに、5戸だけは北の山腹に移った。然し内1戸は残念にも仕事の関係とて7、8年にして原地へ戻り、再び災害に遭っている。

（山口弥一郎『津波と村』（恒春閣書房, 1943）/p. 37）

【昭和三陸地震：遡上高 6.72m】

集團移轉戸数70戸、造成敷地面積3494坪、浸水高明治29年9.28m、昭和8年6.72mにして敷地計畫高11m以上とす。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

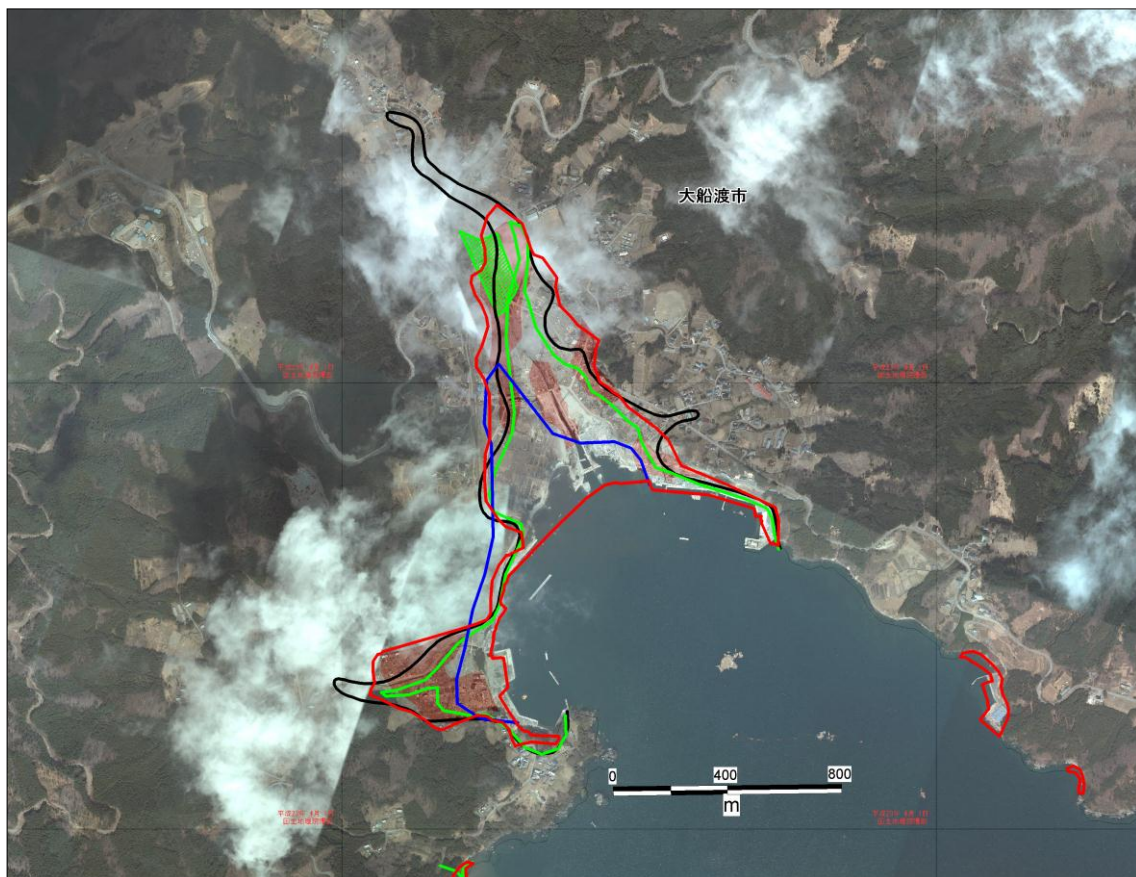
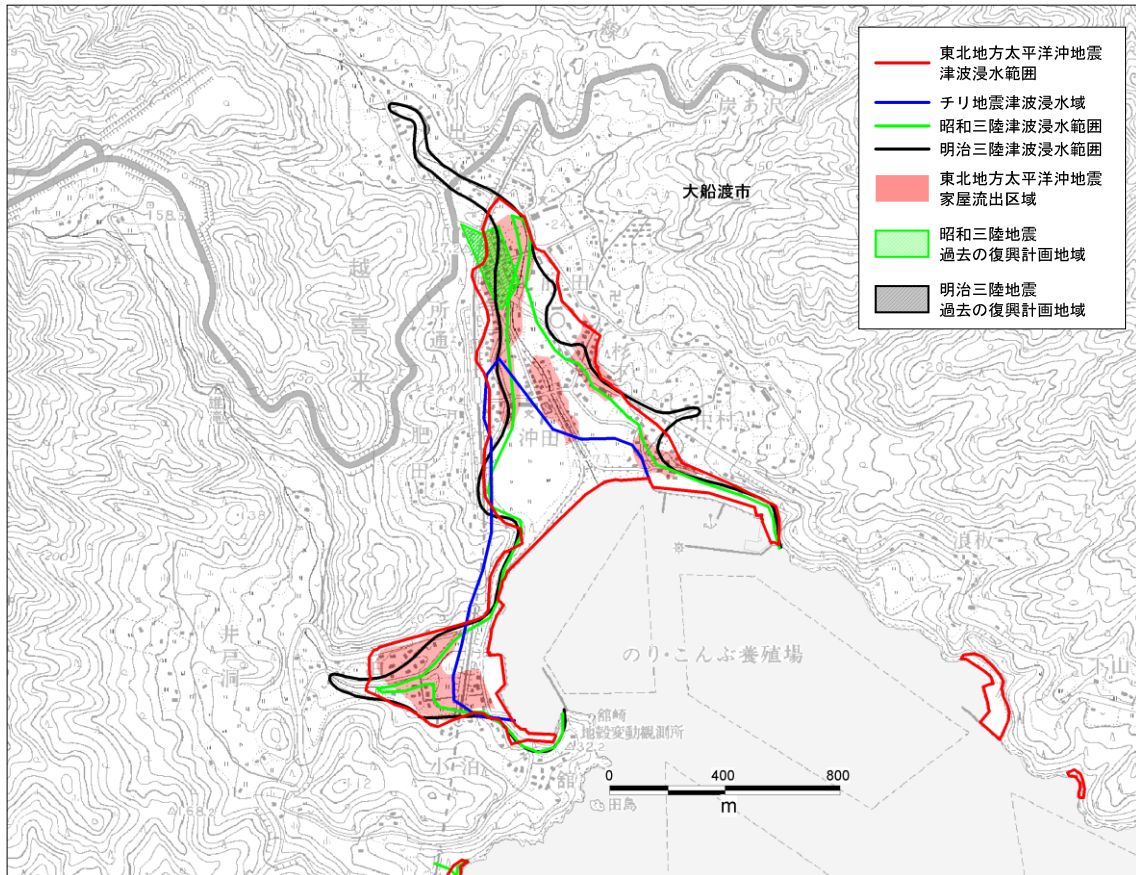
海濱から600mも離れて集團移動地を設定したが、若干移動したのみで大半は現地に踏み止まっている。

（山口弥一郎『津波と村』（恒春閣書房, 1943）/p. 145）

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 16.6m】

整備を行った地区においても、浸水・流失の大きな被害。

⑰越喜来村浦浜（岩手県大船渡市）



⑱ <sup>おきらい</sup>越喜来村崎浜（岩手県大船渡市）

**【明治三陸地震：遡上高 11.63m】**

部落民共同のもとに原地の低地に地方部落としては珍しく整然とした区画整理を実施して復興再建した。

（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961）/p. 67）

**【昭和三陸地震：遡上高 7.8m】**

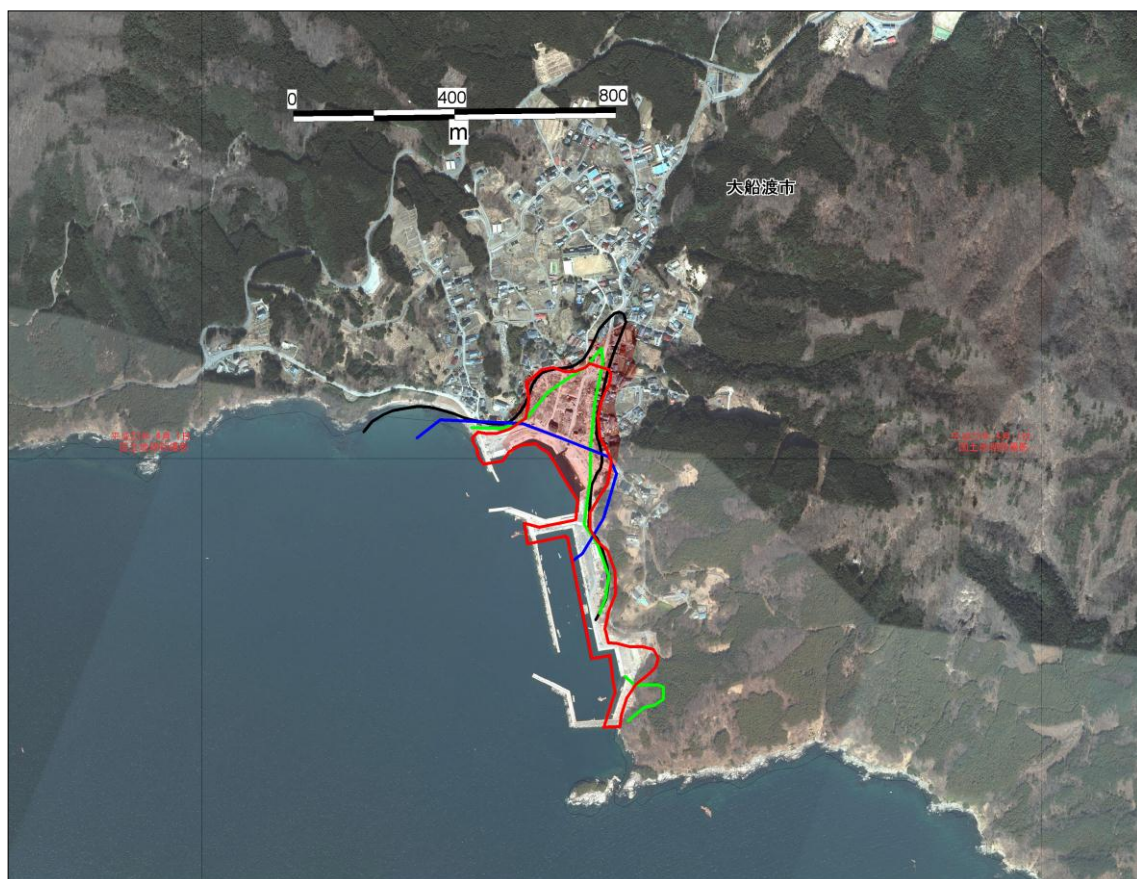
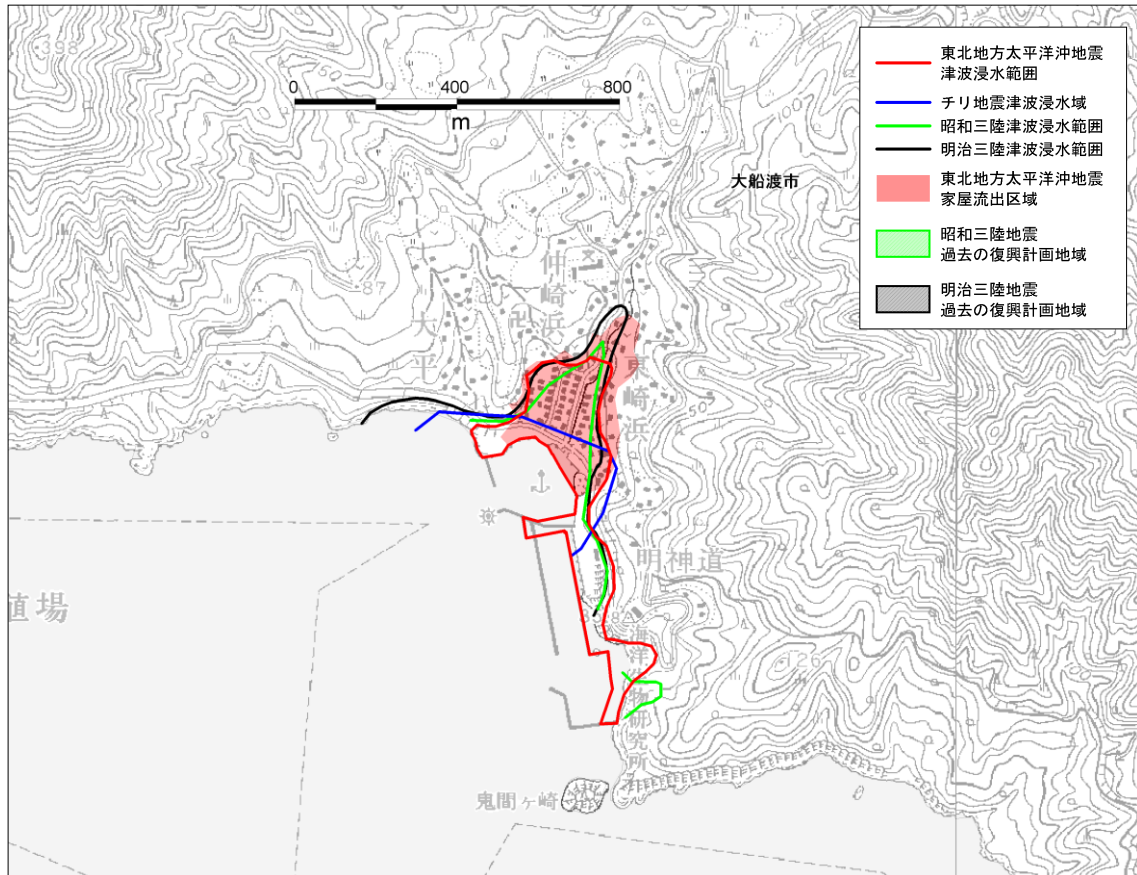
之等罹災家屋は之を高地に移轉せしめ、跡地を共同作業場たらしむる計畫は罹災を再びせざる用意として必要なるにかかわらず、未だ高地移轉決行を見ざるは遺憾なり、茲に移轉住宅適地は現存部落東北に接する高台斜面を理想とする事を附記し、計畫圖のみを掲ぐ。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

**【東北地方太平洋沖地震：遡上高 13.9m】**

区画整理等を行っていたものの、低地にあった住宅は流失の被害を受けた。

⑩越喜来村崎浜（岩手県大船渡市）



⑲<sup>りょうり</sup>綾里村湊（岩手県大船渡市）

【明治三陸地震：遡上高 12.57m】

個人的に数戸高地移動をしたのみで原地復興に終わっている。  
（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961）/p. 71）

【昭和三陸地震：遡上高 9.0m】

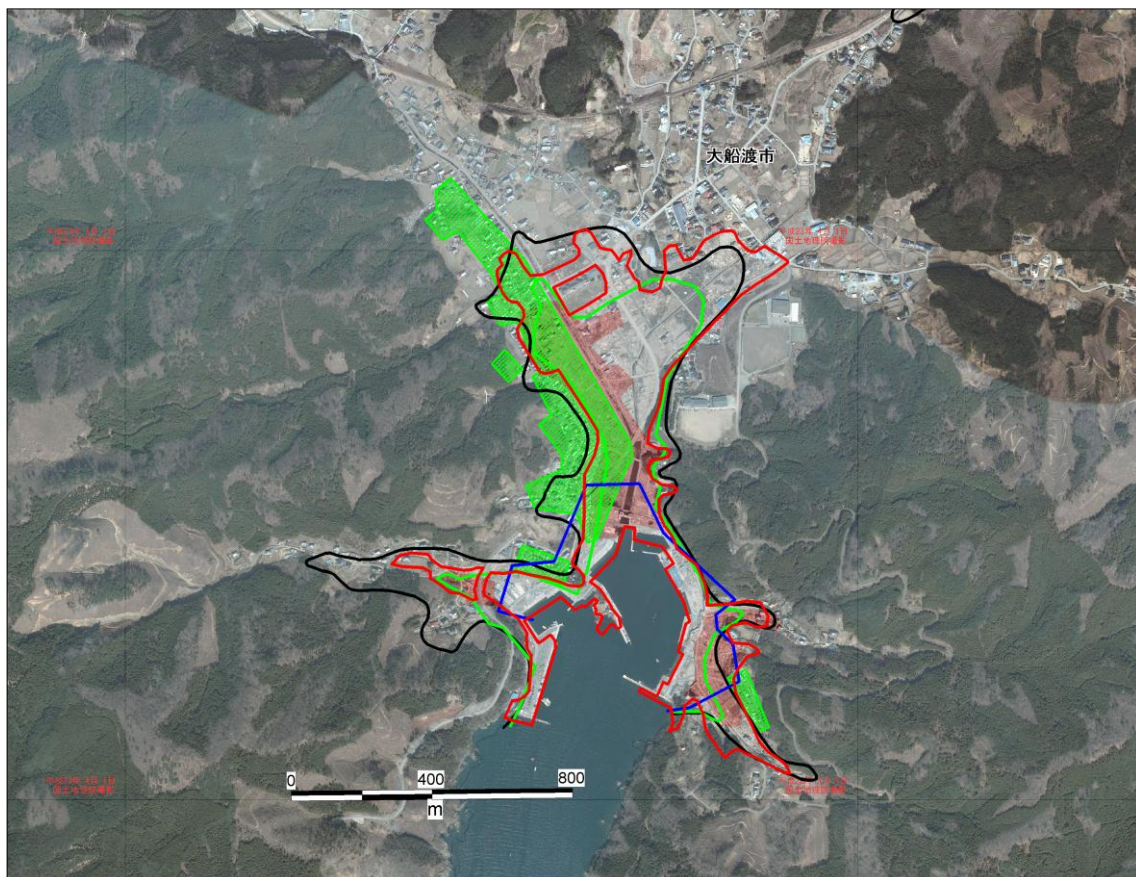
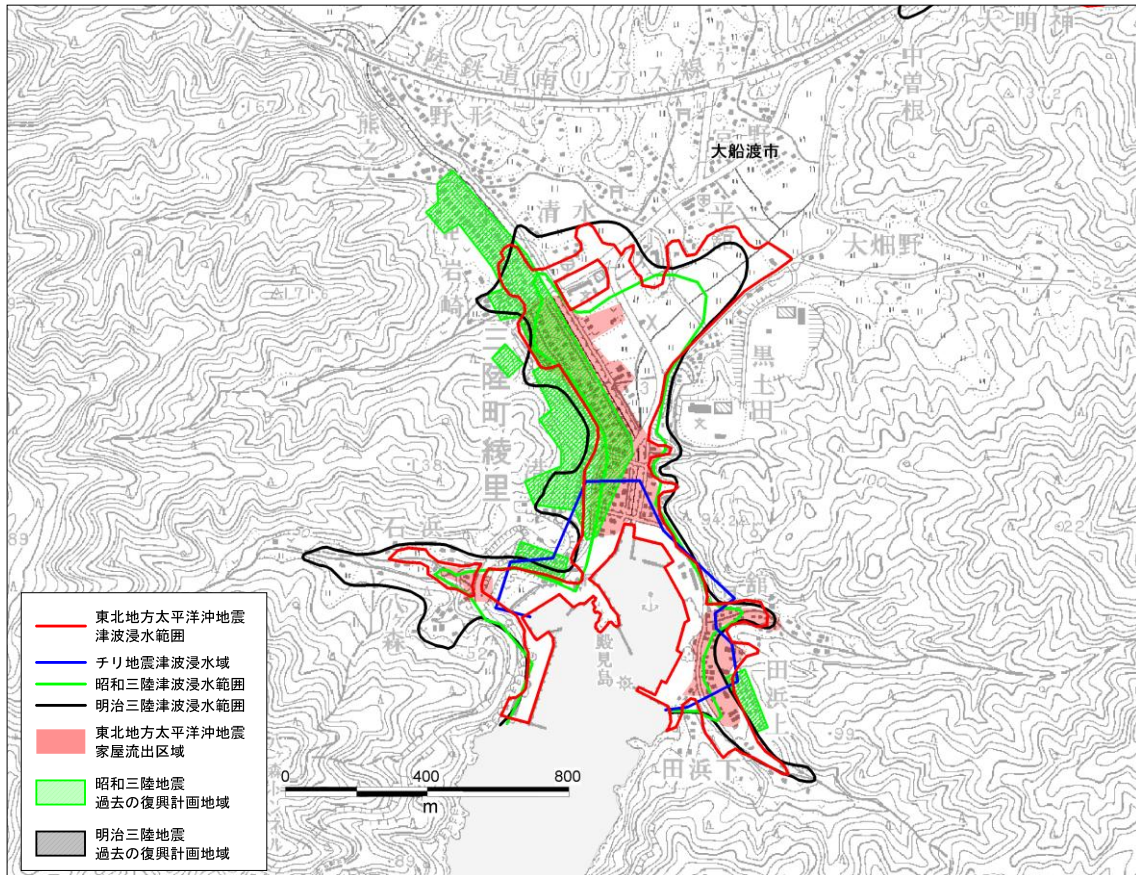
昭和 8 年津浪波高 9m、湊、岩崎兩部落に於ける家屋の流失 倒壊戸數 136 戸、死傷 111 人を出す、斯の如き地形に於ける部落は高地移轉をなすを理想とし、本部落に於ては舊部落地の西、舊出地（判読不能）の斜面に沿ひ明治 29 年津浪浸水線以上の高さに、縣道盛綾里線を付け替え、此の兩側に敷地を造成す。其の收容戸數 146 戸、面積 7,287 坪、中央高所に村役場を置き、造成敷地と海岸との連絡道路數條を設け、海岸には防浪護岸を設け、舊部落地は之を共同作業場とし、綾里川沿一帶の低地は防浪緩衝地帯たらしむ。  
（内務大臣官房都市計画課『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告』（1934 年））

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 15.9m】

整備した土地の一部で浸水・流失が見られた。



⑱綾里村湊（岩手県大船渡市）



あかさき しゆく  
⑳赤崎村宿（岩手県大船渡市）

【明治三陸地震：遡上高 2.7m】

（記録なし）

【昭和三陸地震：遡上高 1.8m】

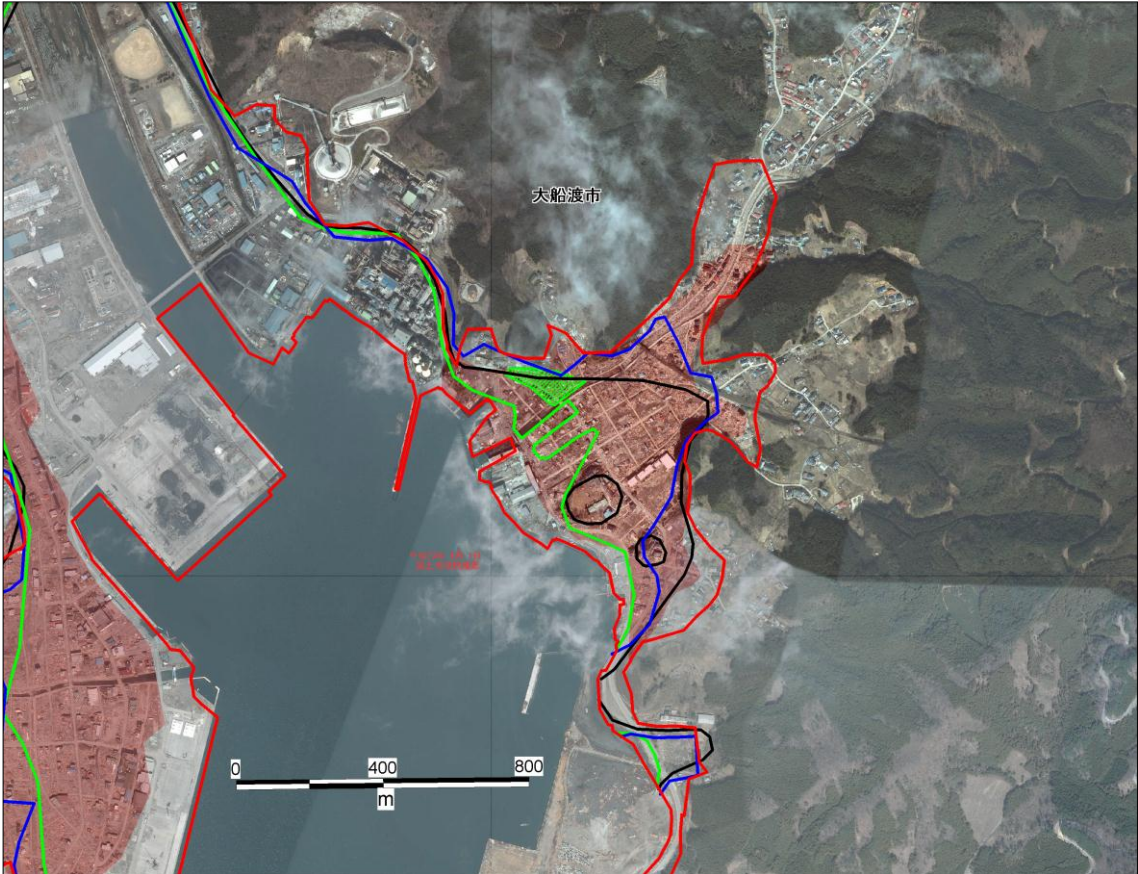
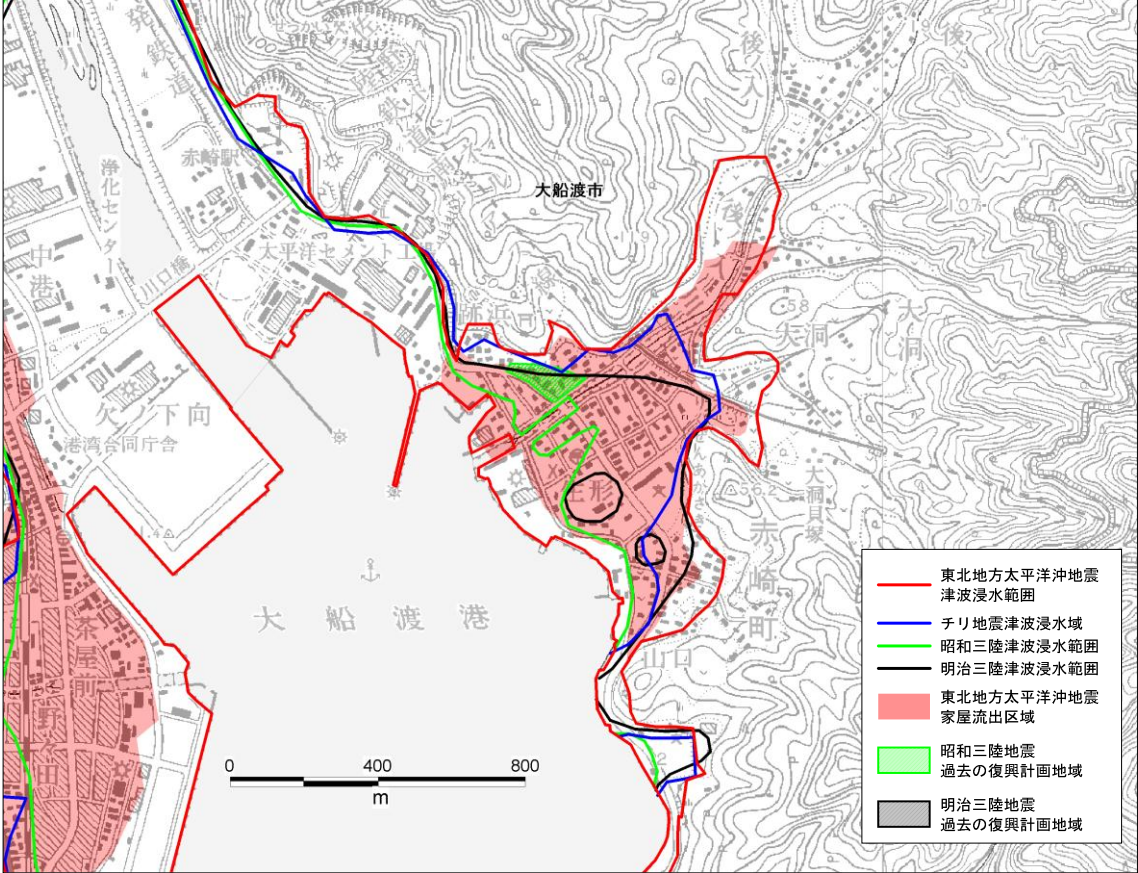
要移轉戸數 33 戸中集團移轉 20 戸、縣道改修線とその北方高地とに挟まれたる帶狀地を明治 29 年津浪高 2.7m 以上に盛土し、敷地を造成す。その面積 1313 坪とす。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告』（1934 年））

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 10.9m】

盛土地域では、浸水・流失したものも見られる。

②赤崎村宿（岩手県大船渡市）



②<sup>まっさき ほそうら</sup>末崎村細浦（岩手県大船渡市）

【明治三陸地震：遡上高 5.0m】

（記録なし）

【昭和三陸地震：遡上高 3.0m】

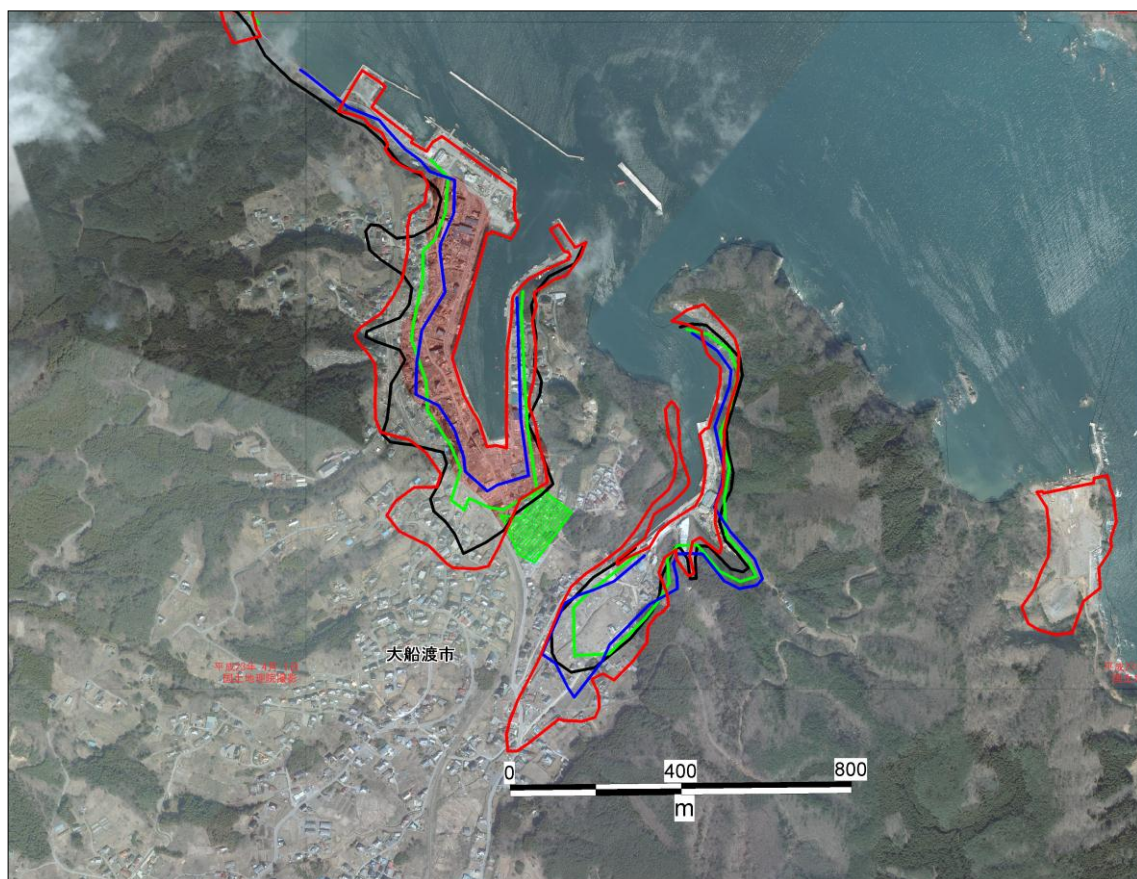
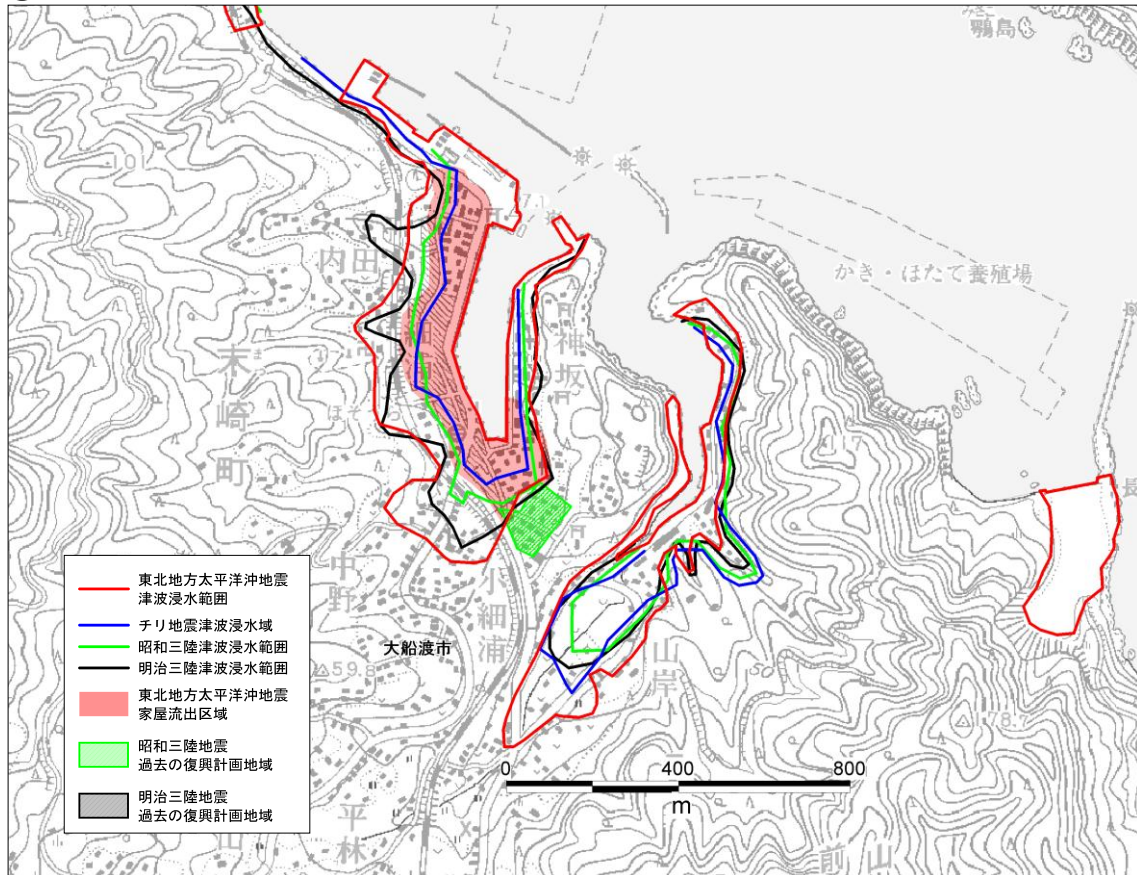
一部住宅を除くの外高地移轉を行ひ得ず、現地復興を行ふの外途なし、従つて街路復舊事業その他の事業に依り街路を整理し、日常の活動と非常時の避難に備へ、海岸は埋立を行ひ、護岸を築造し、波力の減殺に努む。然りと雖も罹災家屋の内海岸危険区域に在るを要せざるものは之を高地に移轉せしむる爲部落南方高台を利用し、此處に 35 戸を移轉せしむ。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 10.6m】

移轉した地区に浸水はなし。低地はほぼ浸水・流失している。

②1 末崎村細浦（岩手県大船渡市）



②末崎村泊里<sup>とまり</sup>（岩手県大船渡市）

【明治三陸地震：遡上高 8.0m】

（記録なし）

【昭和三陸地震：遡上高 6.5m】

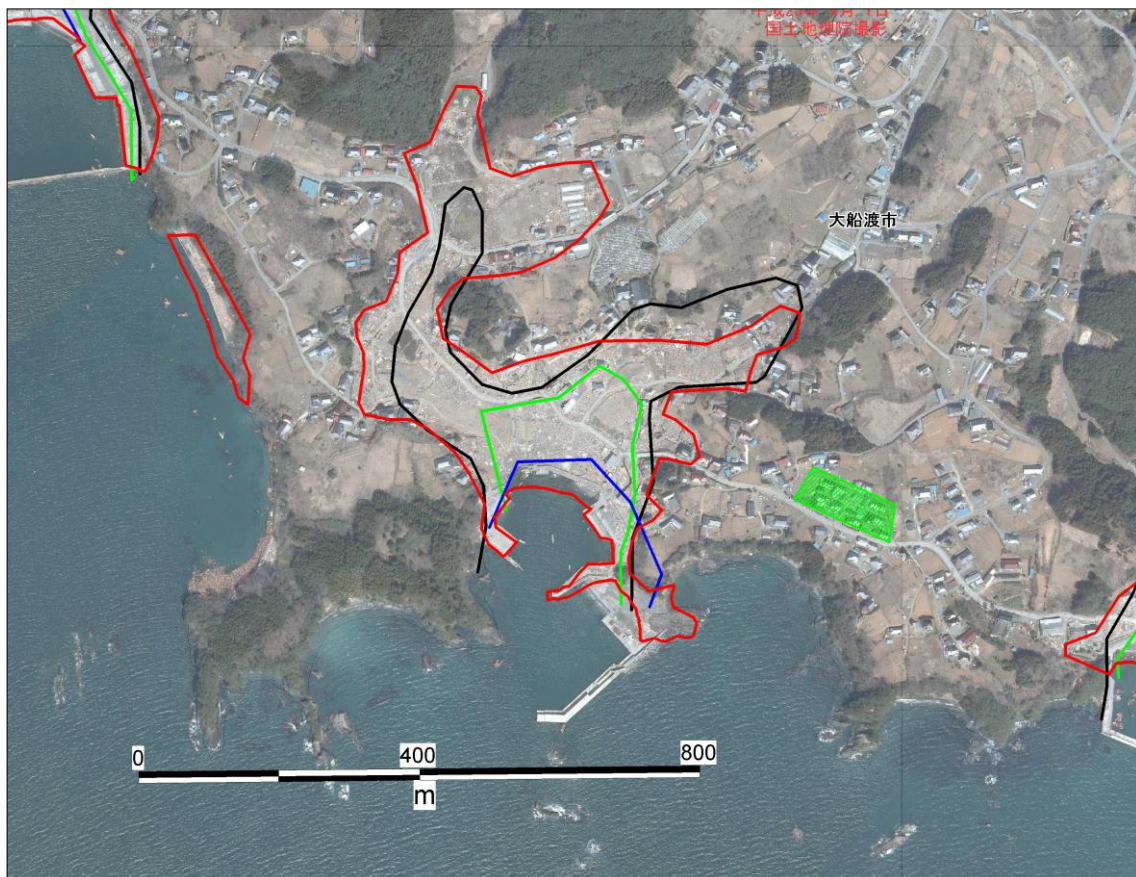
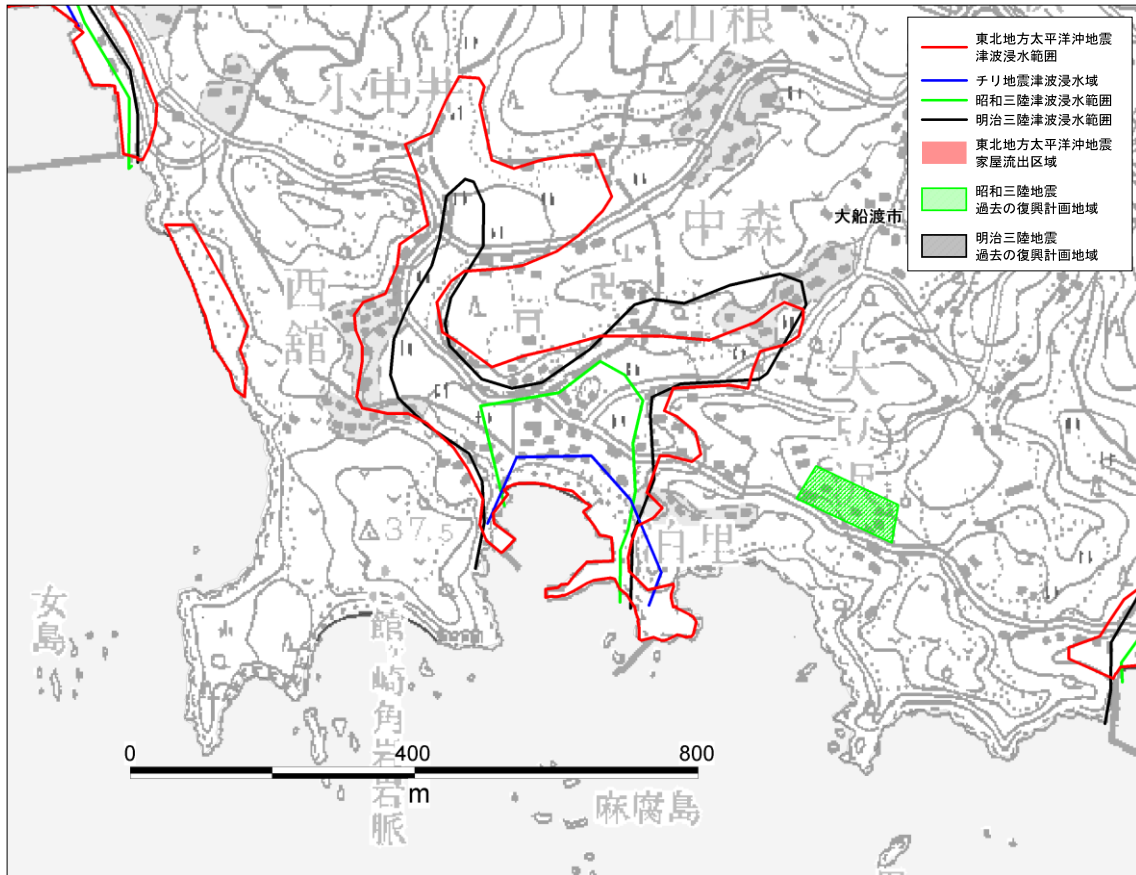
集團移轉戸數 19 戸、住宅適地は高さ 6m 以上の斜面を切均し、明治 29 年浸水位を大體同程度以上に築造するものにして、その面積 1360 坪とす。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 13.4m】

移転したと思われる地域に流失は見られない。

② 末崎村泊里（岩手県大船渡市）



②③ <sup>むつがうら</sup> 広田町六ヶ浦 (岩手県陸前高田市)

【明治三陸地震：遡上高 9.0m】

(記録なし)

【昭和三陸地震：遡上高 7.0m】

要移轉戸數 30 戸、内 15 戸は自力移轉をなすを以て他の 15 戸分の造成敷地を海岸に接し、舊部落に東隣する高白に選み、面積 958 坪の敷地造成を行ふ。

明治 29 年津浪高満潮面上 9m、敷地計畫高 10m 以上とす。

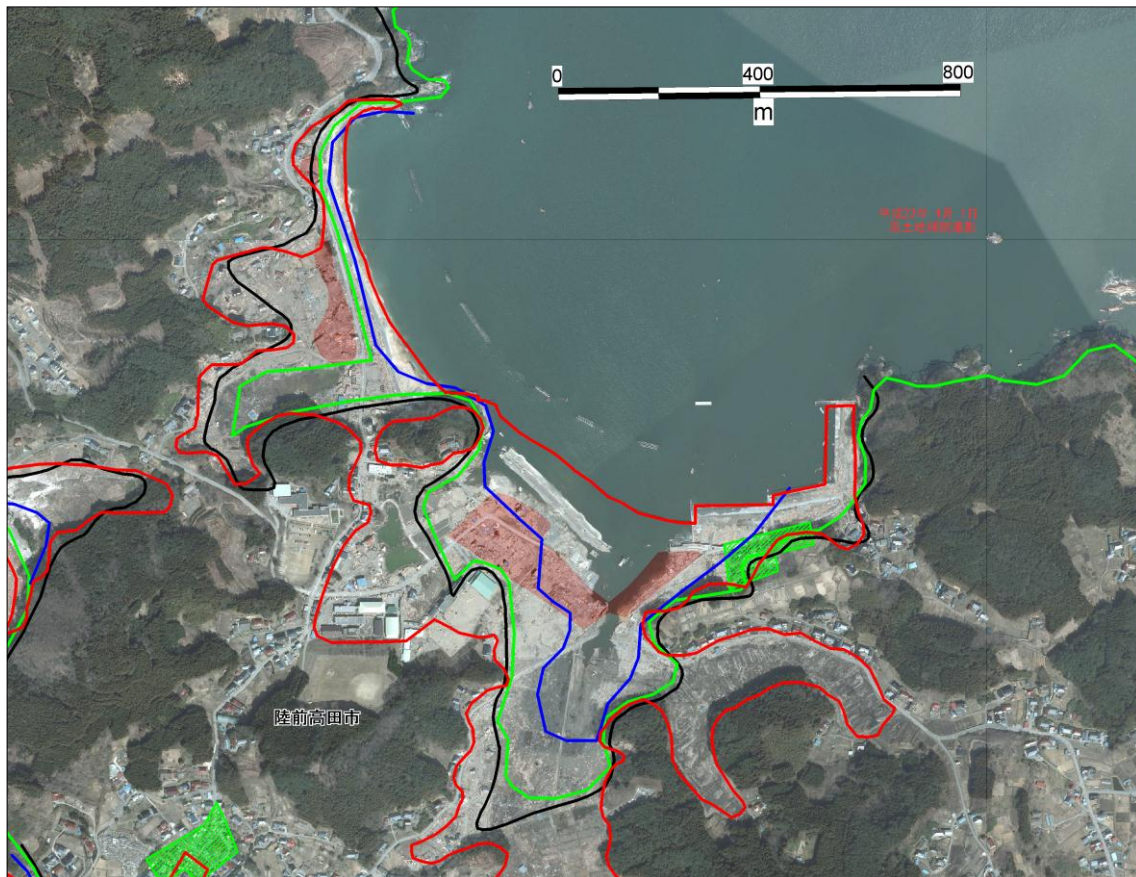
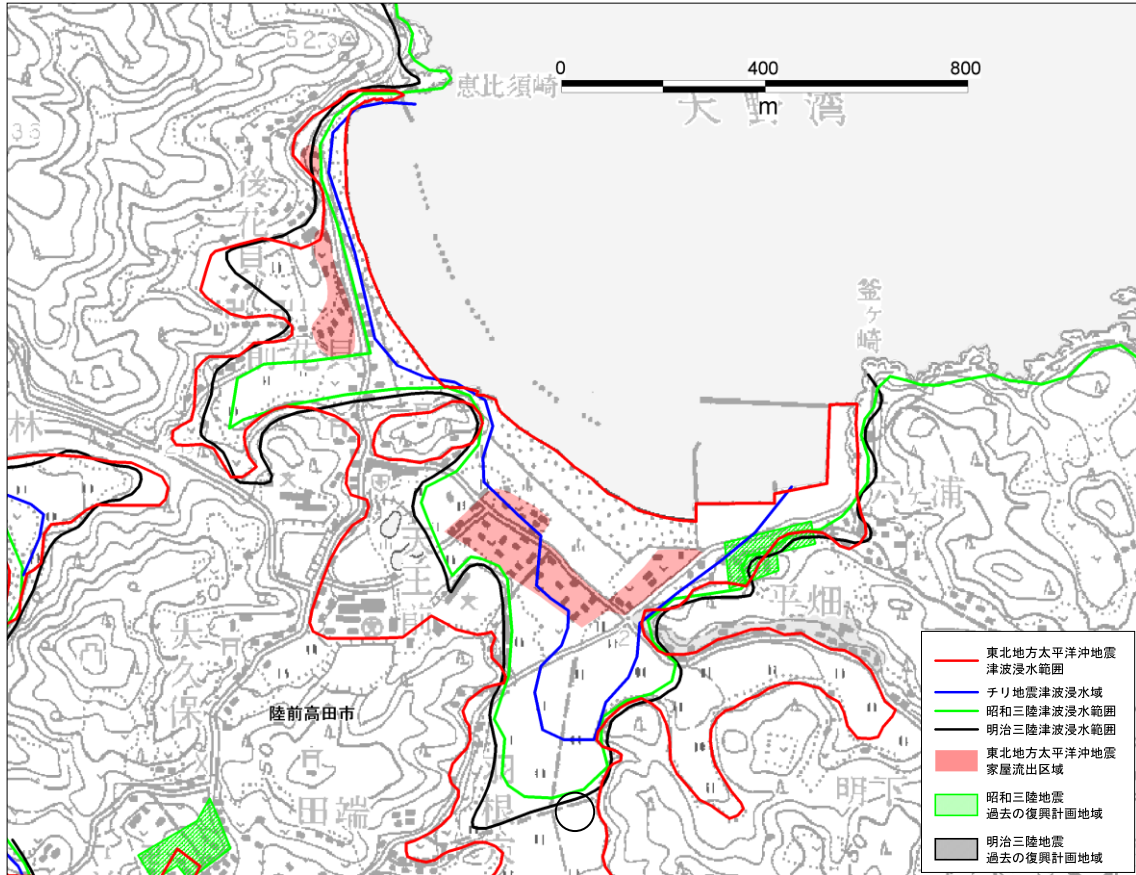
(内務大臣官房都市計画課『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告』(1934 年))

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 12.1m】

浸水あり。一部流失した家屋も見受けられる。



②③ 広田村六ヶ浦（岩手県陸前高田市）



②4 広田村泊（岩手県陸前高田市）

【明治三陸地震：遡上高 6.0m】

（記録なし）

【昭和三陸地震：遡上高 4.0m】

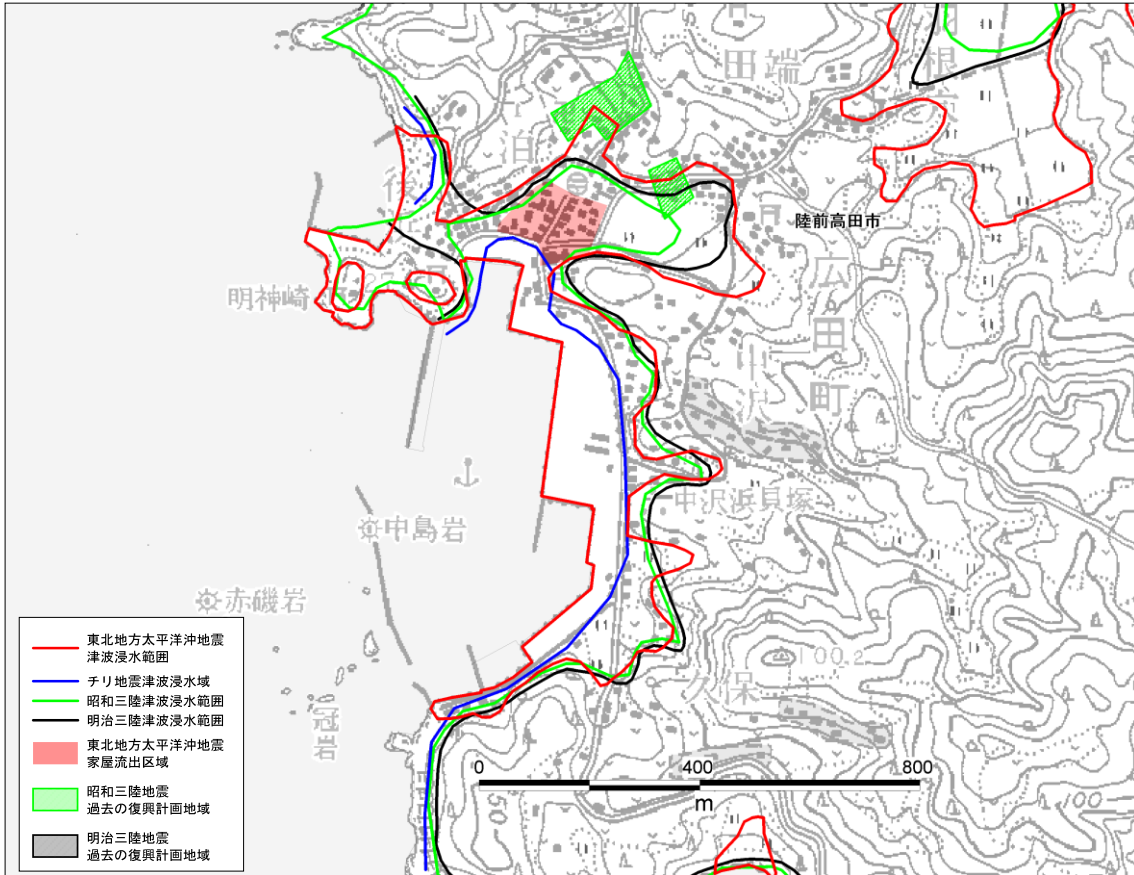
45 戸が移転。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告』（1934 年））

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 11.2m】

浸水あり。一部流失した家屋も見受けられる。

②④ 広田村泊（岩手県陸前高田市）



②<sup>おさべ</sup>5 気仙町長部（岩手県陸前高田市）

【明治三陸地震：遡上高 3.45m】

何等防浪対策の講ぜらるるなく。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

【昭和三陸地震：遡上高 3.85m】

漁港と密接するを必要とするを以て部落移轉を行ふを得ず。即ち現地復興の方針に據り現地盤より高さ 2m 余を盛土し、其の前面及側面は防浪堤（高さ 6.3m）今泉川筋は津浪緩衝地帯たらしむ。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

【チリ地震津波：遡上高 2.6m】

防浪堤内には道路より浸水し、堤外の低位デルタと埋立地に位置した建物は流失倒壊し、死傷者さえ出す被害を受けた。

（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961）/p. 70）

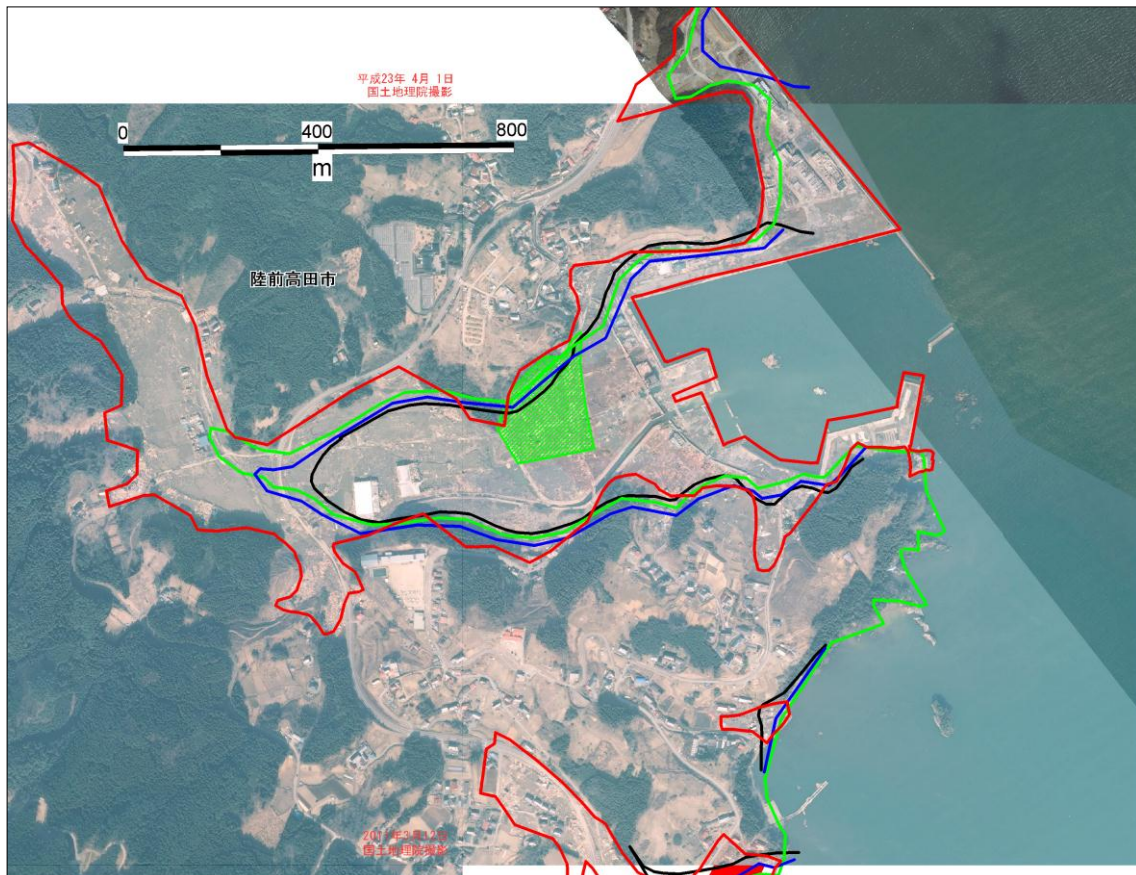
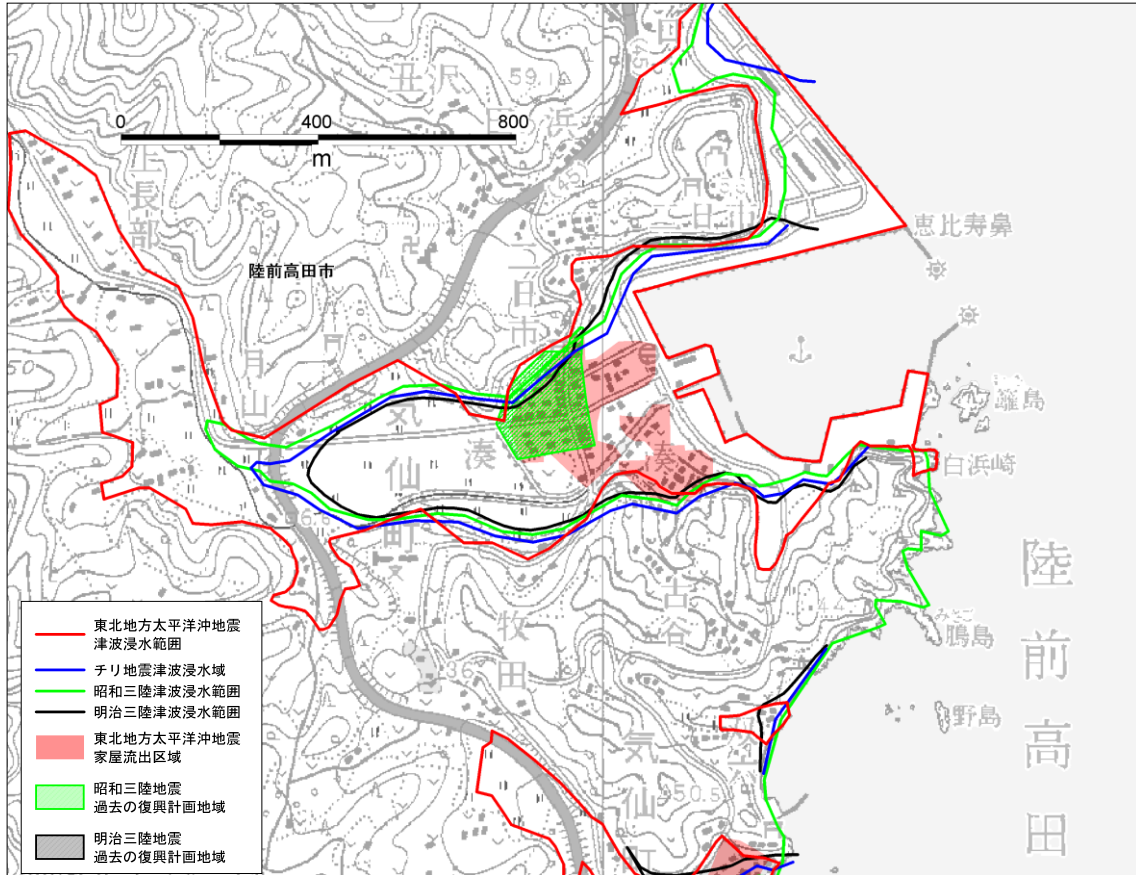
高さ 6.5m の防潮堤を設置。

（中央防災会議災害教訓の継承に関する専門報告書『1960 チリ地震津波』/p. 197）

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 5.7m】

現地復興地域はすべて浸水・流失する被害を受けた。

②5 気仙町長部（岩手県陸前高田市）



②<sup>からくわ</sup>唐桑村大沢（宮城県気仙沼市）

**【明治三陸地震：遡上高 6.5m】**

組合組織で敷地を造成して集団移動を行ったが、計画通りには全戸が移らなかったこと、原位置に造った数戸が浜に近く、漁撈作業に便で、数年津波がなく、豊漁がつづいたために、数戸は原位置に復帰してしまった。

（山口弥一郎「津波常習地三陸海岸地域の集落移動」（亜細亜大学「諸学紀要」第11号，1964）/p.68）

**【昭和三陸地震：遡上高 3.9m】**

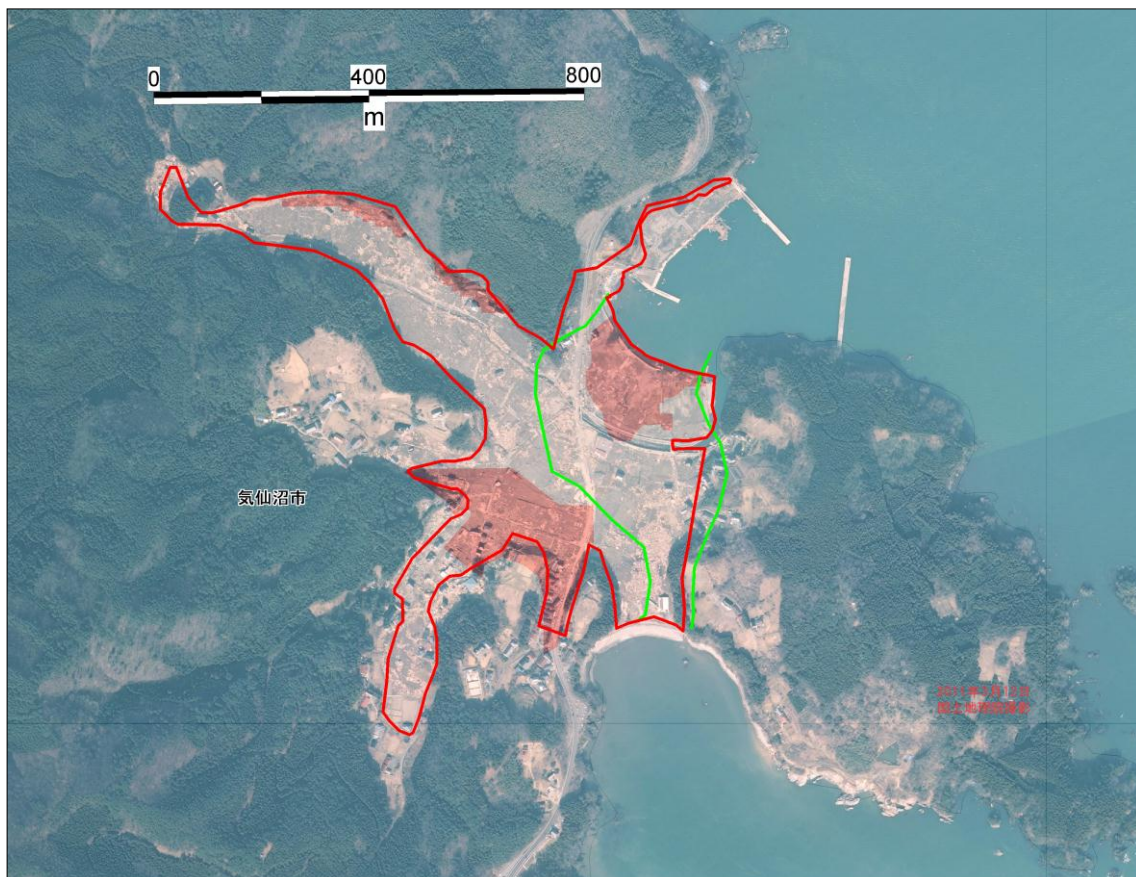
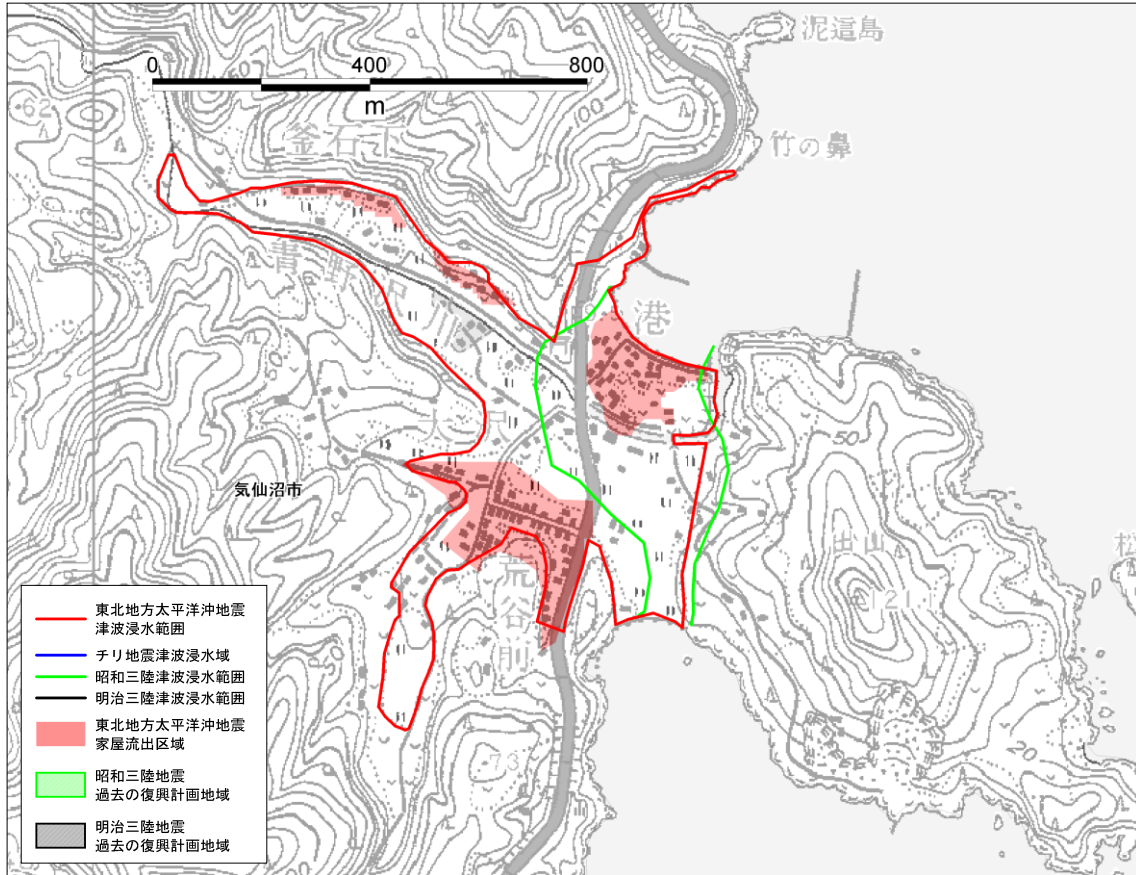
昭和8年は波高3.9mで段丘崖下まで達したが、移動したものは無事であった。しかし、低地に再建したものは流失倒壊71戸、死亡者5人を出している。

（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961年）/p.67）

**【東北地方太平洋沖地震：遡上高 13.3m】**

整備した地域ほぼ全てに浸水、流失あり。

②⑥唐桑村大沢（宮城県気仙沼市）



②<sup>からくわ</sup>唐桑村<sup>ただこし</sup>只越 (宮城県気仙沼市)

**【明治三陸地震：遡上高 8.3m】**

北の山麓に宅地造成を計ったが、基盤岩が固いため避難道を建設したのみで、移動を断念して原地に復興した。

(建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』(1961年) /p. 67)

**【昭和三陸地震：遡上高 6.6m】**

32戸は敷地造成事業に依り各個移転す。

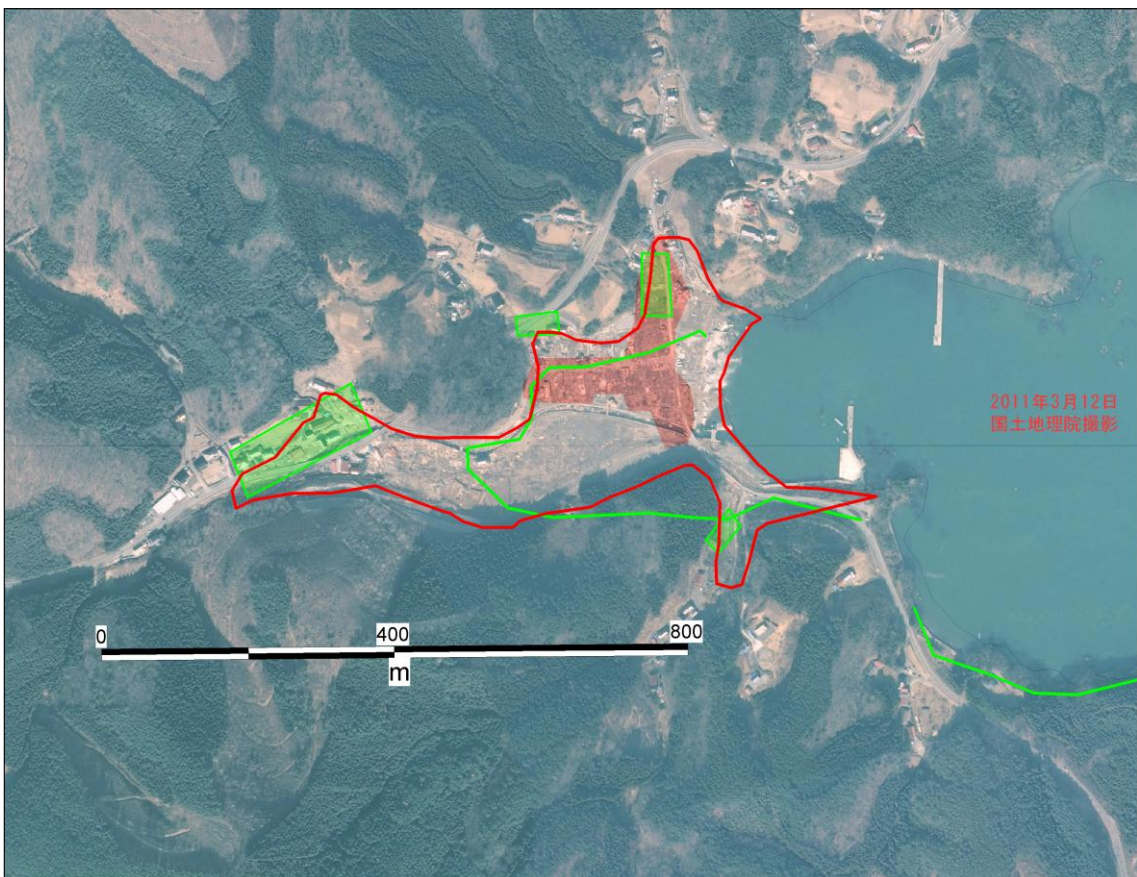
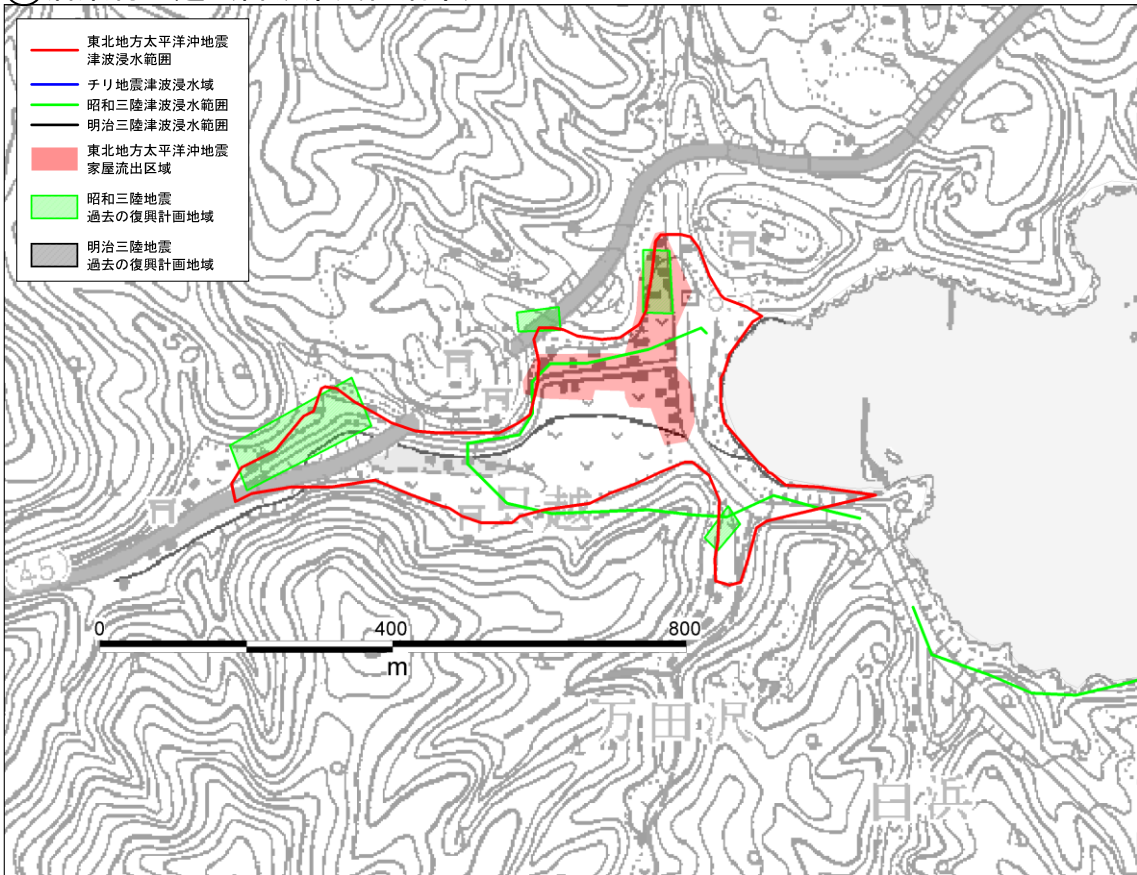
宮城縣に於て前掲縣令第二條第二項の規定に依り建築禁止區域を指定したる町村(内務大臣官房都市計画課『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告』(1934年))

**【東北地方太平洋沖地震：遡上高 16.3m】**

整備した地域にほぼ全て浸水。流失あり。



②7唐桑村只越（宮城県気仙沼市）



②<sup>からくわ</sup>唐桑町宿（宮城県気仙沼市）

【明治三陸地震：遡上高 2.2m】

（記録なし）

【昭和三陸地震：遡上高 1.3m】

要移轉戸數 23 戸、集團移轉戸數 16 戸にして、敷地造成面積 1280 坪、現地盤より最大 2.4m の地盤をなし、明治 29 年津浪面上 1.10m 以上、昭和 8 年津浪面上 2.30m 以上とす。

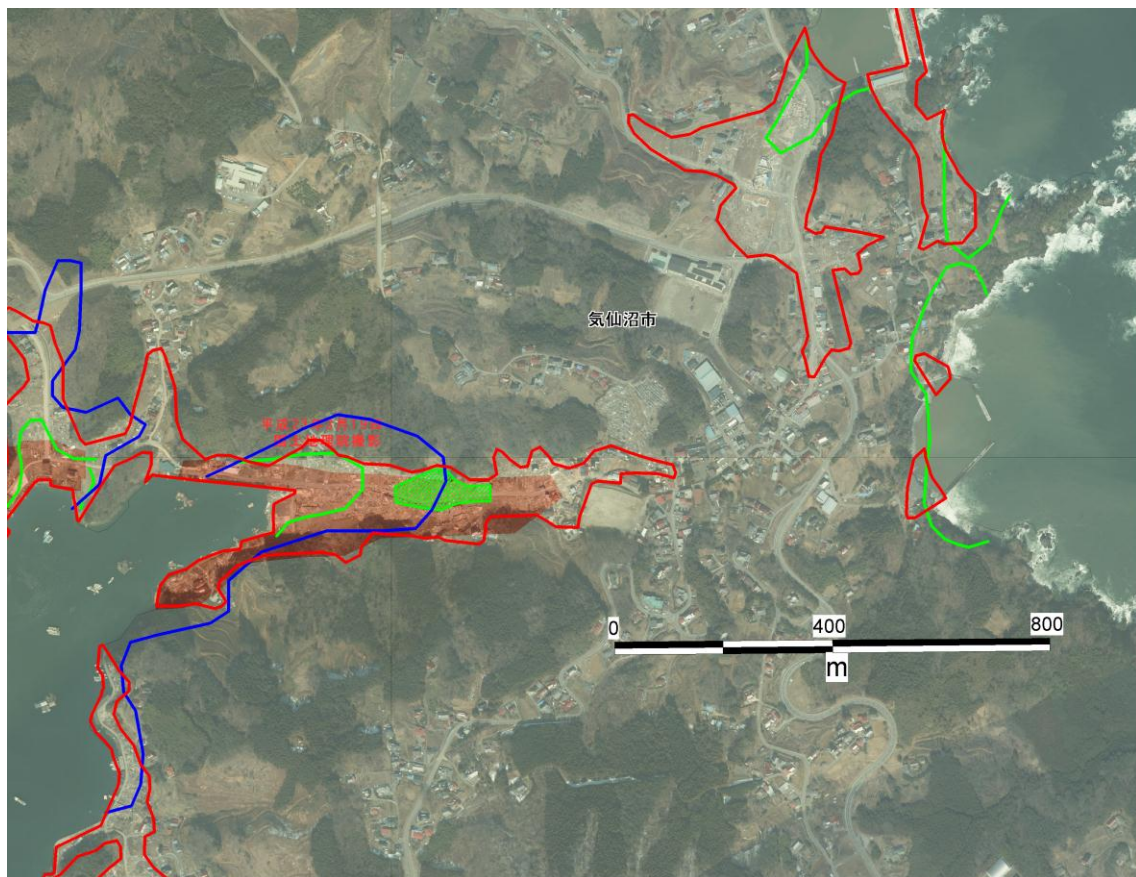
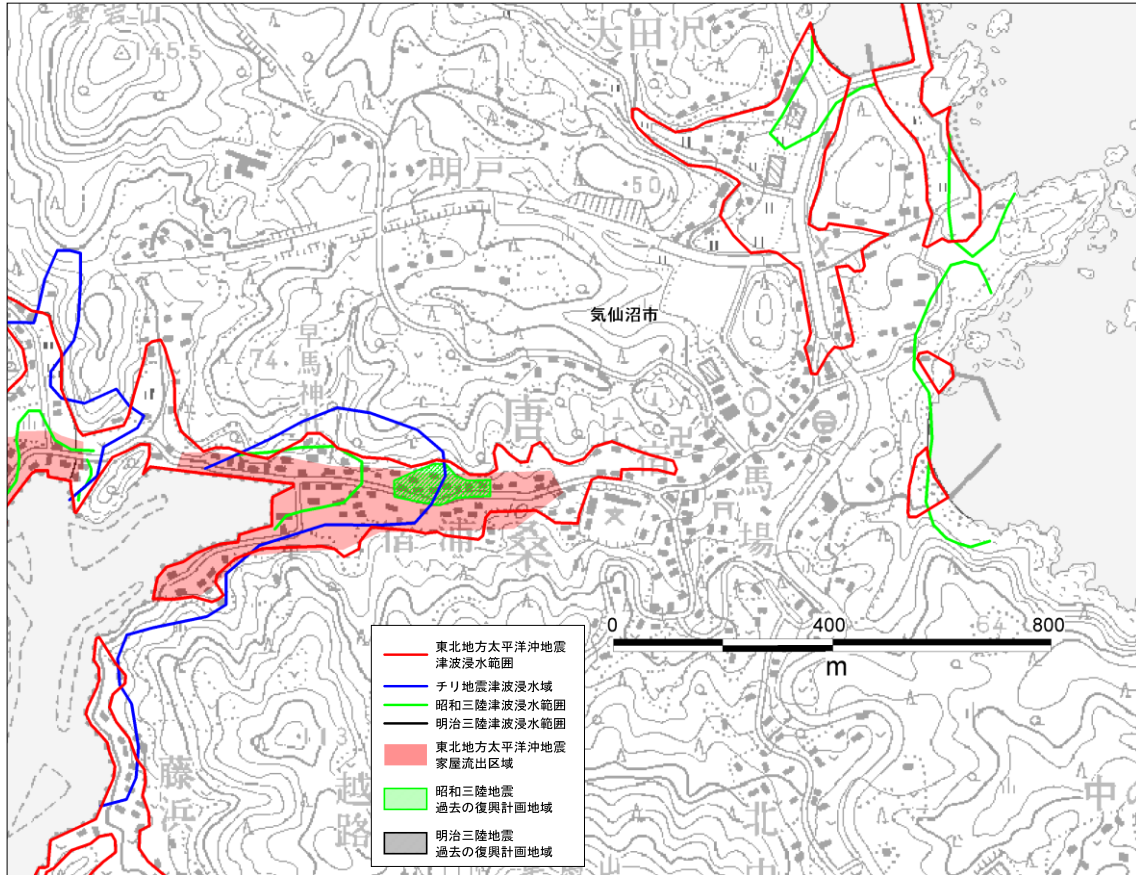
宮城縣に於て前掲縣令第二條第二項の規定に依り建築禁止區域を指定したる町村（内務大臣官房都市計画課『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告』（1934 年））

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 11.7m】

当初の地盤嵩上げ計画地はほぼ流失。

新しく造成された高台にある住宅は被害を免れている。

②⑧唐桑町宿（宮城県気仙沼市）



**29** おおや おおや **大谷村大谷** (宮城県気仙沼市)

**【明治三陸地震：遡上高 4.9m】**

村営事業として敷地を造成し、高地に集団移動し、防潮林を植栽した。  
(山口弥一郎「津波常習地三陸海岸地域の集落移動」(亜細亜大学「諸学紀要」第11号, 1964) /p. 68)

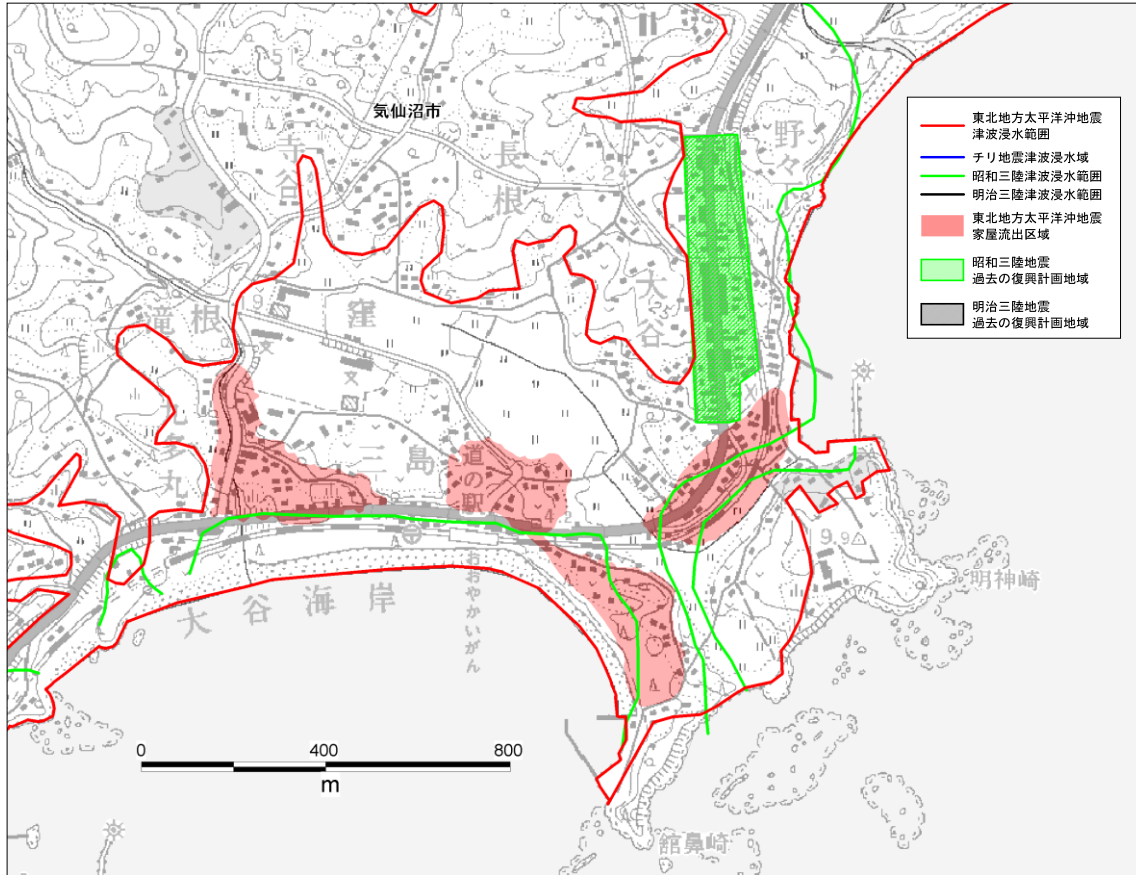
**【昭和三陸地震：遡上高 2.9m】**

低地に再建したものが27戸流失したのみで、高地の移動集落に被害はなかった。  
(建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』(1961)/p. 67)

**【東北地方太平洋沖地震：遡上高 16.6m】**

高地移転先も浸水被害を受けた。

②9 大谷村大谷（宮城県気仙沼市）



③<sup>うたつ</sup>歌津村田ノ浦（宮城県本吉郡南三陸町）

【明治三陸地震：遡上高 7.5m】

（記録なし）

【昭和三陸地震：遡上高 5.4m】

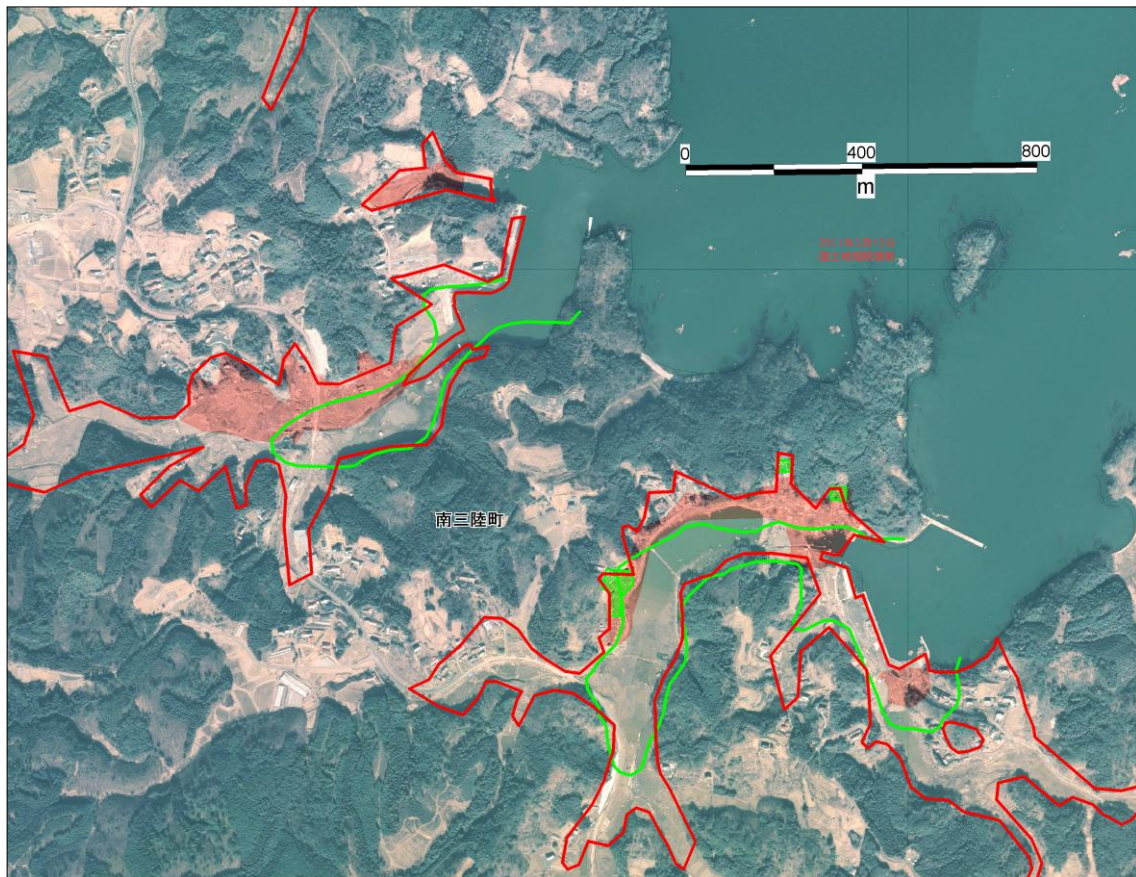
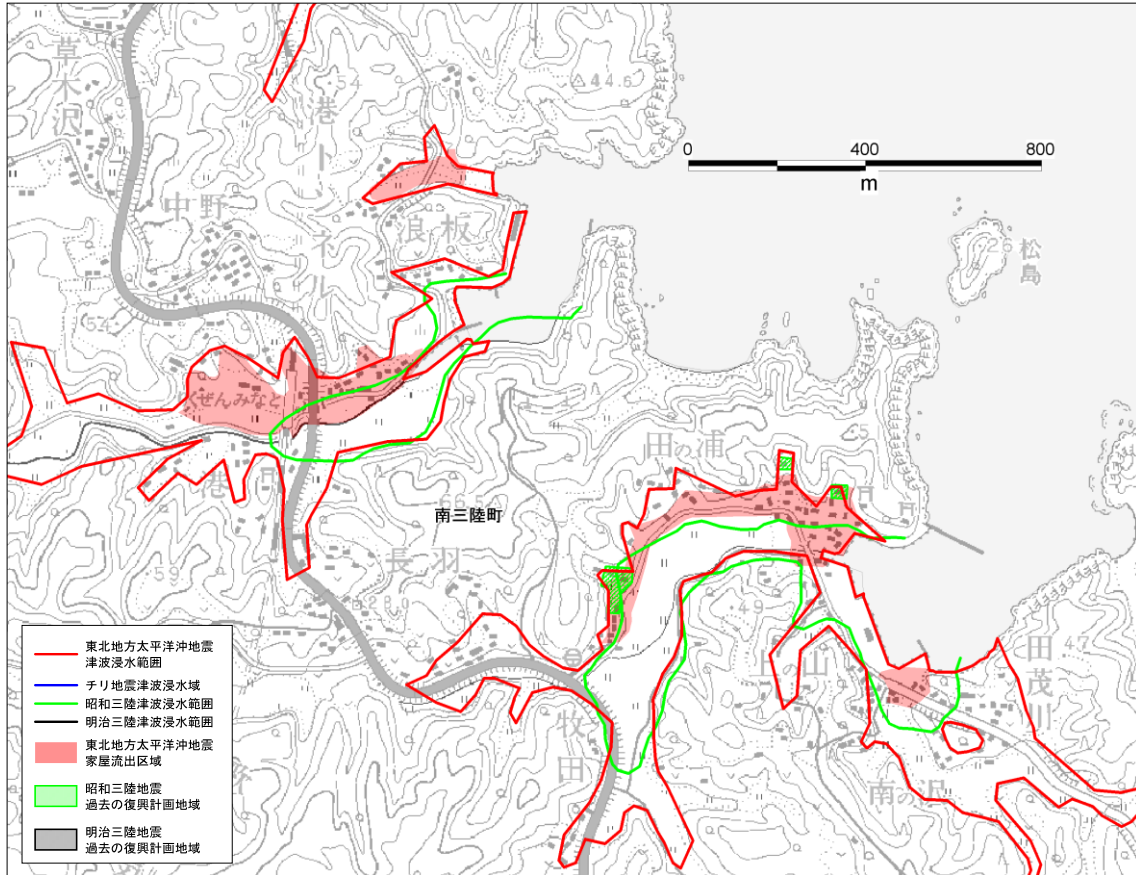
移轉戸数 28 戸、集團移轉。

宮城縣に於て前掲縣令第二條第二項の規定に依り建築禁止區域を指定したる町村。  
（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 19.1m】

集團移轉先も浸水・流失の被害あり。

③歌津村田ノ浦（宮城県本吉郡南三陸町）



③<sup>うたつ</sup>1 歌津村石浜（宮城県本吉郡南三陸町）

【明治三陸地震：遡上高 10.5m】

（記録なし）

【昭和三陸地震：遡上高 10.1m】

昭和 8 年波高 10.1m、移転戸数 7 戸、その造成敷地は舊部落の西北方畑地を選定し、  
集團したる各戸数を行はしむ。

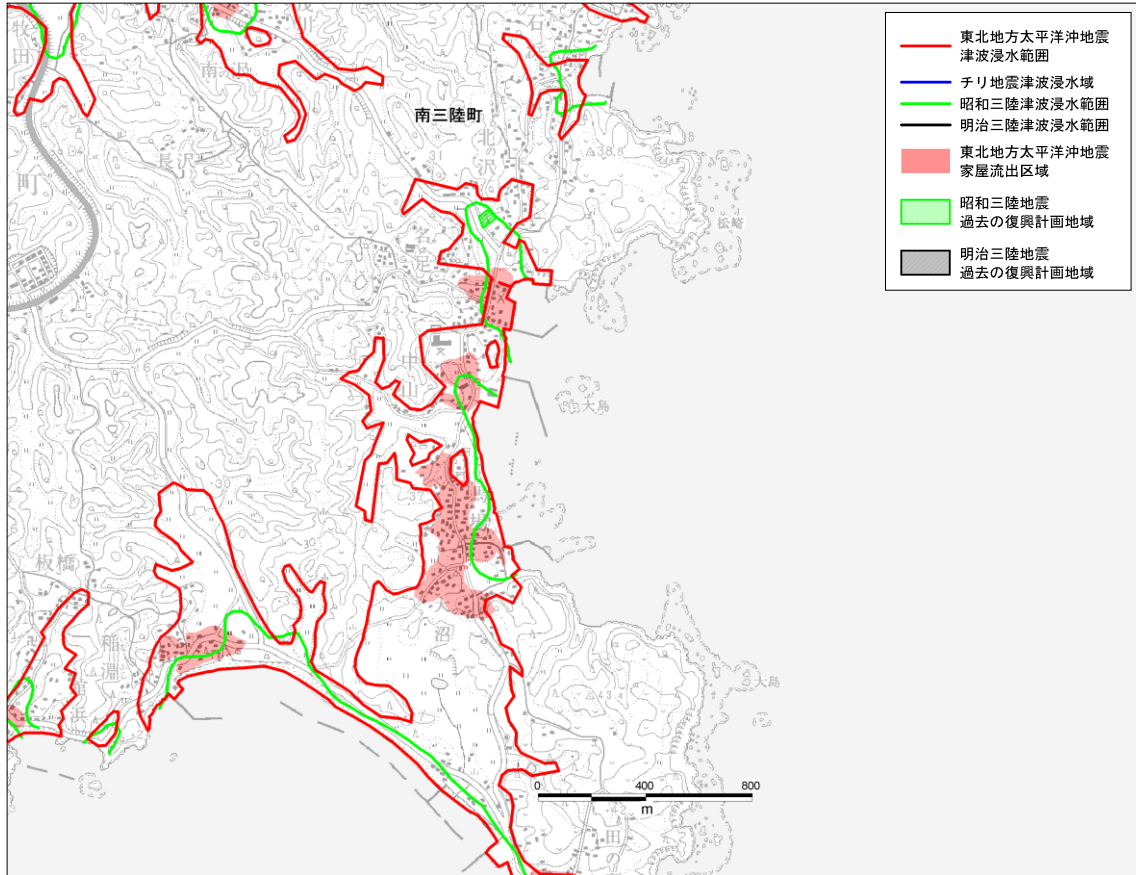
宮城縣に於て前掲縣令第二條第二項の規定に依り建築禁止區域を指定したる町村  
（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 17.8m】

移転先も浸水あり。低地集落は流失。



③ 歌津村石浜（宮城県本吉郡南三陸町）



③<sup>じゅうさんはま</sup>三浜村相川（宮城県石巻市）

**【明治三陸地震：遡上高 5.8m】**

復興防浪の施設に看る可きものなく。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告』（1934年））

**【昭和三陸地震：遡上高 4.1m】**

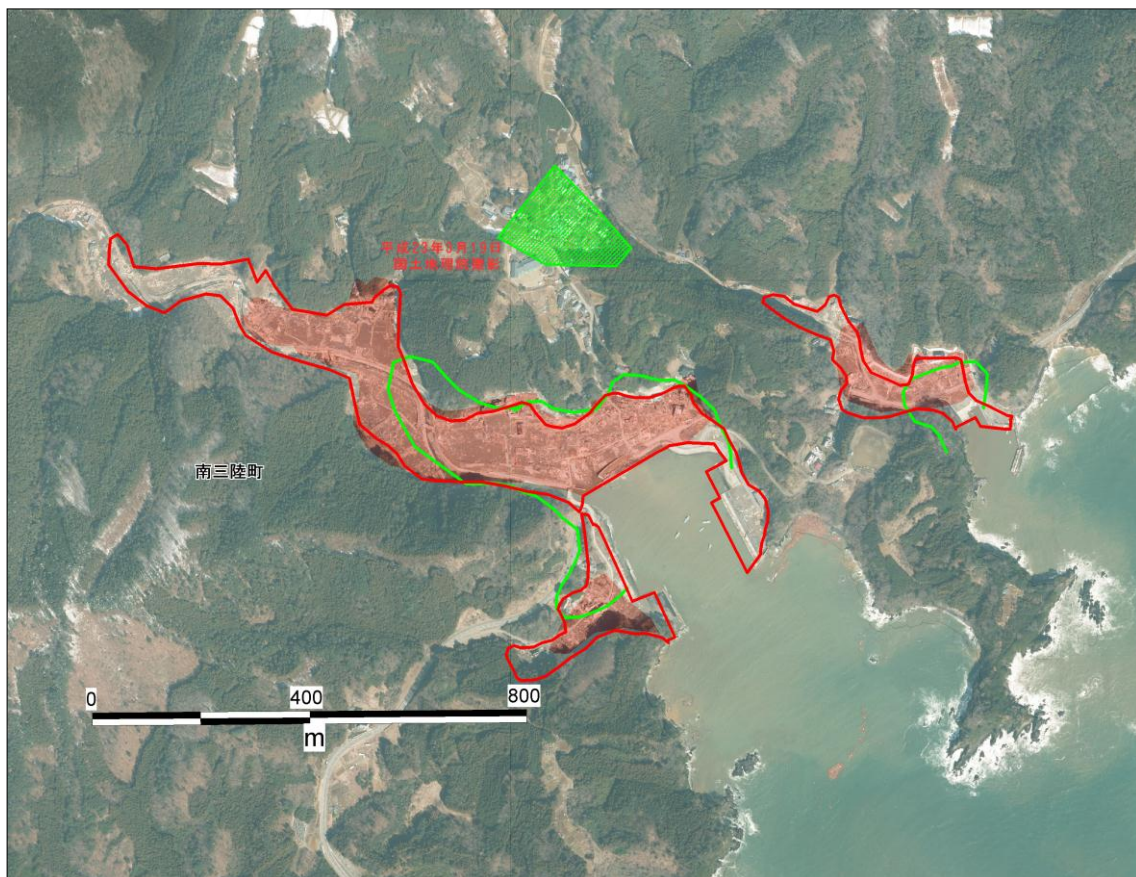
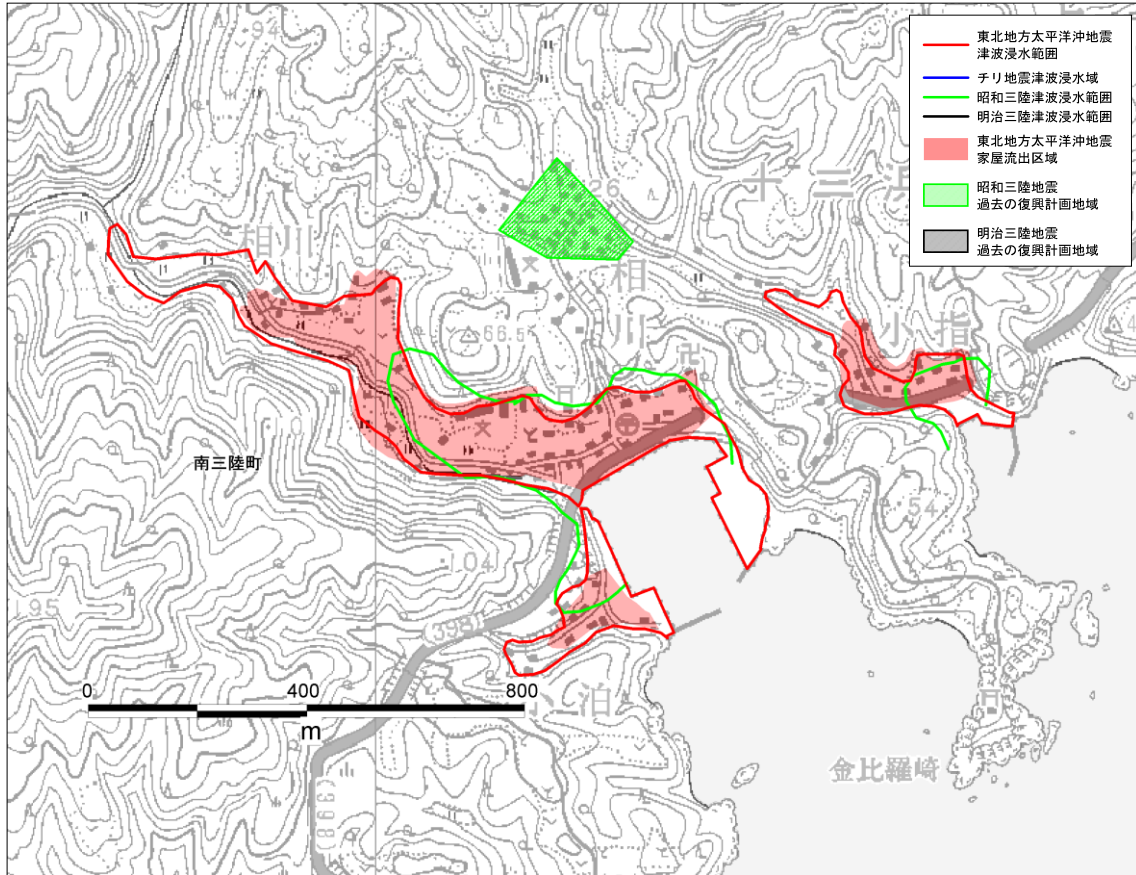
造成敷地は相川部落北方約 500m を隔つる高地に選定し、面積約 2313 坪の敷地を造成し、29 戸を移轉せしむ。敷地計畫高満潮面上 31m。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

**【東北地方太平洋沖地震：遡上高 ー】**

移轉地域は、今回全く被害を受けていない。

③十二 十三浜村相川（宮城県石巻市）



③<sup>じゅうごはま ふなこし</sup>十五浜村船越（宮城県石巻市）

【明治三陸地震：遡上高 ー】

（記録なし）

【昭和三陸地震：遡上高 3.5m】

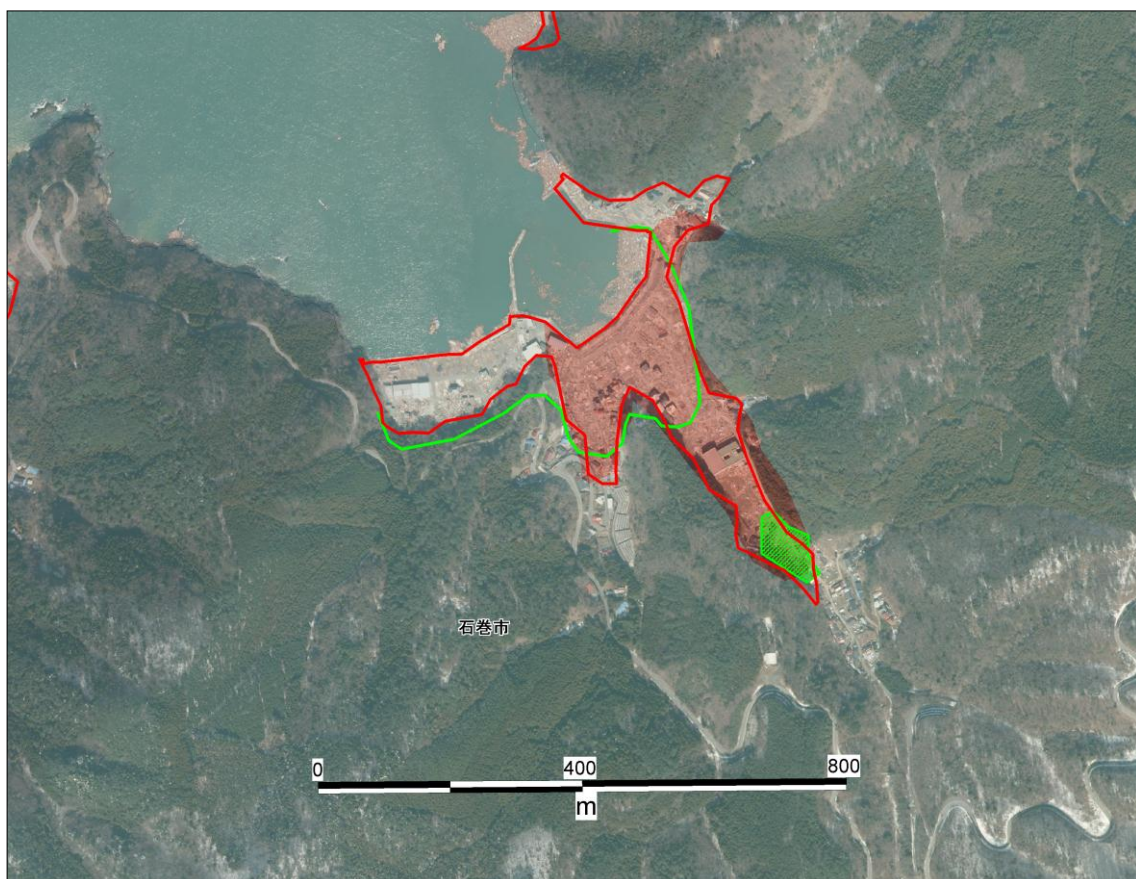
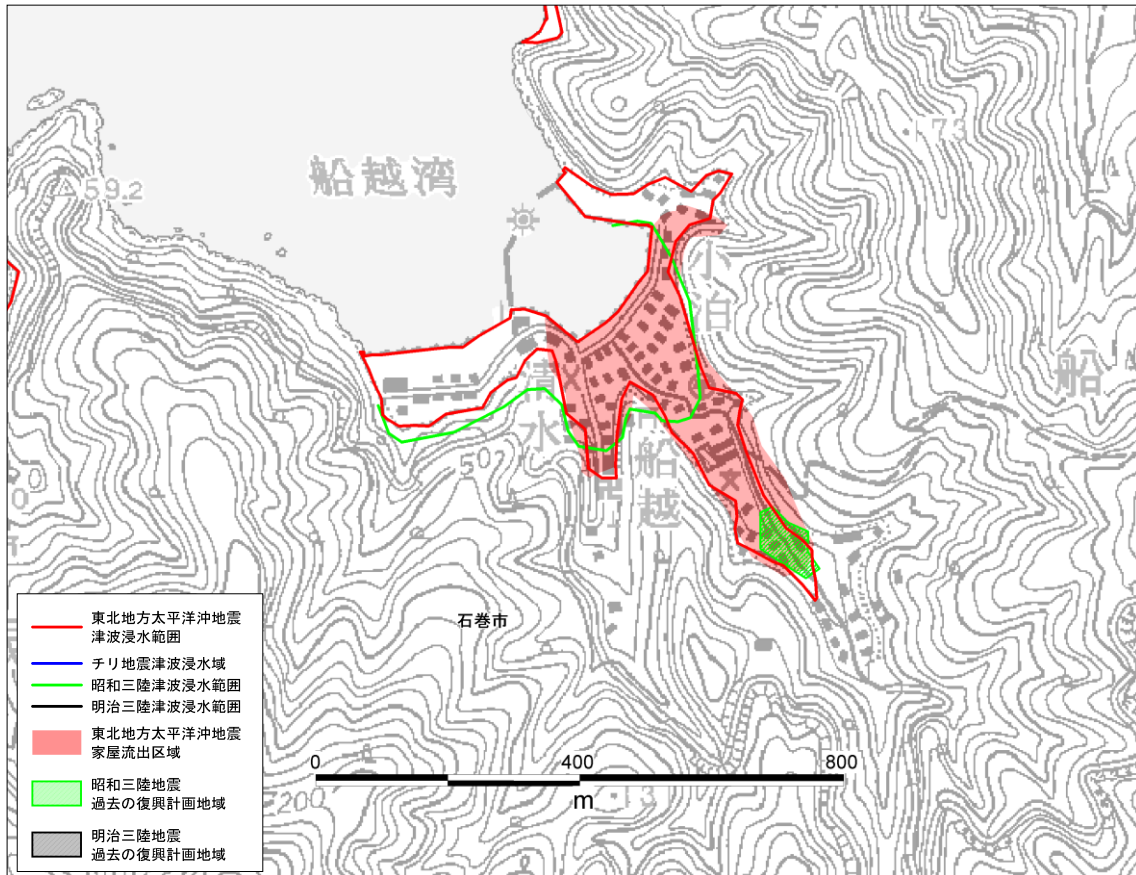
集團移轉をなすもの 48 戸、部落後方谷間に住宅適地を選定し、敷地地計畫高昭和 8 年津浪浸水面上 3.85m、面積 2311 坪なり。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

【東北地方太平洋沖地震：遡上高 ー】

後方の谷間に移転した住宅も浸水している。

③十五浜村船越（宮城県石巻市）



**③4** じゅうごはま おがつ **十五浜村雄勝（宮城県石巻市）**

**【明治三陸地震：遡上高 3.6m】**

津浪災害豫防に関する全面的対策の講ぜられしものなく。

（内務大臣官房都市計画課『三陸津波に因る被害町村の復興計画報告』（1934））

**【昭和三陸地震：遡上高 3.85m】**

高地の宅地造成の適地がないので元屋敷を地上げして宅地造成を計った。すなわち、昭和8年の波高と同高とするため、低地地盤より最大3mの盛り土をして15520坪の宅地造成を実施して被災低地を住家建築禁止地区とした。しかし、非住家地区も次第に住宅地化され、とくに戦後は安易な低地は住宅地化が進んだ。

（建設省国土地理院『チリ地震津波調査報告書』（1961）/p. 71）

**【チリ地震津波：遡上高 3.9m】**

高地移動集落は被害をまぬかれた。

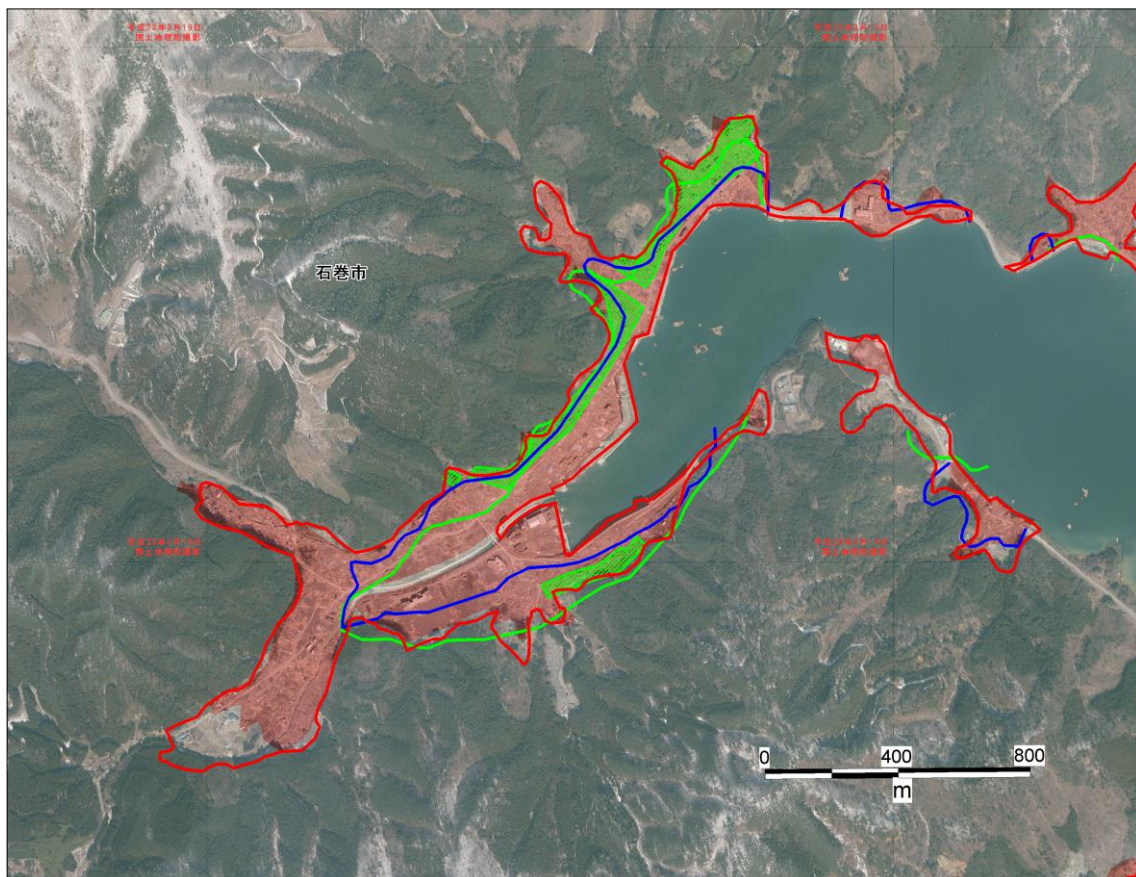
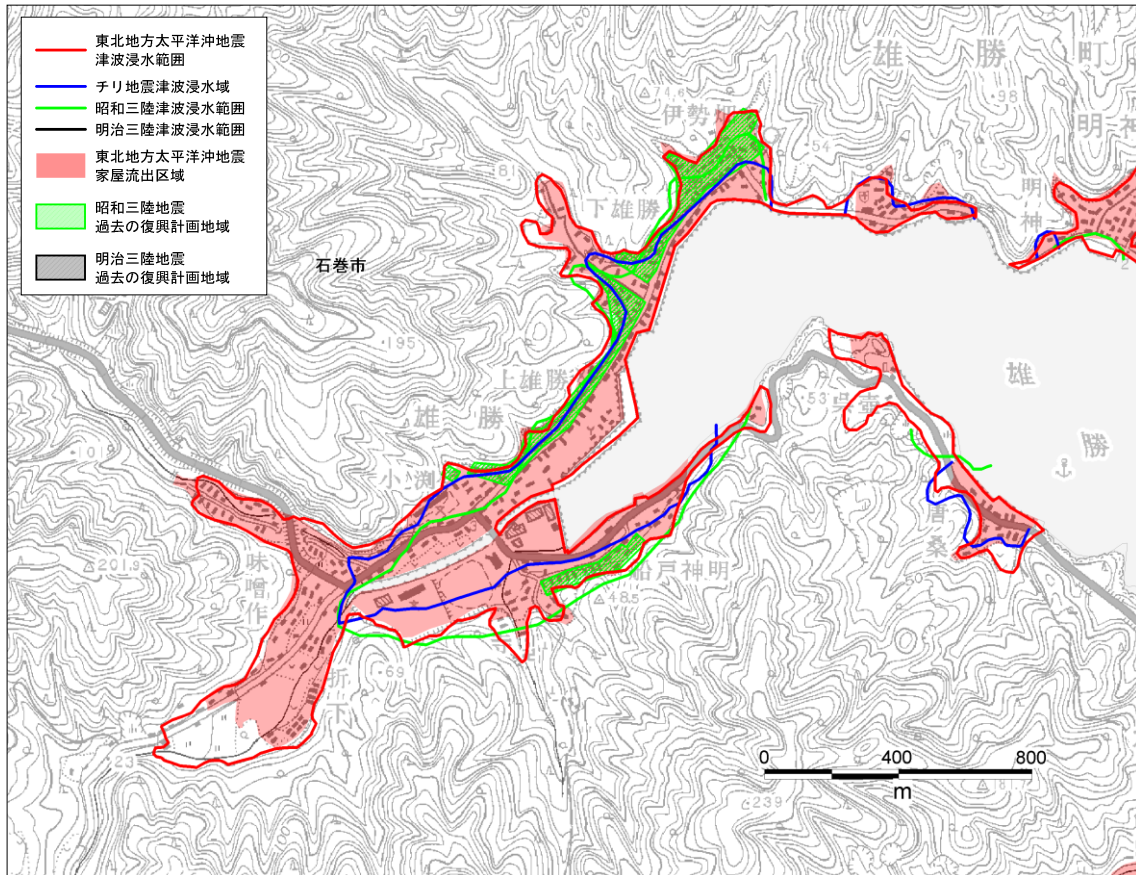
昭和8年の津波で盛り土した高さまで海岸通りを引き上げる。

（中央防災会議災害教訓の継承に関する専門報告書『1960 チリ地震津波』/p. 170, 171）

**【東北地方太平洋沖地震：遡上高 16.7m】**

すべての地域で浸水、流失。

③④ 十五浜村雄勝（宮城県石巻市）



③⑤ 大原村<sup>やがわ</sup>谷川（宮城県石巻市）

【明治三陸地震：遡上高 2.5m】

（記録なし）

【昭和三陸地震：遡上高 3.95m】

集団移転戸数 19 戸、部落後方の傾斜地に岡を隔て 2 箇所<sup>1</sup>に敷地を選定す。その造成敷地面積 3,925 坪計画高明治 29 年津波面上 5.4m、昭和 8 年津波面上 3.8m とす。

宮城縣に於て前掲縣令第二條第二項の規定に依り建築禁止區域を指定したる町村（内務大臣官房都市計画課『三陸津浪に因る被害町村の復興計画報告』（1934 年））

【東北地方太平洋沖地震：17.2m】

移転先の地域すべてに浸水、流失の被害が見られる。



③⑤大原村谷川（宮城県石巻市）

